名古屋市文化財調査報告36

埋蔵文化財調査報告書28

小　幡　遺　跡
（第１・２次）

１９９８

名古屋市教育委員会

小　幡　遺　跡

（第１・２次）

E－２区 SK5075出土の遺物

１９９８

名古屋市教育委員会

航空写真（遺跡周辺を東からみる）

例　　言

1　本書は、名古屋市守山区小幡南一丁目地内に所在する、小幡遺跡の第１次および第２次発掘調査報告書である。

2　発掘調査の期間は、第１次調査が平成８年２月13日から平成８年３月29日まで、第２次調査が平成８年４月８日から平成８年６月25日、平成９年１月６日から平成９年２月21日までである。

3　発掘調査は、名鉄小幡駅前の再開発事業に伴い、名古屋市計画局の依頼を受けて、市教育委員会文化財課（現文化財保護室）が調整し、見晴台考古資料館の山田鉱一、野口泰子、木村有作が担当し実施した。

4　調査前に文化財課が試掘調査を実施し、その結果、小幡遺跡の存在が新規に確認された。

5　本書の水準高は、東京湾平均海水面（T.P.）を使用し、方位は、国土座標第Ⅶ系による座標北である。

6　出土遺物の整理、図版の作成等については、伊藤香代、近藤和子、佐々木佳子、中島理恵、樋上佐知子、山田康博、若井晴子、脇田明美の協力を得た。

7　出土遺物、記録等については、見晴台考古資料館が保管している。

8　本書は、資料館学芸員の協力と助言を得て、Ⅰ～Ⅲは山田・野口、Ⅳは山田が執筆した。

9　航空写真は、中日本航空株式会社から提供を受けた。

目　　次

I　はじめに……1
(1)　位置と環境……1
(2)　周辺の遺跡……5
II 調査の経過 ……8
(1)　調査に至る経過……8
(2)　調査区……8
(3)　日誌抄……9
III 遺構と遺物 ……11
(1)　基本土層……11
(2)　A区……11
(3)　B・C区……22
(4)　D区……27
(5)　E区……33
遺構一覧表……56
遺物一覧表……58
IV まとめ ……60

図 版 目 次

第1図　位置図……1
第2図　天保12年春日井郡小幡村絵図……2
第3図　明治33年名古屋市……2
第4図　大正12年名古屋市北部……3
第5図　昭和22年名古屋市北部……3
第6図　遺跡位置図……4
第7図　周辺遺跡分布図……6
第8図　調査区……8
第9図　SK1018 ……13
第10図　柱穴列1・2……15
第11図　P1053……16
第12図　A区（南壁・北壁）土層断面図……18
第13図　A区出土の遺物……19
第14図　柱穴列3・4……24
第15図　SD2004出土の遺物 ……25
第16図　B・C区遺構図……26
第17図　D-1区（南壁・北壁）土層断面図 …28
第18図　SD3101出土の遺物 ……30
第19図　D-4区（北壁）土層断面図 ……31
第20図　D区遺構図……32
第21図　SK4015 ……35
第22図　柱穴列5……35
第23図　E-1区出土の遺物 ……36
第24図　A・E区遺構図……37～38
第25図　E-1・2区（南壁）土層断面図 ……39
第26図　SK5075 ……42
第27図　SK5075出土の遺物(1) ……43
第28図　SK5075出土の遺物(2) ……44

第29図　SK5075周辺出土の須恵器 ……48
第30図　SK5089（1）・P5095（2）
出土の遺物……48
第31図　SD5002A・B土層断面図 ……50
第32図　SD5020～5022土層断面図 ……50
第33図　SD5001（1・2）・5002（3・4）
出土の遺物……51
第34図　防空壕……53
第35図　SK5009（1・2）・5004（3）
出土の遺物……55
第36図　遺構図……62

写　真　目　次

写真1　遺跡付近航空写真……7
写真2　A区発掘風景（南から）……9
写真3　A区発掘風景（東から）……9
写真4　B区発掘風景（東から）……9
写真5　C区発掘風景（西から）……10
写真6　D-4区発掘風景（東から）……10
写真7　E-1区発掘風景（南から）……10
写真8　E-2区発掘風景（南東から）……10
写真9　A区全景（北から）……11
写真10　SK1018（西から）……12
写真11　SK1018（南から）……12
写真12　SK1018出土の瓦……12
写真13　SK1018出土の須恵器……12
写真14　SD1006・1010・1011（西から）……13
写真15　柱穴列1・2（北西から）……14
写真16　P1008出土の焼台……14
写真17　P1053（南から）……16
写真18　P1053（南から）……16
写真19　防空壕（北西から）……17
写真20　SK1004（東から）……17
写真21　P1032出土の須恵器杯……20
写真22　SK1001出土の徳利……20
写真23　SK1001出土のタイル……20
写真24　SK1002出土の玩具……20
写真25　SK1002出土の燈明皿……20
写真26　SK1002出土の湯のみ……20
写真27　SK1003出土の碗……20
写真28　SK1005出土の匣鉢……20
写真29　SK1005・1009出土の陶製手溜弾……20
写真30　SK1009出土の碗……21
写真31　SK1009出土の碗……21
写真32　P1054出土の匣鉢……21
写真33　P1054出土の徳利……21
写真34　攪乱坑出土の匣鉢……21
写真35　表土出土のキセル……21
写真36　表土出土の須恵器杯・山茶碗……21
写真37　表土出土の一銭銅貨……21
写真38　B区全景（西から）……22
写真39　C区全景（西から）……22
写真40　SK2013（南から）……23
写真41　柱穴列3（北東から）……23
写真42　柱穴列4（南から）……23
写真43　SD2004出土の碗・火入れ……25
写真44　SK2005出土の陶製卸し金……25
写真45　P2043・2048A出土の匣鉢……25
写真46　D-1区全景（北東から）……27
写真47　SK3102（南西から）……27
写真48　SD3101（西から）……27
写真49　SD3101土層断面（南東から）……27
写真50　D-1・2区全景（南西から）……28
写真51　D-2区全景（北東から）……29
写真52　D-3区全景（南西から）……29
写真53　D-3区全景（北東から）……29
写真54　D-4区全景（南西から）……29

写真55　SX3401（北西から）……30
写真56　SX3401土層断面（北から）……30
写真57　SD3101出土の遺物……30
写真58　SD3101出土の遺物……30
写真59　SD3102出土の遺物……30
写真60　SD3203出土の遺物……30
写真61　SX3401出土の遺物……30
写真62　E－1区全景（北西から）……33
写真63　SK4015（北西から）……33
写真64　SK4015（南東から）……33
写真65　SK4015（南から）……34
写真66　SD4007（北東から）……34
写真67　SD4008（北東から）……34
写真68　E－1区南壁土層断面……34
写真69　SD4001出土の火打石……36
写真70　P4008出土の遺物……36
写真71　P4008出土の匣鉢……36
写真72　表土出土の山茶碗……36
写真73　E－2区全景……40
写真74　SK5075（南東から）……41
写真75　SK5075（東から）……41
写真76　SK5075（南東から）……41
写真77　SK5075（南東から）……41
写真78　SK5075（南東から）……41
写真79　SK5075（南から）……42
写真80　須恵器蓋……45
写真81　須恵器蓋……45
写真82　須恵器杯……45
写真83　須恵器杯……45
写真84　須恵器杯……45
写真85　須恵器杯……45
写真86　須恵器杯……45
写真87　須恵器長頸瓶……45
写真88　石製模造品……45
写真89　須恵器高杯……46
写真90　須恵器高杯……46
写真91　須恵器横瓶……46
写真92　須恵器鉢……46
写真93　須恵器甕……46
写真94　須恵器甕……46
写真95　須恵器甕……46
写真96　須恵器甕……46
写真97　SK5089出土の須恵器……47
写真98　SK5093出土の須恵器……47
写真99　SK5096出土の須恵器……47
写真100　SD5021出土の須恵器……47
写真101　SD5022出土の須恵器……47
写真102　SD5001・5002出土の須恵器……47
写真103　P5162・5167出土の須恵器……47
写真104　SK5075・5089・5093（西から）……48
写真105　SK5089・P5095出土の遺物……48
写真106　SK5092（南東から）……49
写真107　SK5092（南から）……49
写真108　SD5001・5002（北西から）……49
写真109　SD5002土層断面（南東から）……50
写真110　SD5020土層断面（北東から）……50
写真111　SD5001出土の遺物……51
写真112　SD5002出土の遺物……51
写真113　SD5020（北西から）……52
写真114　SD5010（北西から）……52
写真115　SK5046（北から）……54
写真116　SK5004出土のインク壺……55
写真117　SK5009出土の遺物……55
写真118　表土出土の皿……55
写真119　NN105号窯出土の須恵器……64
写真120　正木町遺跡出土の須恵器……64

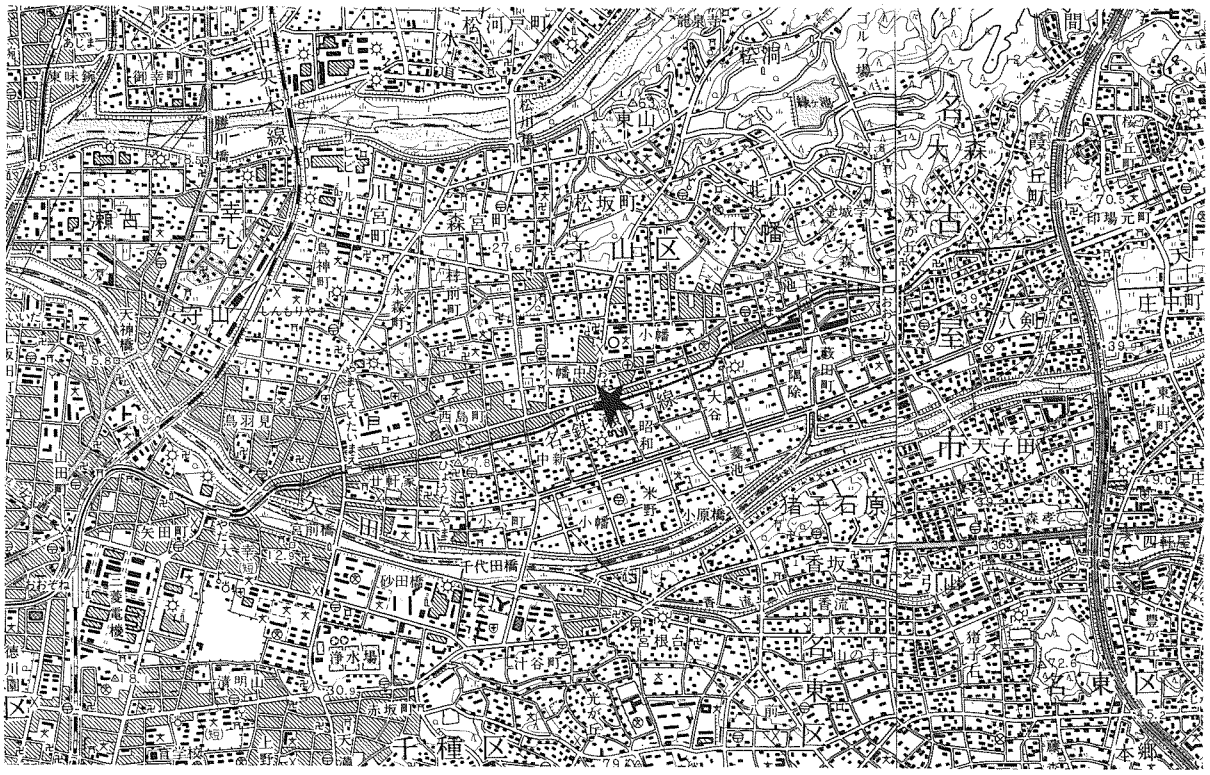
Ⅰ　は　じ　め　に

（1）　位置と環境

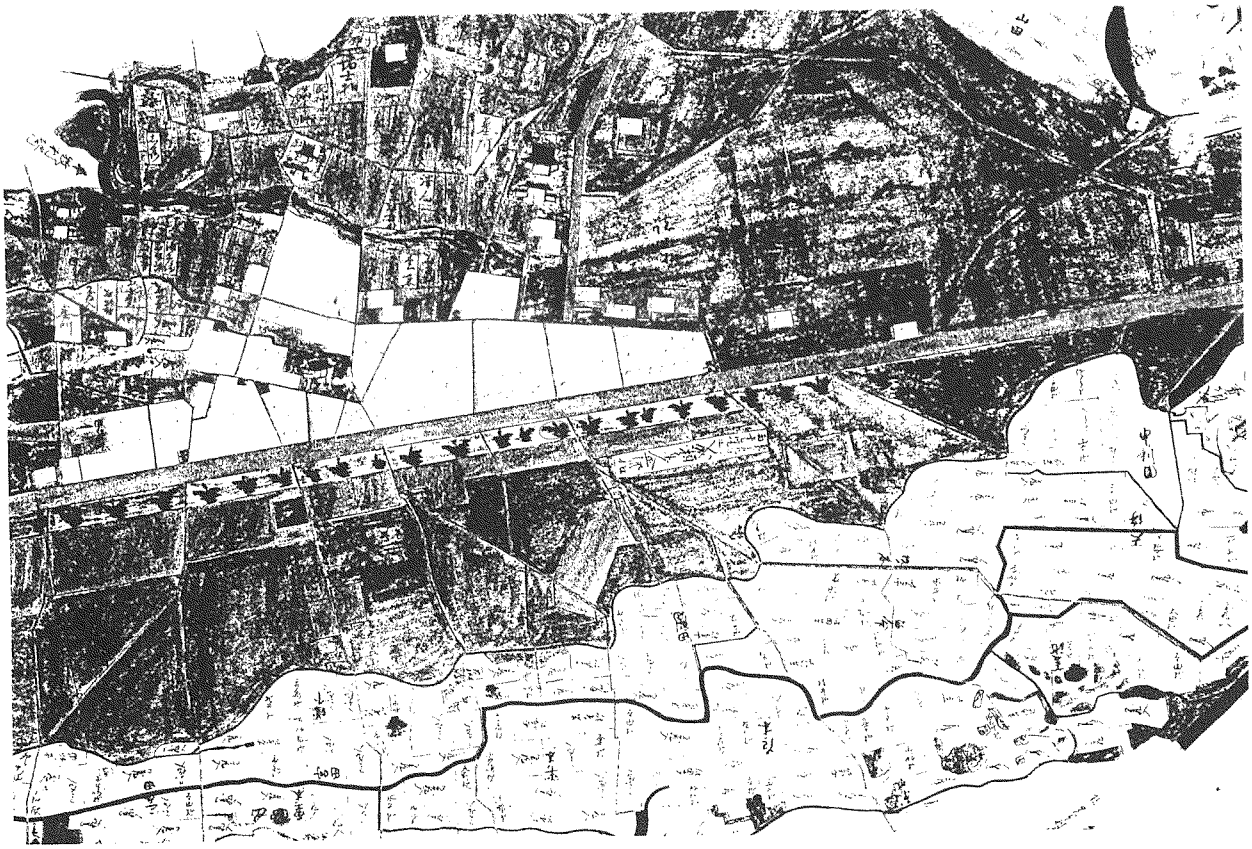
名古屋の北東部に位置する守山区は、庄内川と矢田川に挟まれる北東から南西に細長い区域で、春日井市、瀬戸市、尾張旭市と隣接する。地形は、北東側は、東谷山（標高198.3m）から連なる尾張丘陵（竜泉寺丘陵）が志段味から牛牧、大森付近まで広がり、南西側は、守山台地、小幡ケ原台地と呼ばれる中位段丘があり、庄内川や矢田川沿いの低地には沖積層が広がる。

小幡遺跡は、小幡南一丁目（旧大字小幡字栗ノ木）にある。標高20mから30mの小幡ケ原台地東端付近にあたり、矢田川の沖積地を臨む南斜面上位に位置する。遺跡の範囲は、試掘調査の結果から、名古屋鉄道瀬戸線小幡駅を西端とする東西約140m、南北約50mの広さと推定されている。この付近一帯は、古代から古墳や寺院が造営され、中世には城が築造される交通の要地となっている。近世の様子は、『尾張徇行記』に「信州飯田街道筋ノ北へ付農屋建ナラヒ一村立ノ所ナリ……元ヨリ此村ハ農業ヲ専ラ生産トス、其内街道へ付テハ二三戸農商ヲ兼ル者モアリ……此辺山畑ニハ茶多シ、又蕎麦味ヨロシト也、此村ヨリ北ニ山道アリ……即是竜泉寺道ナリ」とあり、瀬戸街道の北側で現在の竜泉寺道と交差する付近より西にかけて集落が形成されていた。また、小幡村絵図によれば、成瀬隼人正の控山が、瀬戸街道の南側にひろがる六十余町歩の山林一帯で小幡村の西境から東境まで続いていたという。

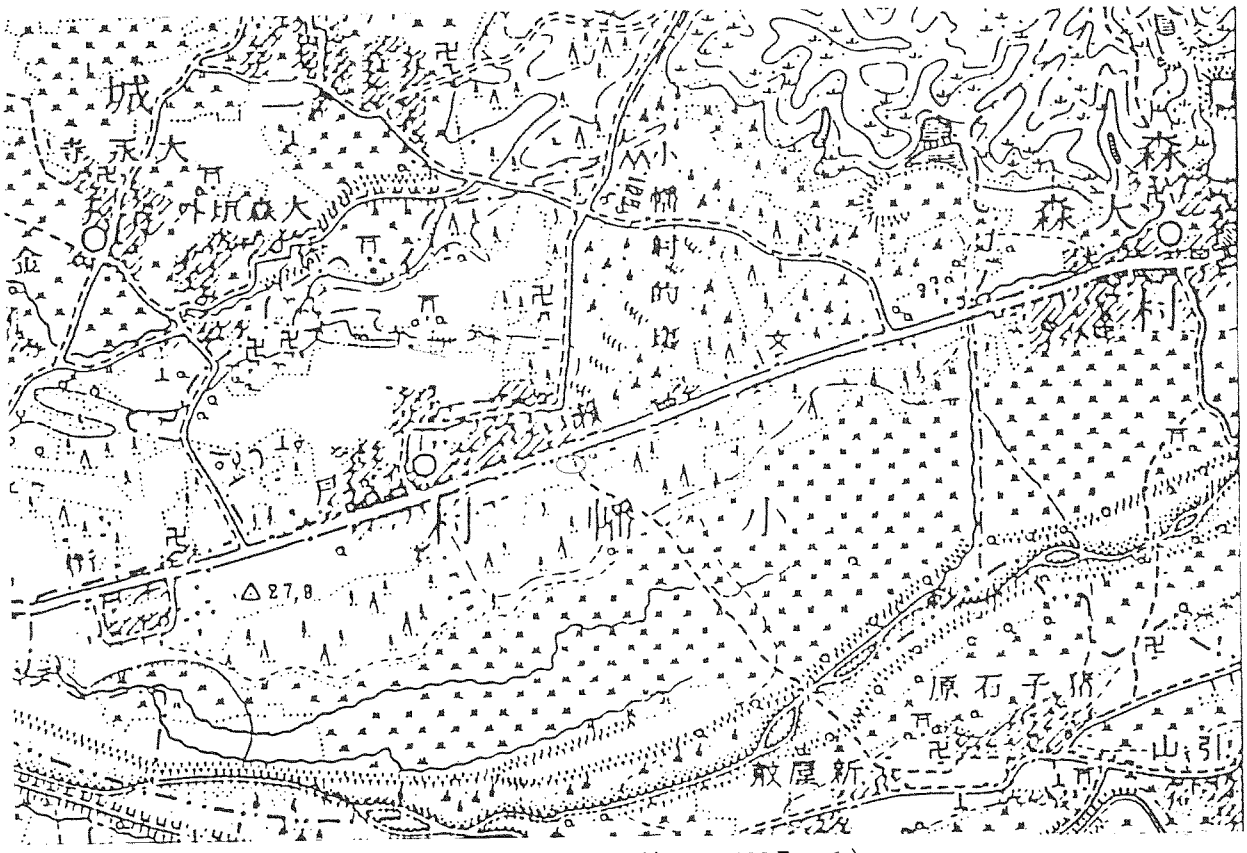
遺跡の北方にひろがる小幡ケ原は、江戸時代、尾張藩の鹿狩りが行われた地であるが、明治７年（1874年）、陸軍小幡ケ原演習場の用地となった。大正13年（1924年）には、名古屋飛行学校が開設されている。戦後、開拓用地として開放され、その後は宅地化が進み、昭和46年には、この一画に区役所が建てられ、現在では区の中心地となりつつある。



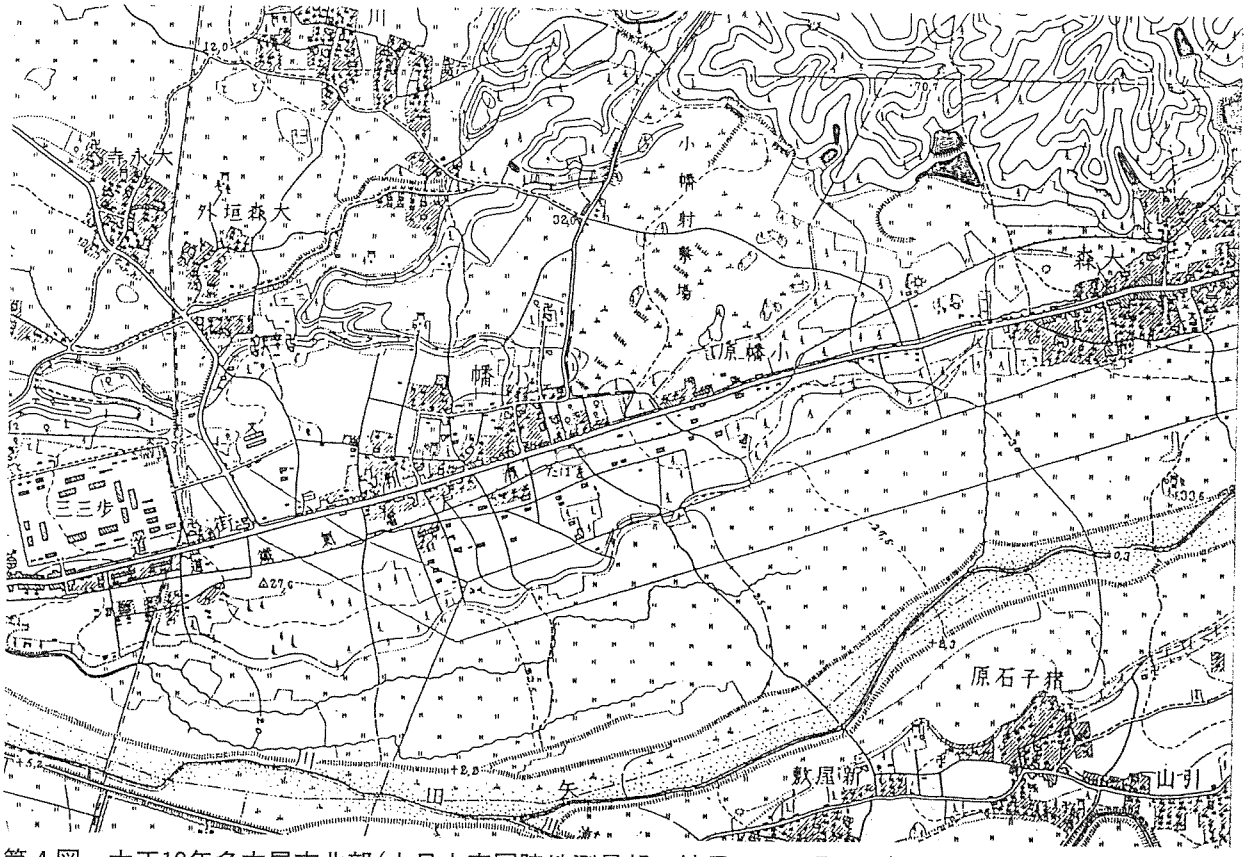
第１図　位置図（１：50,000地形図　名古屋北部・瀬戸　国土地理院）



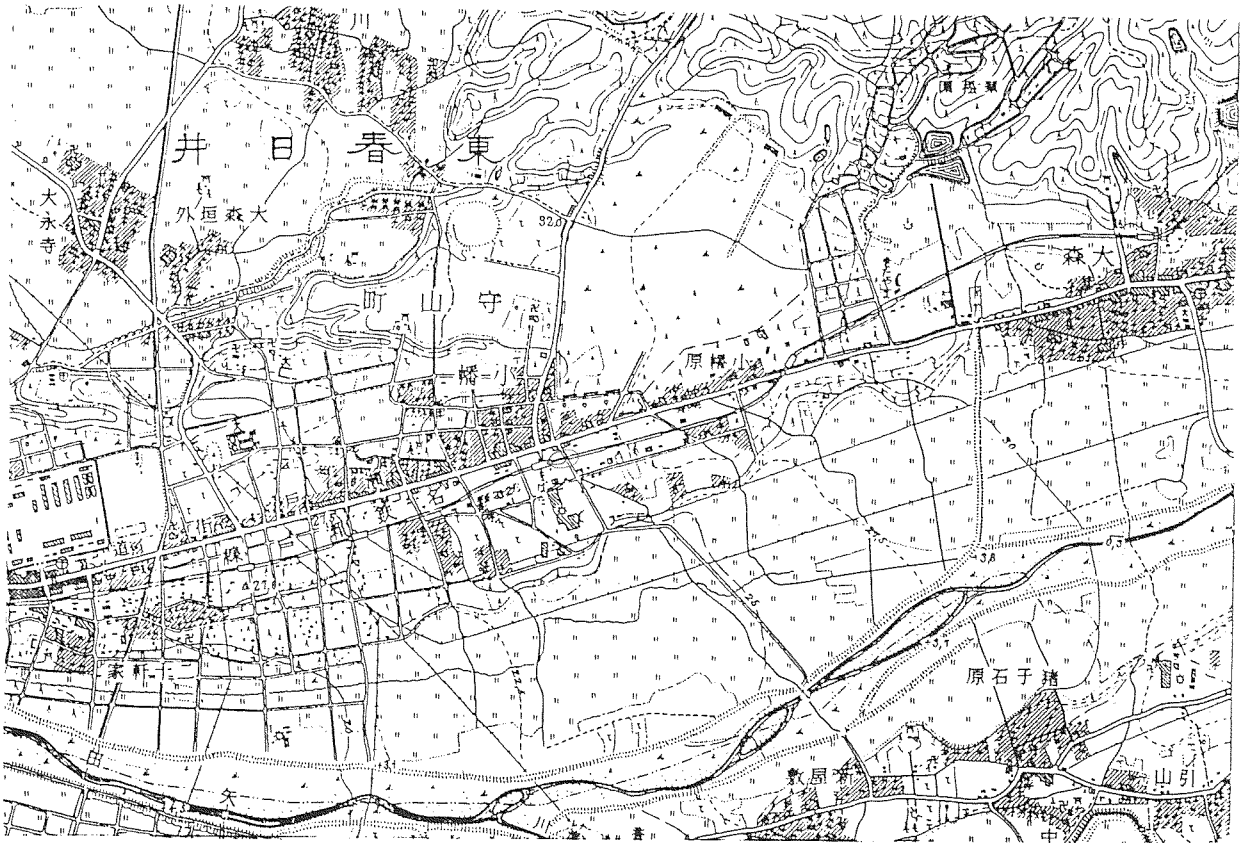
第２図　天保12年春日井郡小幡村絵図



第３図　明治33年名古屋市（大日本帝国陸地測量部　縮尺50,000分の１）
～縮尺約25,000の１に修正～



第４図　大正12年名古屋市北部（大日本帝国陸地測量部　縮尺25,000分の１）



第５図　昭和22年名古屋市北部（地理調査所　縮尺25,000分の１）

現在の名古屋鉄道瀬戸線は、明治35年、「瀬戸自動鉄道」として発足し、明治38年(1905年)矢田～瀬戸間が開通、翌年大曽根～矢田間が開通している。その後、「瀬戸電気鉄道」と名称を変更し、名古屋鉄道と合併しているが、今でも通称「瀬戸電」と呼ばれている。小幡駅は、大正10年頃に貨物扱い駅になっている。矢田川の砂利を運搬するために、トロッコ線が引き込まれ、また、タイル製造に必要な原料が各地から運び込まれた時期もあったが、昭和40年代には貨物扱いは激減し、昭和52年に貨物扱いは廃止された。

瀬戸街道は、現在の正式名は県道61号線である。前述のように、『徇行記』には「信州飯田街道」とあり、天保12年(1841年)の『春日井郡小幡村絵図』では「信濃海道」と記されている。さらに、『明治33年(1900年)名古屋市(大日本帝国陸地測量部　縮尺50,000分の１)』の地図では「瀬戸街道」となっている。現在も、主要道路として使用されている。

また、小幡は、古くは山田荘に属し、中世(戦国期)は春日部郡、近世は春日井郡、明治22年に東春日井郡に属し、同39年、高間村、二城村、小幡村、大森村が合併し守山町となり、昭和29年、守山町と志段味村が合併して守山市が成立、昭和38年、名古屋市と合併し、守山区となる。近年、町名変更がされ大字小幡の地名もなくなりつつある。

参考文献

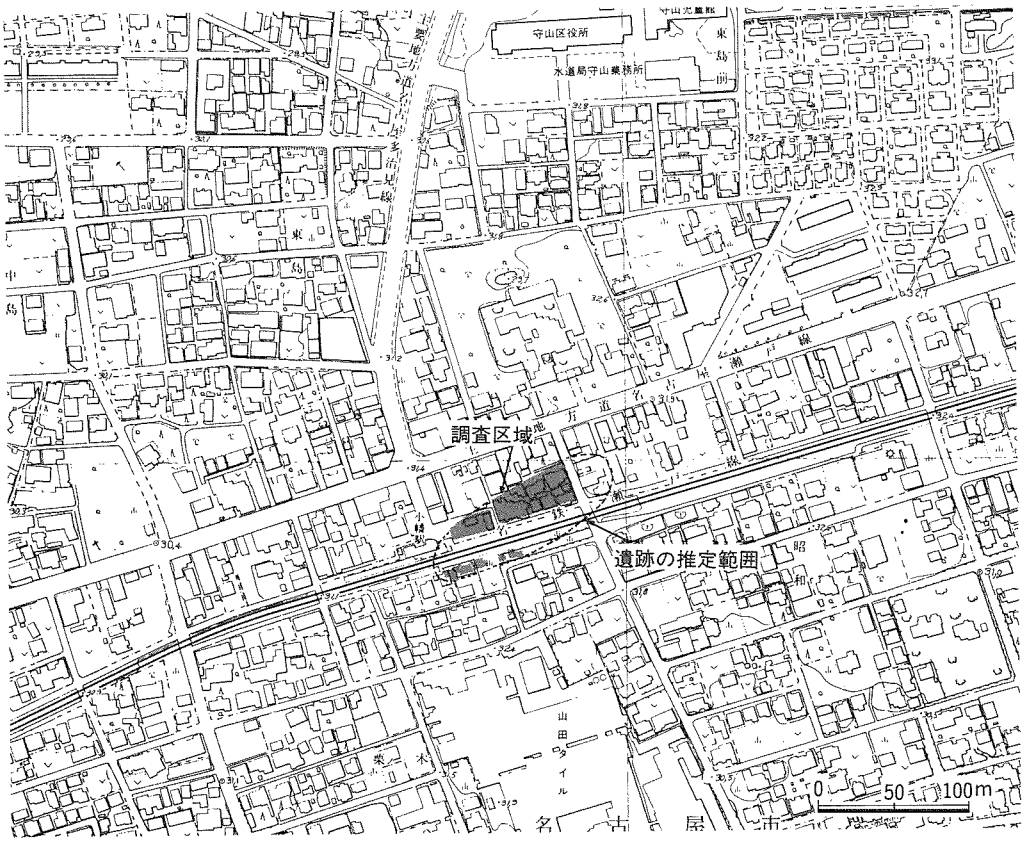
㈶徳川黎明会叢書　1988『尾張国町村絵図　名古屋市域編』㈱図書刊行会

守山郷土史研究会　1992『名古屋区史シリーズ⑫　守山区の歴史』愛知県郷土資料刊行会

角川日本地名大辞典23『愛知県』角川書店

名古屋市　1997『新修　名古屋市史　第８巻　自然編』

名古屋市立小幡小学校・苗代小学校　1994『小幡』



第６図　遺跡位置図

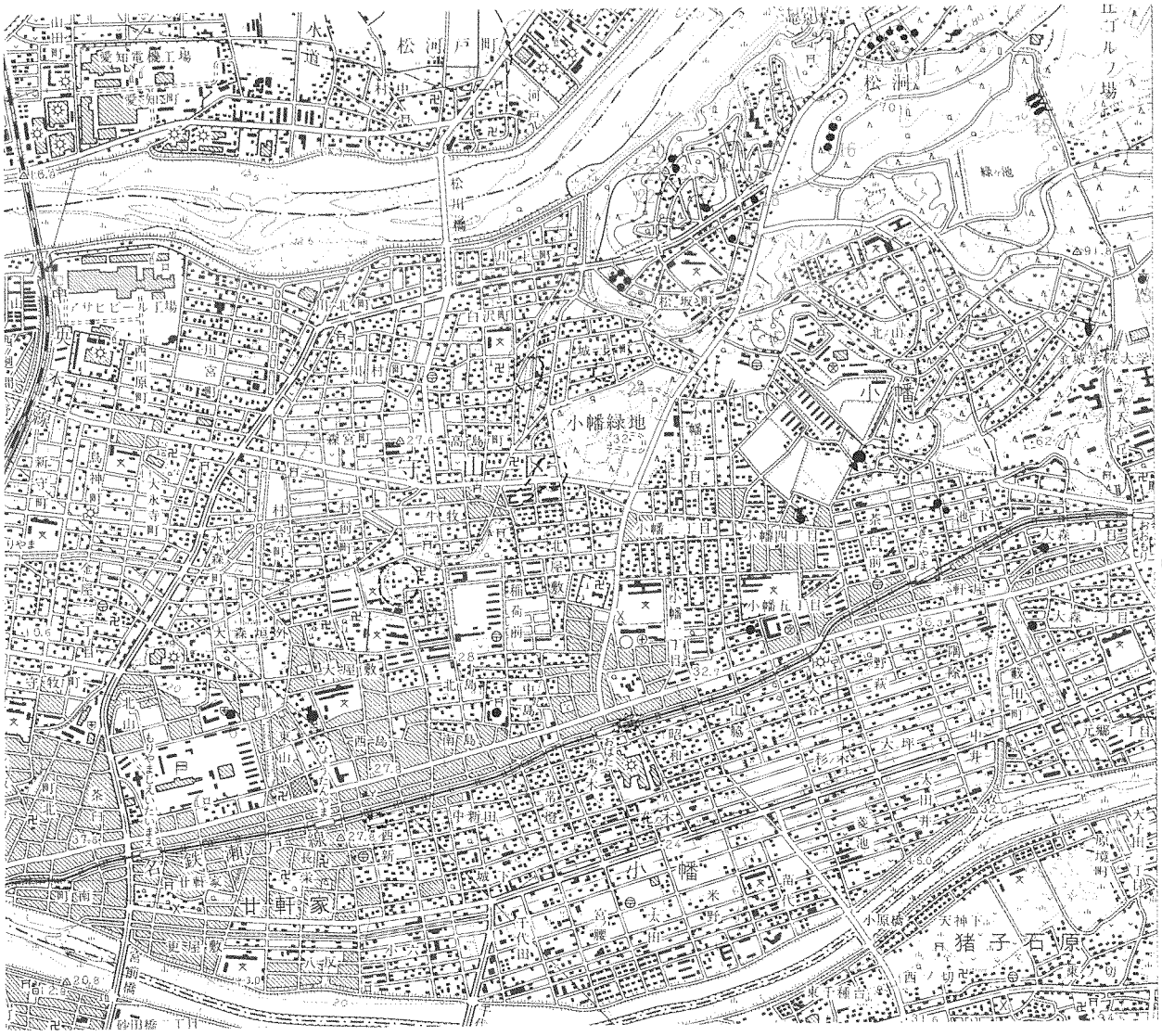
（2） 周辺の遺跡

守山区は、確認されている遺跡の数が多い行政区であり、特に、古墳の数は遺跡数の８割近くを占めている。小幡遺跡の周辺にも、古墳が多く存在し、古墳時代以前の遺跡もわずかであるが知られている。縄文時代の遺跡としては、小幡緑地公園の南西に広がる牛牧遺跡[註(1)]がある。昭和30年代に行われた調査では、縄文晩期の住居跡や土器棺墓、土坑墓が検出されている。弥生時代では、庄内川を臨む段丘に位置する牛牧離レ松遺跡[註(2)]で弥生前期ならびに中期の遺物と遺構が、牛牧遺跡で中期の遺物が、西城遺跡（小幡城跡）で弥生土器の散布が確認されている。古墳時代の遺跡としては、牛牧離レ松遺跡では、古墳時代の方墳と竪穴状遺構等も検出され、円筒埴輪・朝顔形埴輪や、５世紀中頃から６世紀の須恵器等が出土している。牛牧離レ松遺跡の約600m北にある川東山遺跡では、５世紀後半代の須恵器が出土している。川東山遺跡の周囲には、９基の円墳（川東山１～９号墳）が点在する。更に北東方向には松ケ洞古墳群があり、方墳１基、円墳21基が確認されている[註(3)]。特に、８号墳[註(4)]は、一辺約8.4m、高さ約１mの方墳で、２基の粘土槨があり、蕨手文鏡、六鈴鏡、家型埴輪、須恵器等が出土しており、５世紀後半に築造されたと考えられている。

小幡地区では、５世紀末から６世紀に築造された前方後円墳が点在している。小幡遺跡の東側では、池下古墳[註(5)]があり、全長約45mで、横穴式石室の構造から、５世紀末の築造と考えられ、小幡地区では最も古いとされる。長塚古墳は、かっての小幡ケ原演習場にあり、塹壕の構築によって破壊を受けているが、全長約81m、周堤をともなう二重の周濠がある。茶臼山古墳[註(6)]は、全長約60m、片袖式の横穴式石室があり、辻金具・馬鈴、須恵器が出土し、６世紀中葉頃と考えられる。名古屋市文化財に指定されている瓢箪山古墳は、全長約63mで、墳丘は二段築成で埴輪をめぐらし、一重の周濠をもち、前方部が大きく張出す形状から、埋葬施設は不明であるが、６世紀前半代の築造と考えられている。その他、小幡南島古墳や小幡古墳等の円墳がある。また、小幡遺跡の周囲では須恵器等の散布が報告[註(10)]されている。

古代の瓦等の出土する地点が２箇所で確認されている。１箇所は、名鉄瀬戸線瓢箪山駅の東方約80mの線路南側、字西新66番地（旧地名）付近、もう１箇所は小幡駅の南南東約350m、字花ノ木43番地（旧地名）付近になる。西新地点では４箇所の遺物散布地が確認され、軒丸瓦、軒平瓦が採集され[註(7)]、小幡廃寺はこの辺りに存在したのではないかと考えられている。採集された瓦から、小幡廃寺の創建年代は、８世紀前半頃と推定される。花ノ木地点では、昭和59年（1984年）と60年（1985年）に３回の発掘調査が実施されている[註(8～10)]。その結果、瓦溜などが検出され、文字書きのある瓦や須恵器が多数出土し、小幡廃寺とは時期が異なる別の寺院として、小幡花ノ木廃寺の存在が明らかにされた。小幡花ノ木廃寺の時期は８世紀中葉と考えられている。しかし、どちらも寺院配置や位置は明らかになっていない。

中世の城郭としては、庄内川を見下ろす段丘面に小幡城と川村城がある。小幡城は、大永年間、岡田与七郎重篤が築いたという平山城で、天正12年（1584年）の小牧・長久手の合戦の際に家康が修復したが、この合戦後には廃城になったという。『春日井郡小幡村古城絵図』（蓬左文庫所蔵）によれば、西北隅に本丸、南に二の丸、東に三の丸を配し、東西百十間（約198m）、南北四十間（約72m）、２重の堀を巡らしていた。川村城については、詳細は不明であるが、津田武永が川村北城、水野右京進が川村南城に居城したと伝えられ、二つの居館の存在が推測される。現在、城跡と推定されている地には、かって「しろやま」と呼ばれた平坦地とその下に堀があったという。



第７図　周辺遺跡分布図（１：25,000地形図　名古屋北部　国土地理院）

1 小幡遺跡　2 小幡廃寺　3 小幡花ノ木廃寺　4 小幡南島古墳　5 瓢箪山（東山）古墳
6 町北古墳　7 小幡（小幡小林）古墳　8 長塚古墳　9 茶臼山古墳
10 池下古墳・池下２号墳　11 先生塚古墳　12 大森大塚古墳　13 八龍神社古墳
14 弁天洞古窯　15 小幡緑地（緑ケ池）古窯群　16 小幡緑地１～３号墳（松ケ洞20～22号墳）
17 川東山７号墳　18 川東山８号墳　19 川東山９号墳　20 川東山５号墳　21 川東山６号墳
22 川東山遺跡　23 川東山１～４号墳　24 牛牧離レ松遺跡　25 牛牧遺跡
26 川村北城跡・川村南城跡　27 西城遺跡・小幡城跡　28 松河戸遺跡

註(1)　久永春男ほか 1961『牛牧遺跡』守山市教育委員会
註(2)　久永春男ほか 1969「牛牧離レ松集落址」『守山の古墳　調査報告第二』守山市教育委員会
註(3)　久永春男ほか 1966「松が洞古墳群の調査」「川東山古墳群の調査」『守山の古墳　調査報告第一』
守山市教育委員会
註(4)　久永春男ほか 1963「松ガ洞第８号墳の調査」『守山の古墳』守山市教育委員会
註(5)　樋上昇ほか 1991「池下古墳」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第24集』
愛知県埋蔵文化財センター
註(6)　名古屋市見晴台考古資料館 1990『守山区小幡　茶臼山古墳　発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
註(7)　内山邦夫 1963「小幡廃寺の遺瓦」『守山の古墳』守山市教育委員会
註(8)　七原惠史ほか 1984『小幡廃寺第１次調査報告』東海古文化研究所
註(9)　七原惠史ほか 1985『小幡廃寺第２次調査報告』東海古文化研究所
註(10)　七原惠史ほか 1987『小幡廃寺第３次調査報告』東海考古学研究所

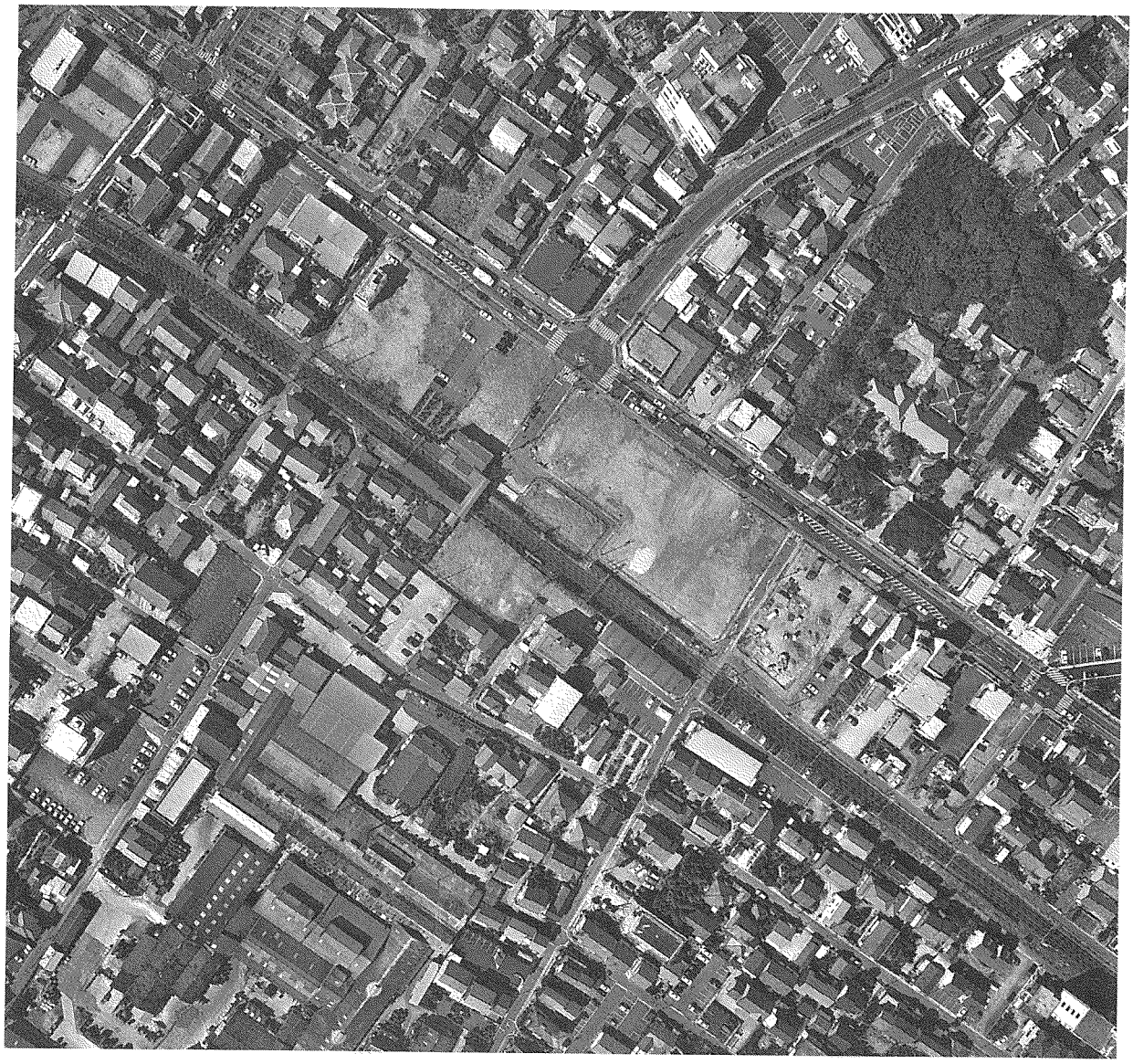


写真１　遺跡付近航空写真

II 調査の経過

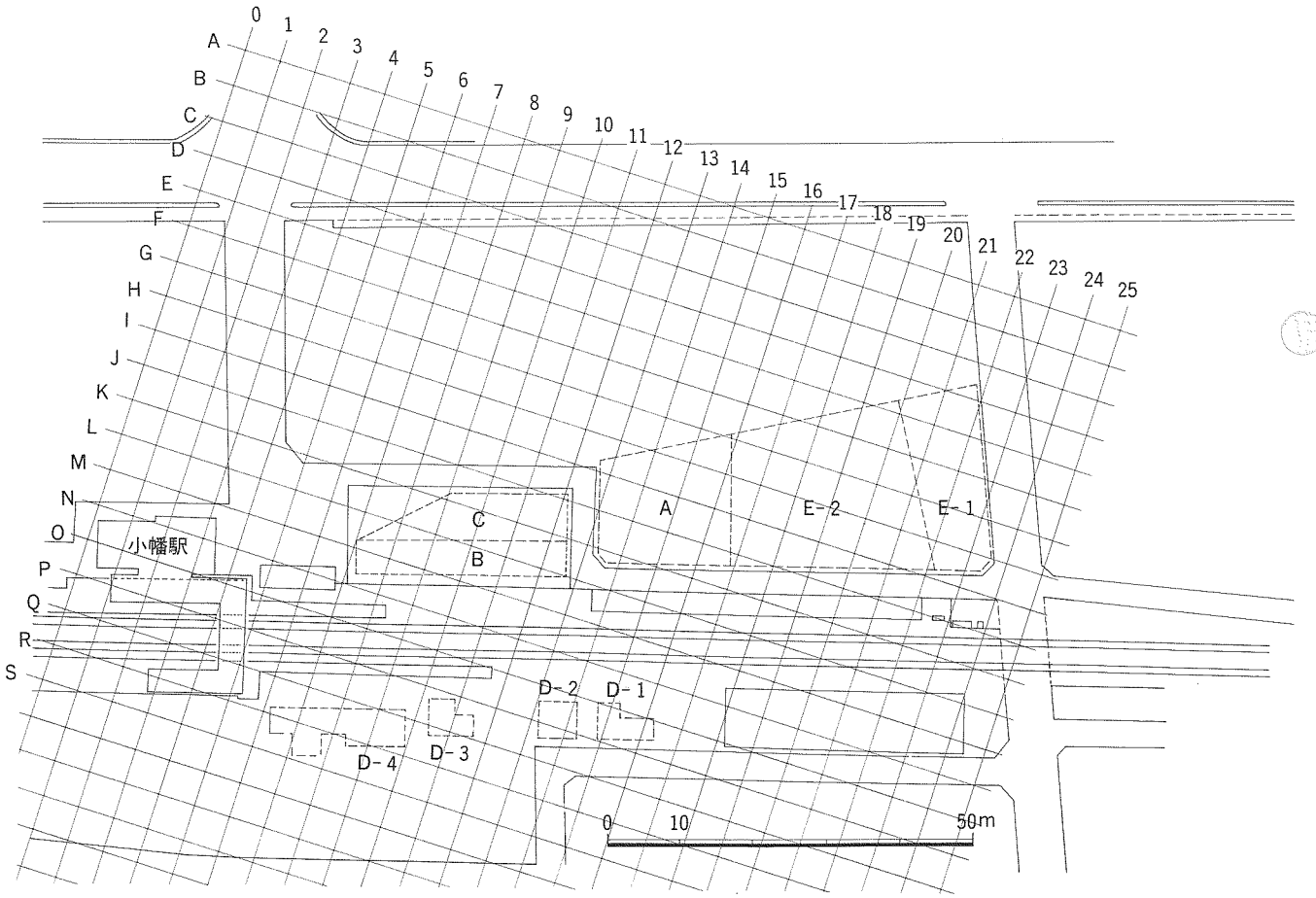
(1) 調査に至る経過

名古屋鉄道瀬戸線の小幡駅前再開発計画が具体化し、名古屋市計画局から、事業予定地内の遺跡の存在について紹介があり、平成7年に文化財課(当時)が試掘調査を実施した。その結果、須恵器や山茶碗片が出土し、新規に遺跡と確認され、事業計画の進展に並行しての発掘調査を実施する必要が生じた。

調査は、遺跡の推定範囲約6,000m²のうち、発掘が可能な約1,630m²を対象とし、事業予定地取得の進展の都合等を考慮して、第1次調査を平成8年2月13日から3月29日まで、第2次調査を平成8年4月8日から6月25日、平成9年1月8日から2月21日までの2回に分けて実施した。

(2) 調査区

調査区域は、A区(約330m²)とB区(約170m²)を第1次に、C区(約160m²)とD区(約170m²)およびE-1区(約250m²)・E-2区(約550m²)を第2次調査に区分した。当初、E区は、約800m²を平成8年7月までに終了する予定で調査を開始したが、調査用地が確保できなかったため、さらに区分して時期の延長変更をして実施した。



第8図 調査区

国土座標のX＝－88,990、Y＝－17,150を北西の原点（A－0）とする5m四方のグリッドを遺跡推定範囲全域に設定した。グリッド名は、東方向に英数字を南方向にアルファベットを表記し、その北西交点で呼称する。発掘で使用したグリッド名は、例えばA区がG14～15、H12～16、I12～16、J13～16になる（第8・24図）。なお、D区については橋脚工事予定地部分を、さらに東から西へD－1～4区に区分した。また、遺構の番号は、調査時に各区ごとに、例えば、P1からの表記をして遺物の採集をしている。資料整理を進めるにあたり、通番で表記をするために、P・SK・SD等ともに、A区は1000番を、B区・C区は2000番、D－1区は3100番、D－2区は3200番、D－3区は3300番、D－4区は3400番、E－1区は4000番、E－2区は5000番の数字を付記して、本書では表示した。

（3）　日誌抄

第1次調査

平成8年

2月14日　A区の表土除去開始。

19日　南東隅より包含層掘削、遺構検出。

20日　南東側では防空壕が数基あり、中央から南ではピット列を検出、掘削する。

23日　北側中央で淡黄褐色土の広がりを確認。

28日　淡黄褐色土を掘削し、SK1018を検出、掘削。

3月1日　調査区壁土層断面図作成。

4日　A区の写真撮影、B区の表土除去開始

5日　A区クレーンによる写真撮影、B区は西側のほとんどが攪乱である。

7日　B区中央部分の包含層掘削、遺構検出。

8日　A区で地元を対象とした現地説明会。

11日　B区ピット列を検出、掘削。

12日　B区測量。

13日　A区埋め戻し終了。B区写真撮影、土層断面図作成。

15日　B区埋め戻し終了。

第2次調査

4月8日　C区表土除去開始。

9日　一部に包含層があり、掘削をする。

10日　遺構検出、掘削。

11日　測量。

12日　写真撮影。

写真2　A区発掘風景（南から）

写真3　A区発掘風景（東から）

写真4　B区発掘風景（東から）

18日　埋め戻し終了。

4月23日　D－1区表土除去、遺構検出、掘削。溝と円形の土坑がある。続いてD－2区の表土除去。

24日　D－2区、遺構検出・掘削。

25日　D－1・2区の測量、写真撮影。D－3区の表土除去とD－1・2区の埋め戻し。遺構掘削。

26日　D－4区表土除去、遺構検出。西側に大きな掘り込みがある。

30日　D－4区遺構掘削、測量、写真撮影。

5月2日　埋め戻し終了。

15日　E－1区表土除去開始。

16日　表土除去、中央付近は攪乱が多い。

21日　南側より遺構検出。

27日　南側より遺構掘削、防空壕を掘削、北と西に張出しがある。

30日　北側でカマド状の遺構を検出、掘削。

6月4日　調査区土層断面図作成。

5日　写真撮影、測量。

24日　埋め戻し終了。

平成9年

1月9日　E－2区表土除去開始。

16日　東側から遺構検出、SD5001・5002を掘削。

20日　中央部では薄く包含層が残る。南側で多数の穴などを検出。

24日　中央でSK5075を検出し、須恵器出土。

29日　遺構検出終了。

2月3日　SK5075の遺物を検出。周囲の溝などからも須恵器片が出土している。

4日　遺構断面図作成。

6日　クレーンによる写真撮影。

12日　SK5075の遺物を取り上げる。

13日　写真撮影。

19日　埋め戻し終了。

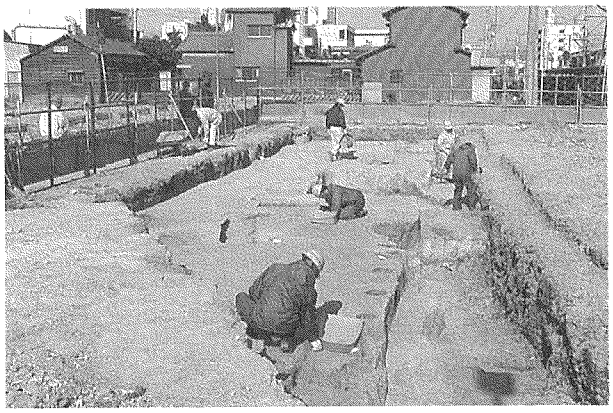


写真5　C区発掘風景（西から）

写真6　D－4区発掘風景（東から）

写真7　E－1区発掘風景（南から）

写真8　E－2区発掘風景（南東から）

Ⅲ　遺構と遺物

（1）　基本土層

Ａ～Ｃ区とＥ区では、調査前に建物の解体と基礎の撤去が実施されているため、厚さ約50cmの（１）表土を除去すると、遺物包含層はほとんど残存せず、部分的に厚さ約５～15cmの（２）灰色土および（３）灰褐色土が堆積し、黄褐色シルト（地山）が露出する。また、包含層としては（４）褐色土もあり、５cm程の厚みで狭い範囲に残存しているが、この土層の大部分は削平されたと判断される。灰褐色土が、近代以降の遺物を含み、褐色土が古代以降の遺物包含層と推測されるが、残存する土層の厚みも薄く、また包含される遺物の量が少ないため、明瞭にはできなかった。出土した遺物量は、調査区全体で、古代・中世遺物がコンテナ箱に２箱程で、近世以降の遺物を含めても、コンテナ箱に10箱程であった。黄褐色シルト（地山）の面で、現代建物基礎を含めた遺構を検出した。古代の遺物を含む遺構は、Ａ区とＥ－２区の土坑２基である。Ｄ区では、現代建物基礎による攪乱が少なく、包含層の残存が期待されたものの、ほぼ同様の土層が堆積したが、中世以前の遺物は少ない。遺跡推定範囲の西端にあたるＤ－４区では、（１）表土の下に暗灰褐色土が堆積し、（４）褐色土は観察されていない。なお、地山面の標高は、Ａ～Ｅ区すべて、31m付近であり、遺跡推定範囲ではほぼ平坦な状態にあった。

（2）　Ａ区（第24図参照）

古代の布目瓦と須恵器の破片が出土する土坑や、近代の溝、柱穴列などが発見され、灰褐色土層から中世の山茶碗や近世から近代の陶器が出土した。調査区の南東側には、防空壕が集中して掘られており、西側は、建物基礎等により破壊されていた。

写真９　Ａ区全景（北から）

SK1017

G14Gr、SK1018の北側にほぼ接して検出された。形状は、短辺約1.3m、長辺約２mの楕円形で、深さは約25cm、主軸はN35°Wである。埋土は、５mm以下の灰褐色土と黄褐色土が混じり合う土で、下層(厚さ約10cm)には、５mm以下の炭化物が多く混じっていた。布目瓦片や近代陶磁器片が出土している。

SK1018

H14Gr の北東からG14・G15・H15Gr に位置する。厚さ約５cmの灰色土を掘り下げると、周辺の地山に比較して、鉄分が沈着した淡黄色土や褐色土が不自然に混じる面が広がることから、精査して土坑の発見となった。この土坑の上層は、短辺約3.5m、長辺約５mの楕円形状に広がる厚さ最大約15cmのシルト質で固く締る淡黄褐色土で、遺物は含まれていない。この埋土を掘削した後の形状が、短辺約2.8m、長辺約４mの楕円形になり、検出面からの深さが約45cm、主軸はN20°Wとなる。埋土は、①淡黄褐色土、②淡褐色土、③褐色土の３層に細分され、いずれの埋土も鉄分の沈着が顕著に見られる。中層②は、最大約10cmの厚さで２～５cmの礫が含まれる粘質土、下層③は、最大約10cmの厚さで粘性のある土、中層と下層から布目瓦や須恵器などの破片(写真12・13)が出土した。布目瓦の破片は15点程あり、表面は著しく摩滅し、布目痕が観察できない状態になっているものもある。須恵器は、杯蓋、甕の破片と思われるものである。また、SK1018を検出する以前に、SK1018の南肩にあたる位置で、P1052を検出した。直径約30cm、埋土は淡黄褐色土で、掘削をしたところ淡黄褐色土は北側に広がっていき、結局、SK1018の埋土と区別ができなくなった。P1052は、SK1018の埋土の一部を穴形に誤認したもので、この位置からも、土師器片と８世紀代の須恵器杯片が出土している。

写真10　SK1018(西から)

写真11　SK1018(南から)

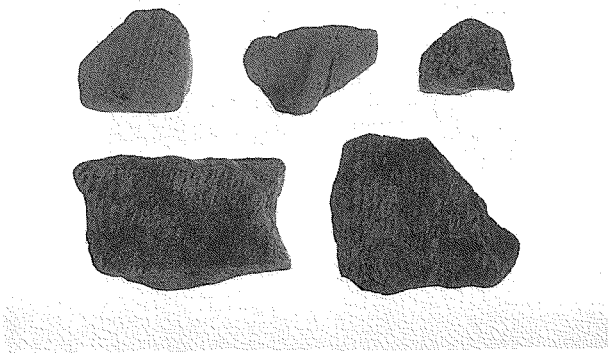


写真12　SK1018出土の瓦

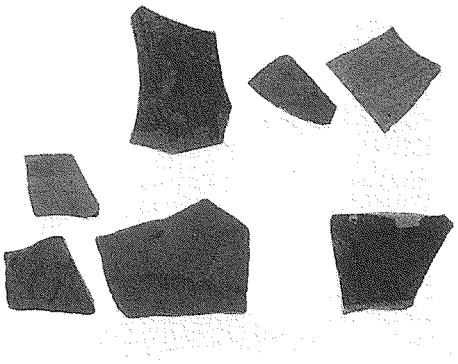
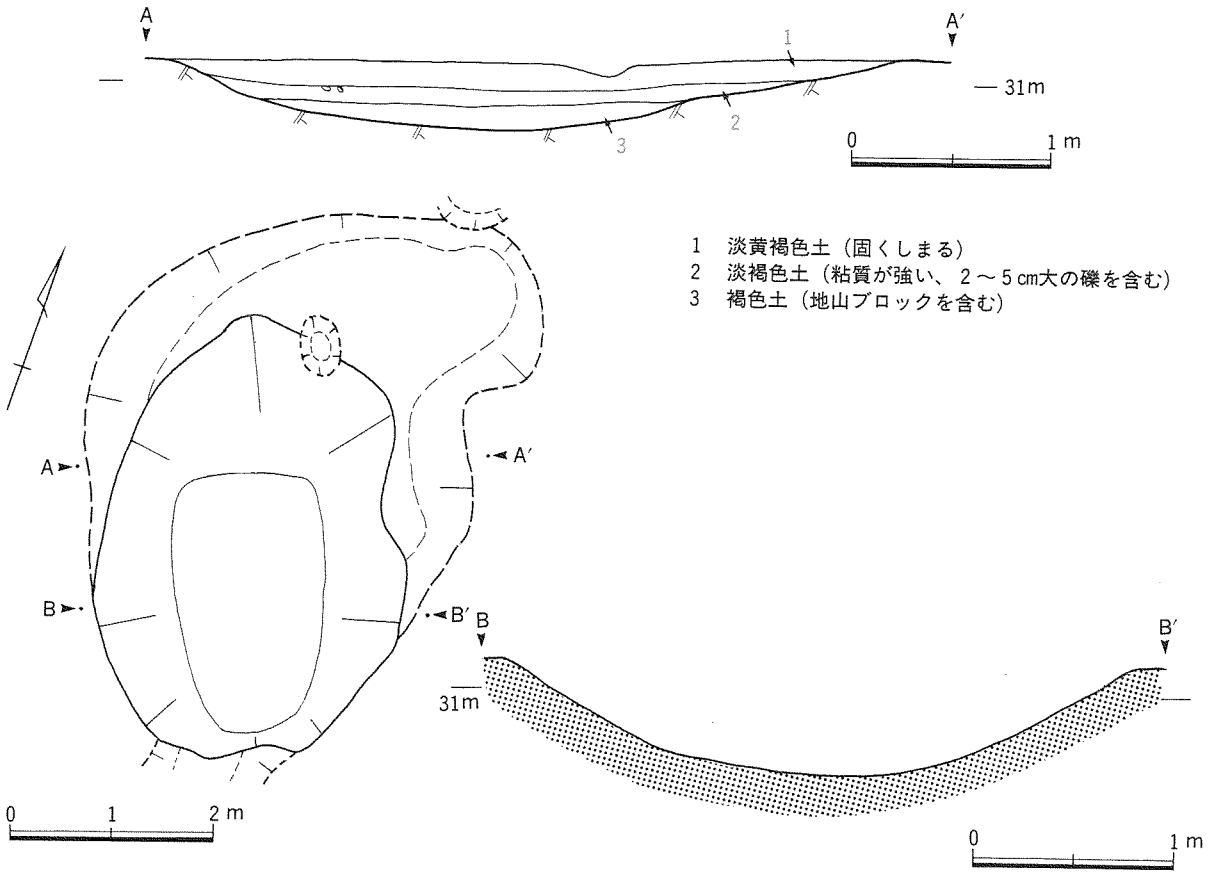


写真13　SK1018出土の須恵器



第9図　SK1018

SD1005

I 14・15Gr で、幅約40cm、深さ約5cmの溝が、N120°Wの方向に約5.5m検出された。埋土は、SD1009と同様のもので、遺物は発見されていない。この溝は、柱穴列1と交差する位置にあり、その重複する部分での埋土の相違から判断して、柱穴列1よりも以前につくられたと考えられる。

SD1006

H15Gr からG16Gr にかけて、幅約25cm、深さ約5cmの溝が、N105°Wの方向にやや蛇行して約5.5m検出された。埋土は、灰褐色土に1cm以下の礫が含まれるもので、遺物は発見されていない。

SD1009

H14Gr で、幅約40cm、深さ約5cmの溝が、N30°Wの方向に約5m検出された。埋土は、淡褐色土に灰褐色土が混じり合うもので、遺物はない。

SD1010

SK1018の西側（G15Gr）で、幅約20cm、深さ約3cmの溝が、N115°Wの方向に検出された。埋土は、SD1006と同様の灰褐色土に1cm以下の礫が含まれるもので、遺物は発見されていない。この溝とSD1006の西端は、SK1018と位置的に重複するが、SK1018の埋土①淡黄褐色土の面で検出されているため、SK1018が埋没した後に、SD1006と

写真14　SD1006・1010・1011（西から）

SD1010がつくられたと判断される。

SD1011

G15・16Grで、幅約50cm、深さ約15cm、底幅の狭い台形を呈する溝が、N35°Wの方向に約4m検出された。埋土は、灰褐色土に淡褐色土が混じり合うもので、遺物として近代陶器が含まれる。

SD1012

調査区の北側端、G13・14Grで、幅約50cm、深さ約15cmの溝が、N120°Wの方向に約7.5m検出された。埋土は、SD1011と同様で灰褐色土に淡褐色土が混じり合うもので、SD1011と直交する位置である。遺物は、須恵器片、徳利、皿等が出土している。

柱穴列1

I14・15Grに北東から南西に並ぶ柱穴列がある。方形または円形をした直径40cm程の掘り方の穴が、約90cm間隔でN110°Wの方向に9基(P1003・1004・1006・1007・1008・1022・1023・1024・1025)並び、平均の深さは約28cmを測る。埋土は、いずれも1cm以下の小石を含む灰褐色土に5cm以下の黄褐色土の塊が混じる土で、一部には、直径15cm程の柱があった痕跡として、褐色土を密に含む部分が残る。P1007およびP1025からは、タイルや近代陶器が、P1008からは、近代陶器、山茶碗片と山茶碗窯でみられるような焼台2点(写真16)が出土している。

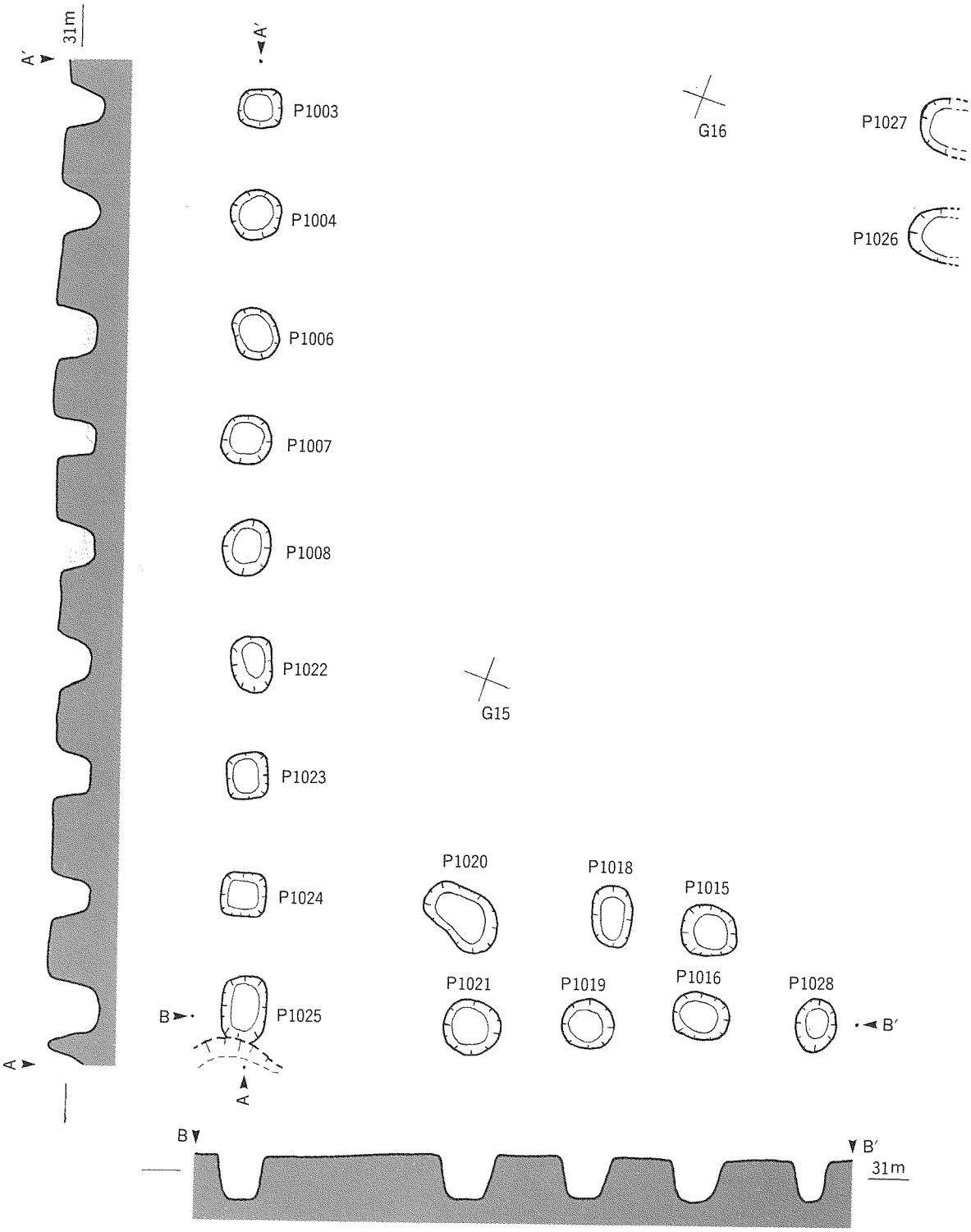
写真15　柱穴列1・2(北西から)

写真16　P1008出土の焼台

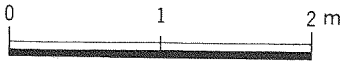
柱穴列2

柱穴列1の西端P1025から柱穴列1に直交する位置(J14Gr)に、南東方向に並ぶ柱穴列がある。P1025から約180cm離れ、40cm程の掘り方で深さ約32cmの柱穴が、約90cmの間隔でN20°Wの方向に4基(P1016・1019・1021・1028)検出された。このうち北寄りの3基の東側には、ほぼ90cmの間隔で同様の柱穴(P1015・1018・1020)が並行している。これら柱穴の埋土も、柱穴列1とほぼ同様で灰褐色土に5cm以下の黄褐色土の塊が混じるもので、一部には、15cm程の柱があった痕跡として、褐色土を密に含む部分が残る。P1018から近代陶器と山茶碗片が出土している。

調査区南端(J15・16Gr)にあるP1026とP1027は、柱穴列1と並行する位置にあり、P1003、P1004からそれぞれ約5.4m離れている。P1026・1027とも全容は不明だが、径約40cmの楕円形を呈し、深さ約28cmを測る。柱穴列1、柱穴列2、P1026・1027は、「□」の形状を呈する位置にあり、囲いのような建造物の跡であったと想定されるが、明治33年(第3図)、大正12年(第4図)、昭和22年(第5図)の地図には、このあたりに建造物は記されていない。


31m
A′
A
A′
P1003
P1004
P1006
P1007
P1008
P1022
P1023
P1024
P1025
B
A
G16
G15
P1027
P1026
P1020
P1018
P1015
P1021
P1019
P1016
P1028
B′
B
B′
31m

第10図　柱穴列１・２


0
1
2 m

P 1032

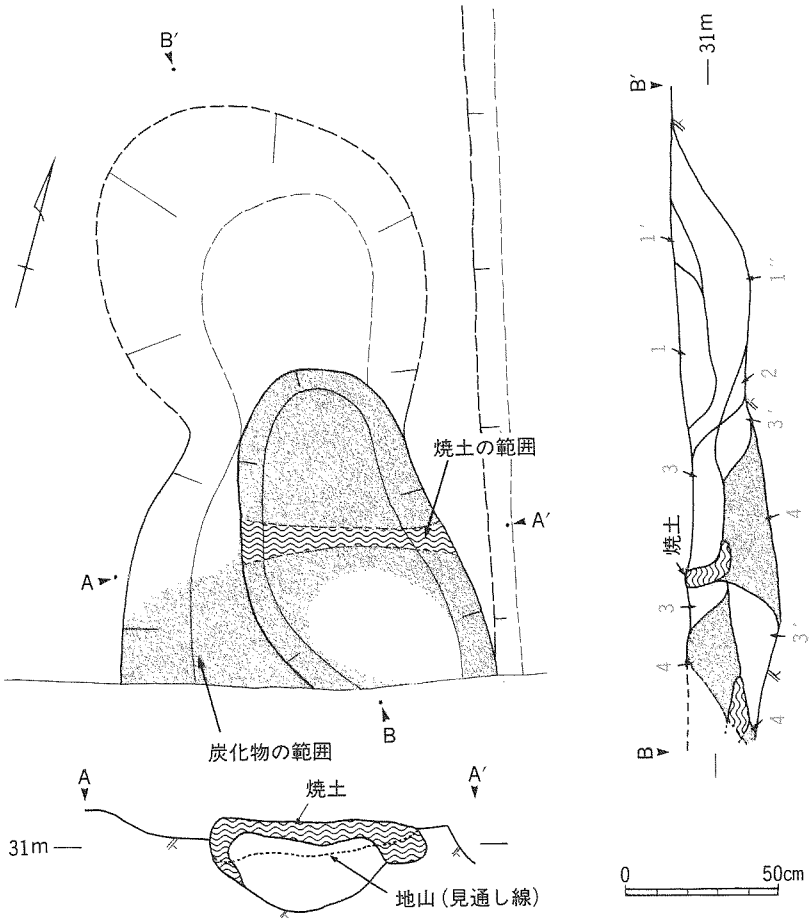
H15Gr にあり、直径約35cm、深さ約５cmで他の遺構と重なっている。埋土は淡黄褐色土で、８世紀代の須恵器杯(写真21)が出土している。

P 1053

調査区の南側端(Ｊ14・15Gr)で、炊き口が南に付くカマド状の遺構が発見されている。南側は調査区外にあるため、全容は不明だが、径約90cm、主軸はほぼN15°W、北側は後から掘られた遺構と重なっている。深さ約25cmの穴の側面から天井にかけ、厚さ約５cmの焼土がアーチ状にあり、焼土塊や炭化物がまわりに広がっている。遺物は発見されていない。

写真17　Ｐ1053(南から)

写真18　Ｐ1053(南から)



B—B′ 土層
1　淡黄褐色土（シルト質、炭化物を含む）
1′ 淡黄褐色土（１に類似する、炭化物は含まない）
1″ 淡黄褐色土（１′に類似し、黄褐色土粒が混じる）
2　黄褐色土（シルト質）
3　淡灰褐色土（シルト質、黄褐色土粒が混じる）
3′ 淡灰褐色土（３に類似し、炭化物を含む、黄褐色土粒がより多く混じる）
4　灰褐色土（焼土粒、炭化物を多く含む）

第11図　Ｐ1053

防空壕

調査区の南東側に集中して、防空壕の跡(SK1001～1005・1009)が6基発見された。短辺約1.5m、長辺約2.5mのものが2基(SK1002・1003)、短辺約1.5m、長辺約3.2mのものが1基(SK1005)、短辺約1.5m、長辺約3.5m以上のものが2基(SK1001・1009)あり、これらは長辺がN20°Wの方向を向いている。SK1004(Ⅰ16Gr)は、短辺約1.6m、長辺約2.5m、N110°Wの方向を向く。深さは、検出面から80cm程(現地表面から約1.1m)で、底部には板材が敷かれている。SK1002・1003(H15・H16・Ⅰ15・Ⅰ16Gr)には階段施設が残存している。SK1002は、L型を呈し、深さは検出面から約1m、北辺の中央に約5cm幅の狭い段が2段付き、SK1003は、深さが検出面から約1.3m、西辺中央に幅約40cm、長さ約1.1mの張出した階段が付いている。また、SK1003・1005は側面に丸杭の抜き跡が残り、特に、SK1005では直径約15cmの穴が等間隔に5基あった。出土遺物は、SK1001からは、タイルと共に戦時中の陶器、徳利などが出土している。徳利(第13図1・2 写真22)は灰釉で、口縁から上胴部と底部から下胴部があり、接合はできないが同一個体と思われる。また、バラ模様のタイル裏面に「少女の顔」が鉛筆で描かれた破片(写真23)がある。SK1002からは、狐、馬、犬の玩具(第13図5～7 写真24)、磁器製の燈明皿(第13図3 写真25)、外側底部に『高辻聯區婦人會』とある湯のみ(第13図4 写真26)などが出土している。SK1003からは、タイル、碗などが出土し、碗(写真27)の外面底部には『瀬474』がある。SK1005(Ⅰ16・J16Gr)とSK1009(J15Gr)からは陶製の手溜弾(写真29)が出土している。厚さ8mm程、直径約8cmの半球形のものを合わせたつくりで、同一個体ではないが口部のついた上半分と下半分がそれぞれ出土している。SK1005からは、直径約18cm、器高約3cmの匣鉢の蓋(第13図8 写真28)も出土している。SK1009からは、内側に陸軍の星マークのある碗(第13図12 写真30)、『岐？180』の付いた碗(第13図11 写真31)、『岐596？』『福』の付いた碗(写真31)なども出土している。

戦時中の遺物では、表土から陶器製の「キセル」(写真35)が出土している。全長約9cmで、ラウ(胴)部に『岐463』の刻印がある。ラウ部は、竹を疑似して製作されている。

その他、P1054(Ⅰ13・J13Gr)と基礎の攪乱坑から、匣鉢(第13図9・10 写真32・34)がそれぞれ出土している。P1054のものは底径が約15cm、攪乱坑のものは、底径が約14cmで底部が下に突出し、内側には輪トチンの跡があり、外面に釉が付着している。また、P1054からは、『幡』の字が書かれた徳利の破片(写真33)も出土している。表土出土の遺物として、おそらく宝珠形鈕の付く須恵器蓋片(写真36)、山茶碗底部(第13図13 写真36)、大正11年の一銭銅貨(写真37)などがある。

写真19　防空壕(北西から)

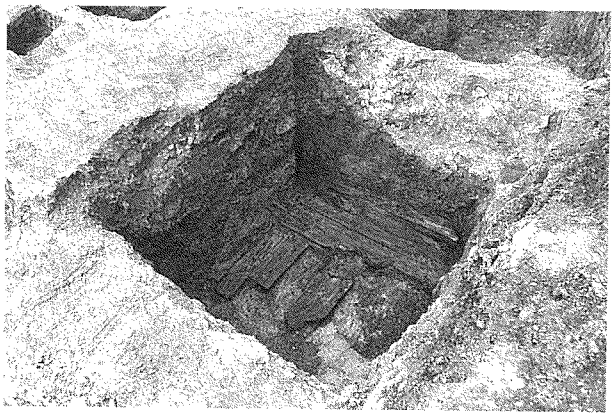
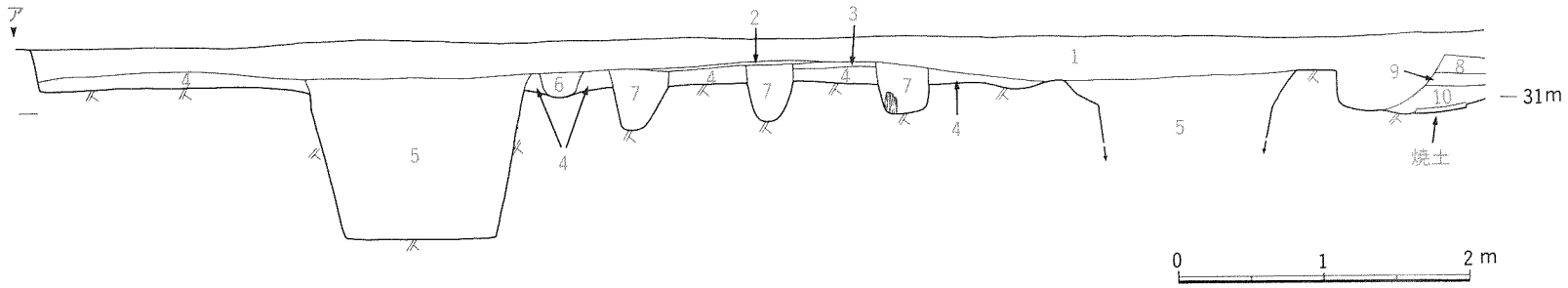
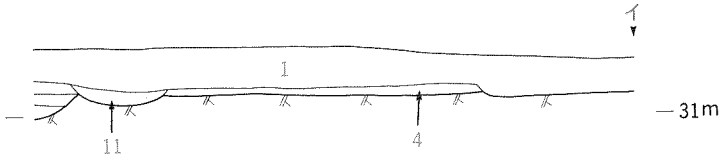


写真20　SK1004(東から)

南 壁

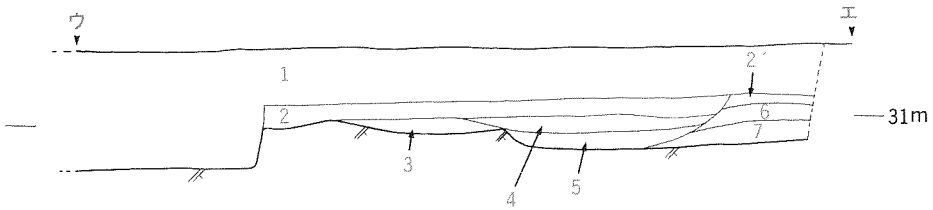




南 壁

1　表土・攪乱
2　黄白色砂
3　礫
4　灰黄褐色土（シルト質）
5　防空壕
6　暗灰色土（礫を多く含む）
7　暗灰色土（礫を多く含む、黄褐色土粒が混じる）
8　灰色土
9　淡灰褐色土（黄褐色土粒が混じる）：Ｐ1053埋土
10　灰褐色土（炭化物、焼土粒を多く含む）：Ｐ1053埋土
11　淡灰色土

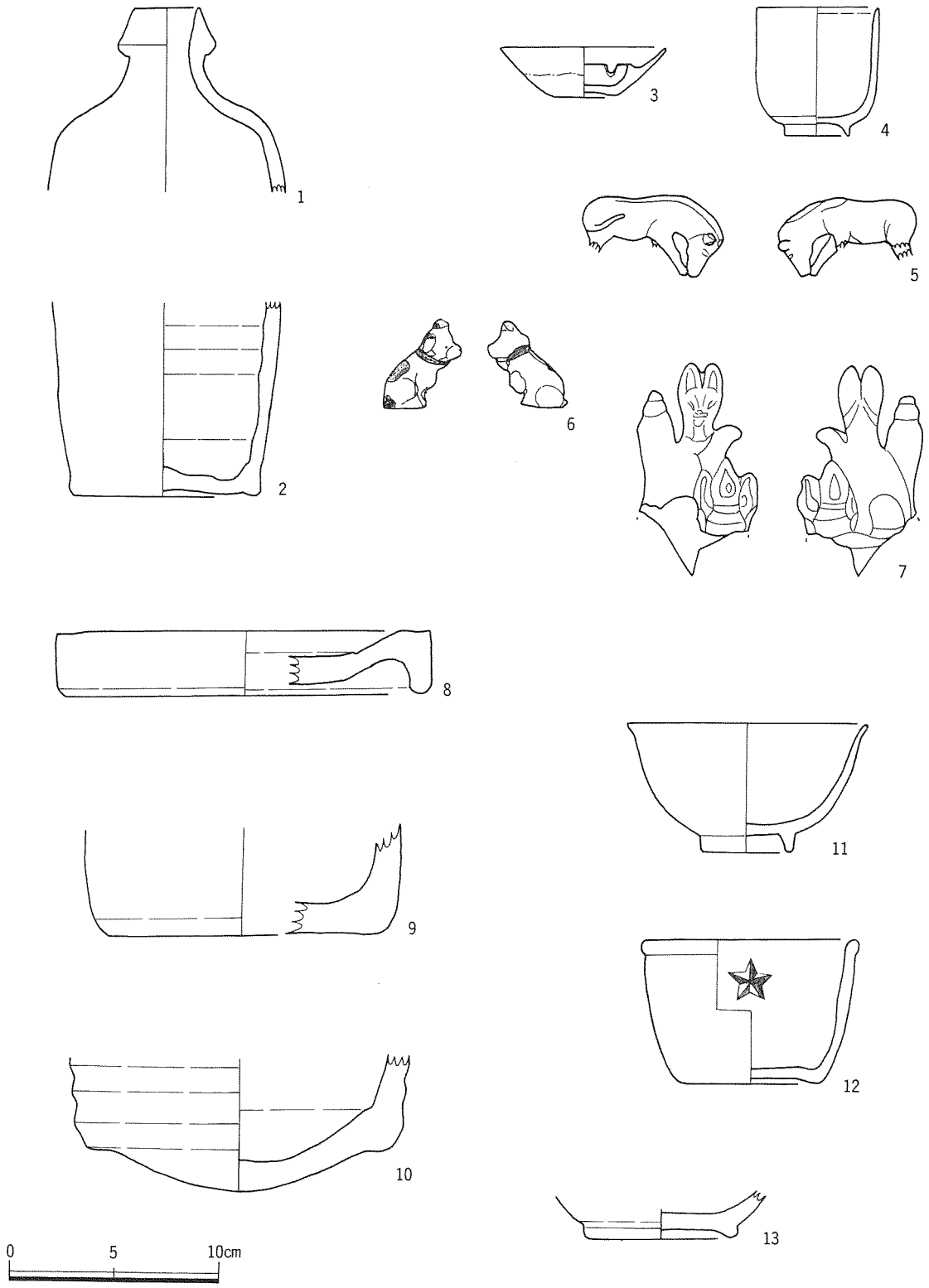
北 壁



北 壁

1　表土・攪乱
2　茶褐色土（シルト質、礫を含む、鉄分の沈着がある）
2′　茶褐色土（２に類似、黄褐色土粒が混じる）
3　黄褐色土（シルト質）
4　灰褐色土（シルト質）：Ｅ－１・２区（南壁）７に類似
5　淡灰褐色土（炭化物を含む）
6　淡褐色土（シルト質、鉄分の沈着がある）
7　淡黄褐色土（シルト質、鉄分の沈着がある）

第12図　Ａ区（南壁・北壁）土層断面図



第13図　A区出土の遺物

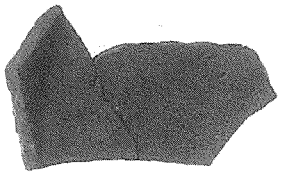


写真21　P1032出土の須恵器杯

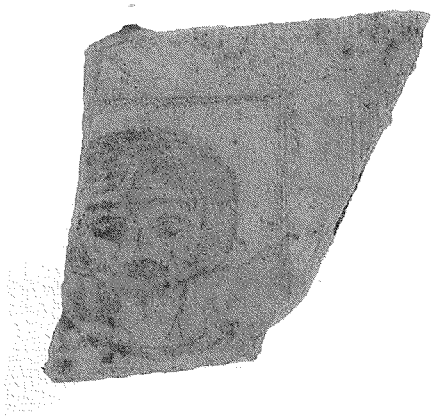
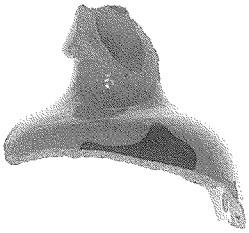


写真23　SK1001出土のタイル



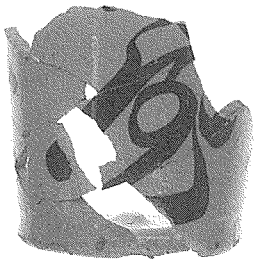


写真22　SK1001出土の徳利

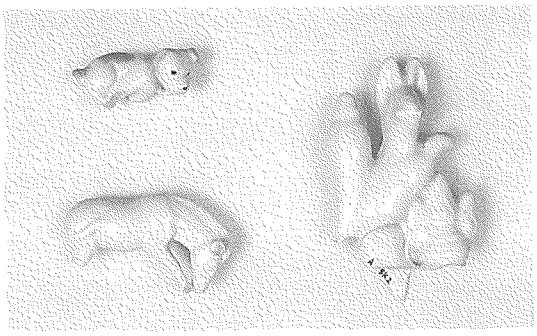
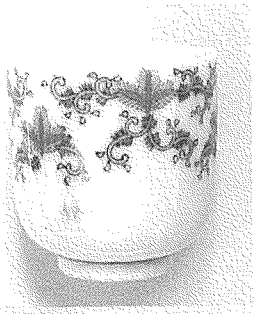


写真24　SK1002出土の玩具



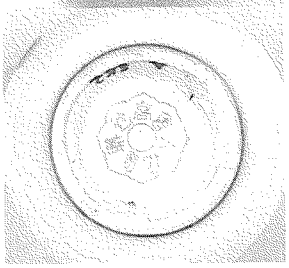


写真26　SK1002出土の湯のみ

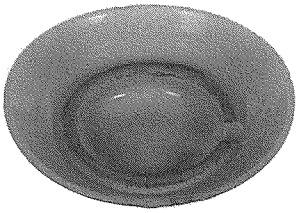


写真25　SK1002出土の燈明皿

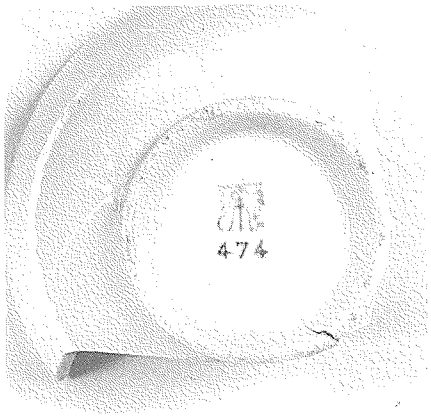


写真27　SK1003出土の碗

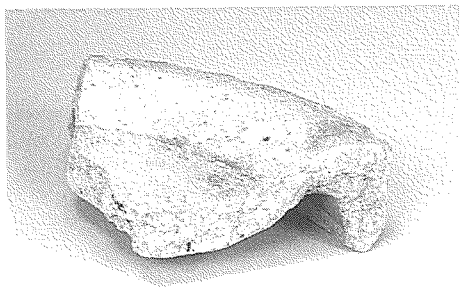


写真28　SK1005出土の匣鉢

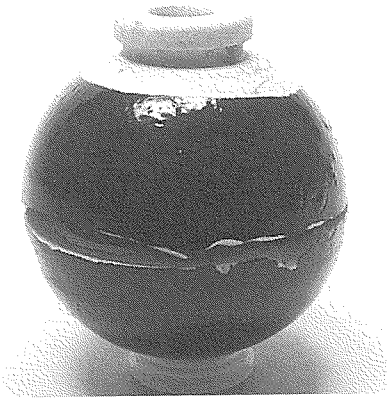


写真29　SK1005・1009出土の陶製手溜弾

写真30　SK1009出土の碗

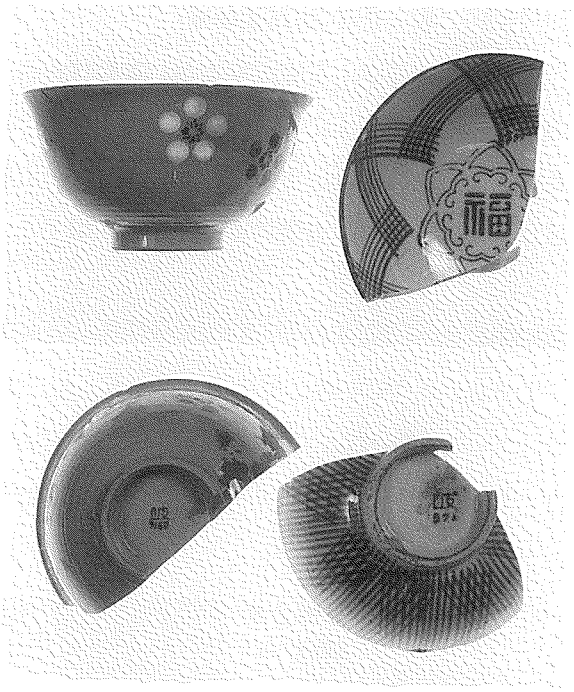


写真31　SK1009出土の碗

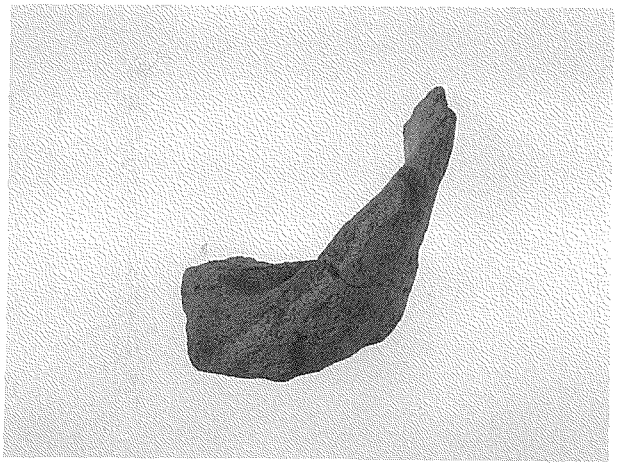


写真32　P 1054出土の匣鉢

写真33　P 1054出土の徳利

写真34　攪乱坑出土の匣鉢

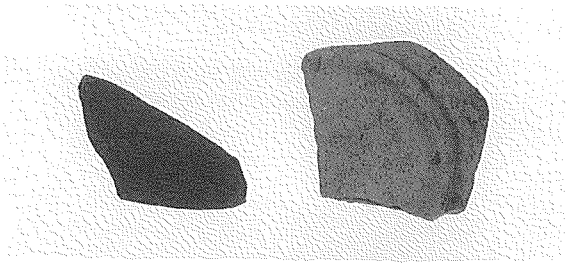


写真36　表土出土の須恵器杯・山茶碗

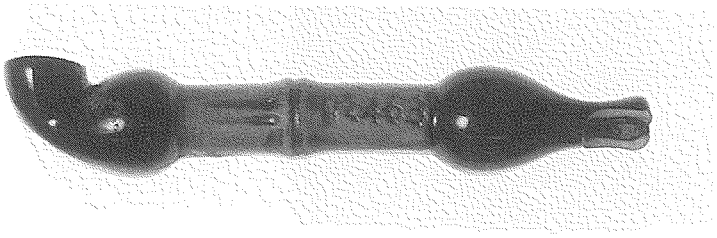


写真35　表土出土のキセル

写真37　表土出土の一銭銅貨

（3）　B・C区（第16図参照）

厚さ約50cmの表土を除去すると、黄褐色シルトの地山面が露出した。部分的に残存する厚さ約5cmの灰色土および灰褐色土などから、近世から近代の陶器が少量出土した。B区は、建物基礎等により破壊された部分が多く、攪乱と攪乱の間に僅かに残った地山面で、溝や柱穴列などが検出された。C区は、攪乱土坑などは少ないが、遺構の密度が疎な区域であった。

SD2004

L8Grで、N20°Wに走る溝が検出された。幅約55cm、深さ約30cm、埋土は、白色粘土ブロックを含む灰色土で、碗（第15図1　写真43）、火入れ（第15図2　写真43）などが出土している。碗や火入れは破片であるが、割れ面が摩滅しており、二次的な使用痕と思われる。

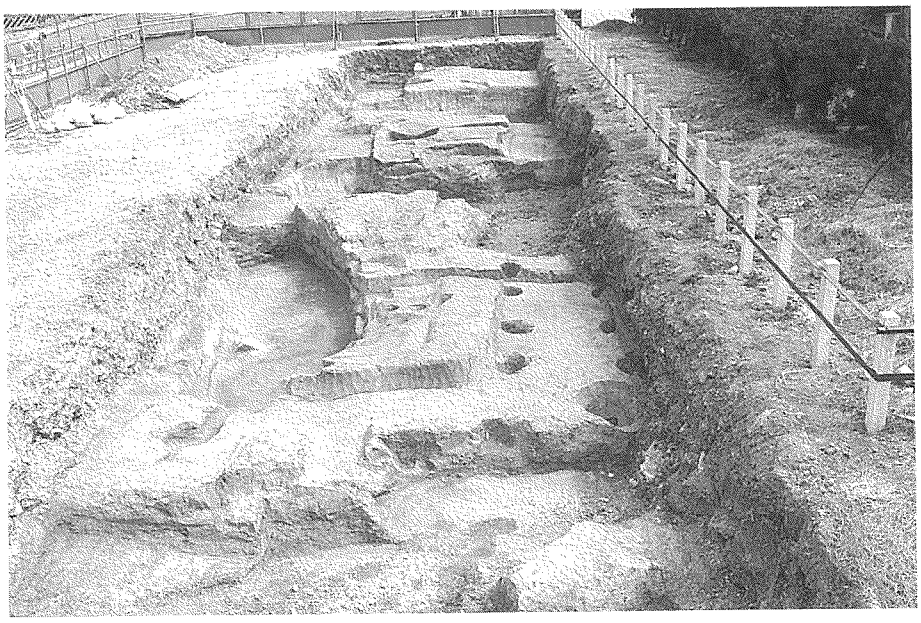


写真38　B区全景（西から）

写真39　C区全景（西から）

SD2005

Ｊ10・K10Gr で、幅約40cm、深さ約５cmの溝が、N20°Wの方向に部分的に検出された。埋土は、淡褐色土に灰褐色土が混じり合うもので、遺物は発見されていない。

SK2013

Ｋ８Grで、径約１m、深さ約10cmの土坑の半分が検出された。この付近では、厚さ５cm程の灰褐色土が小範囲に残存していた。北壁土層断面の観察から、SK2013の埋土は、茶褐色土で、１～３mmの炭化物や地山粒が混じり、底部では、焼土粒が部分的にみられるが、遺物は出土していない。

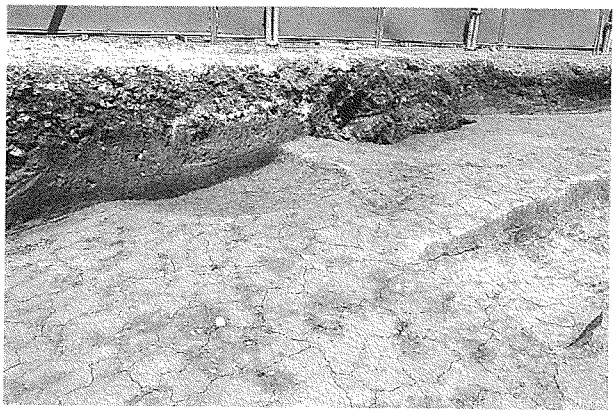


写真40　SK2013(南から)

柱穴列３(Ｐ2016～2018、Ｐ2019Ａ、Ｐ2019Ｂ、Ｐ2020～2022)

Ｌ８・Ｍ８Grで検出された。東西側と北側に攪乱坑があるものの、その間で部分的に残存し、径40cm程、深さ約30cm、掘り方はほぼ方形を呈する柱穴が、約１m間隔にN105°Wの方向に５基(Ｐ2016～2019Ａ・Ｂ：Ｐ2018は、第14図に記載してないが、Ｐ2019Ａの西にある)検出された。埋土は、掘り方部分が黄白色あるいは青白色粘土で、柱部分が褐色土であり、径10cm程の柱材が残存する穴もあった。これらの柱穴から約１m間隔を開けて南側にも同様の穴が３基(Ｐ2020～2022)あり、一連の建造物が存在したと考えられる。

柱穴列４(Ｐ2044～2047、Ｐ2048Ａ、Ｐ2048Ｂ、Ｐ2050)

Ｌ７・Ｋ８・Ｌ８Grで、径30cm程、深さ約30cmの柱穴が約90cm間隔でN105°Wの方向に７基検出された。穴の形状が方形に近いものが数基ある。埋土は、暗灰色土と黄褐色シルトの塊が混じり合うもので、タイル等が含まれている。10cm程の柱材が残存する穴もある。東方向への広がりは認められなかった。

その他

建物解体と基礎撤去時の攪乱跡が大多数であるが、Ｂ区の南壁付近に、長辺約５m、短辺約３m、深さ２m以上の攪乱坑があり、多数のタイルが廃棄されていた。SK2005(K12Gr)から出土した陶器製の「卸し金」(写真44)は、最大幅約9.5cm、長さ約11.5cmで、卸し部の左上に『瀬251』の刻印がある。また、Ｃ区のＰ2043(Ｋ８Gr)、2048Ａ(Ｌ７Gr)からは、匣鉢(写真45)が出土している。

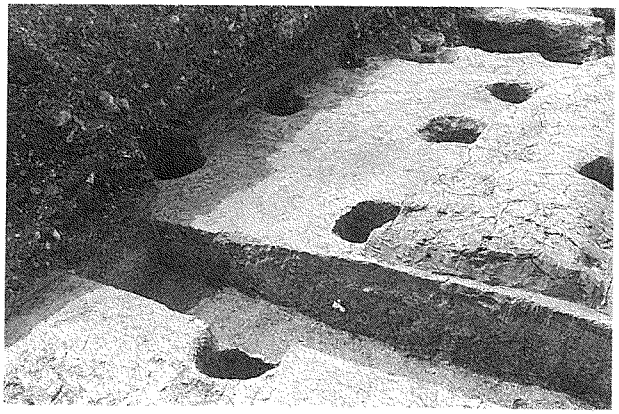


写真41　柱穴列３(北東から)

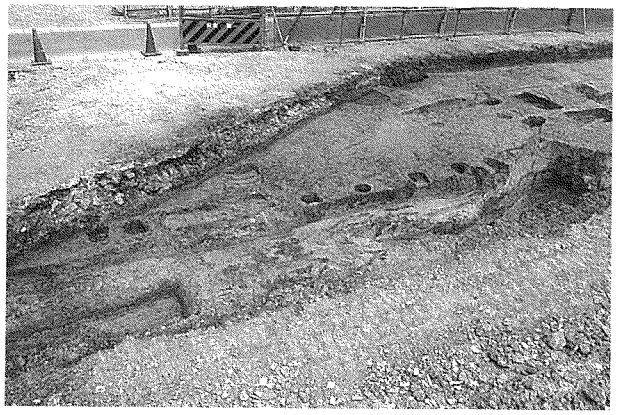
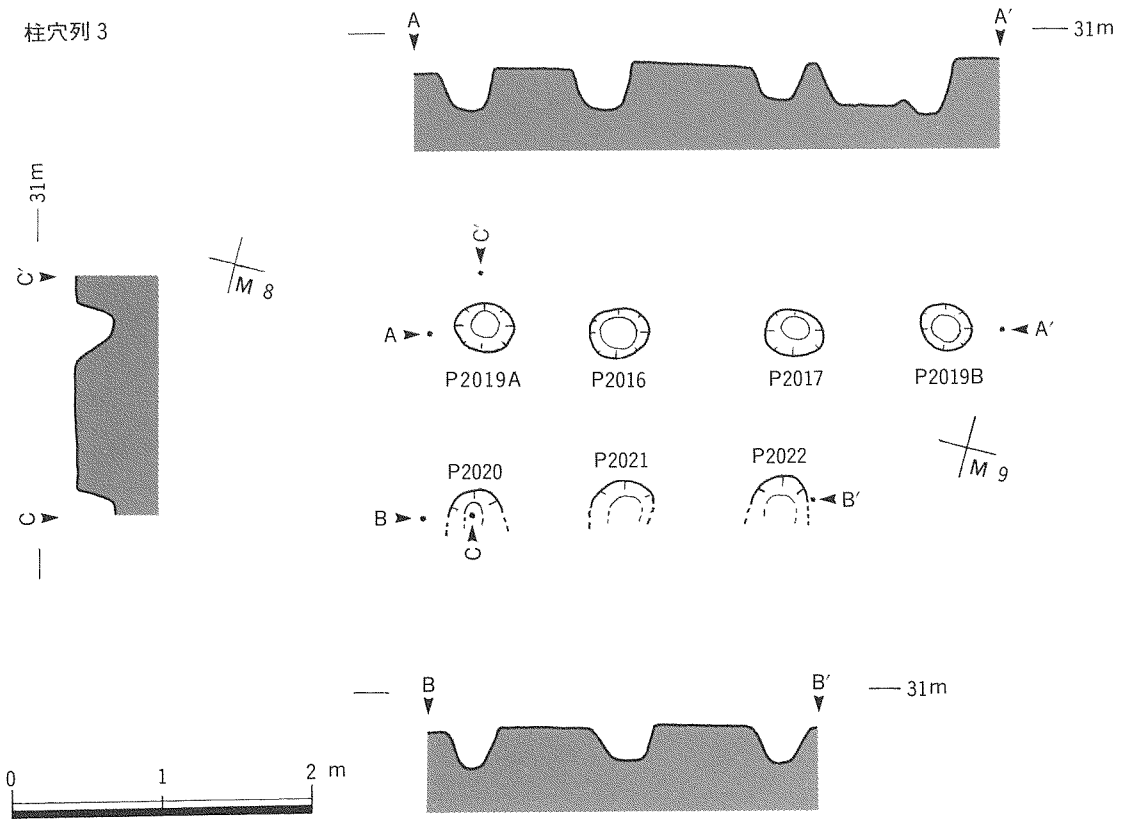
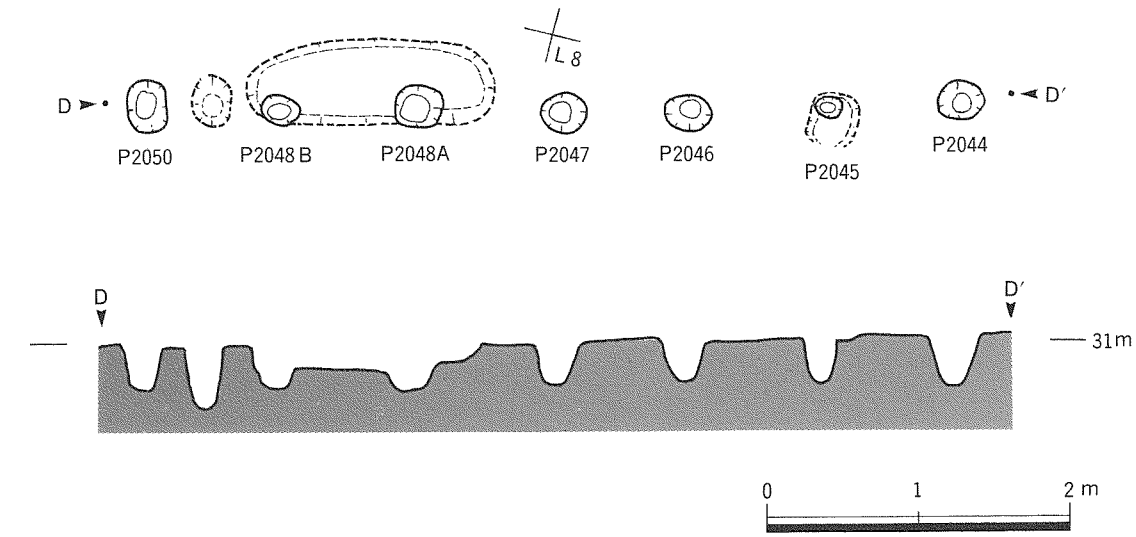
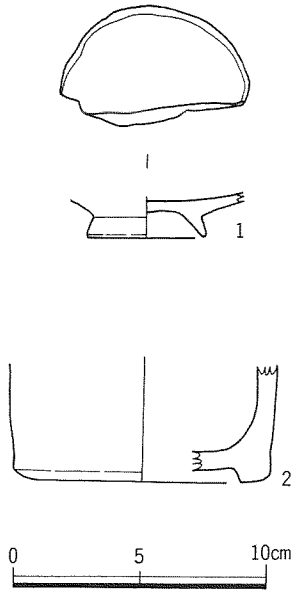


写真42　柱穴列４(南から)


柱穴列 3
A
A′
31m
31m
C′
C
M 8
C′
A
A′
P2019A
P2016
P2017
P2019B
M 9
P2020
P2021
P2022
B
B′
C
B
B′
31m
0
1
2 m


柱穴列 4
L 8
D
D′
P2050
P2048 B
P2048A
P2047
P2046
P2045
P2044
D
D′
31m
0
1
2 m

第14図　柱穴列 3 ・ 4



第15図　SD2004出土の遺物

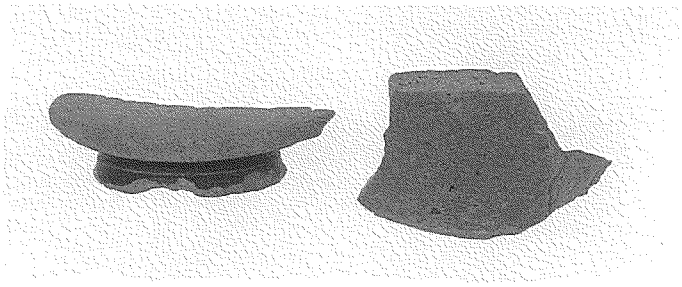


写真43　SD2004出土の碗・火入れ

写真44　SK2005出土の陶製卸し金

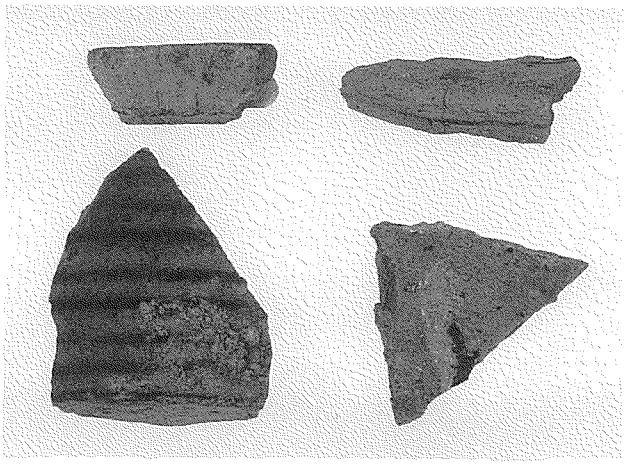
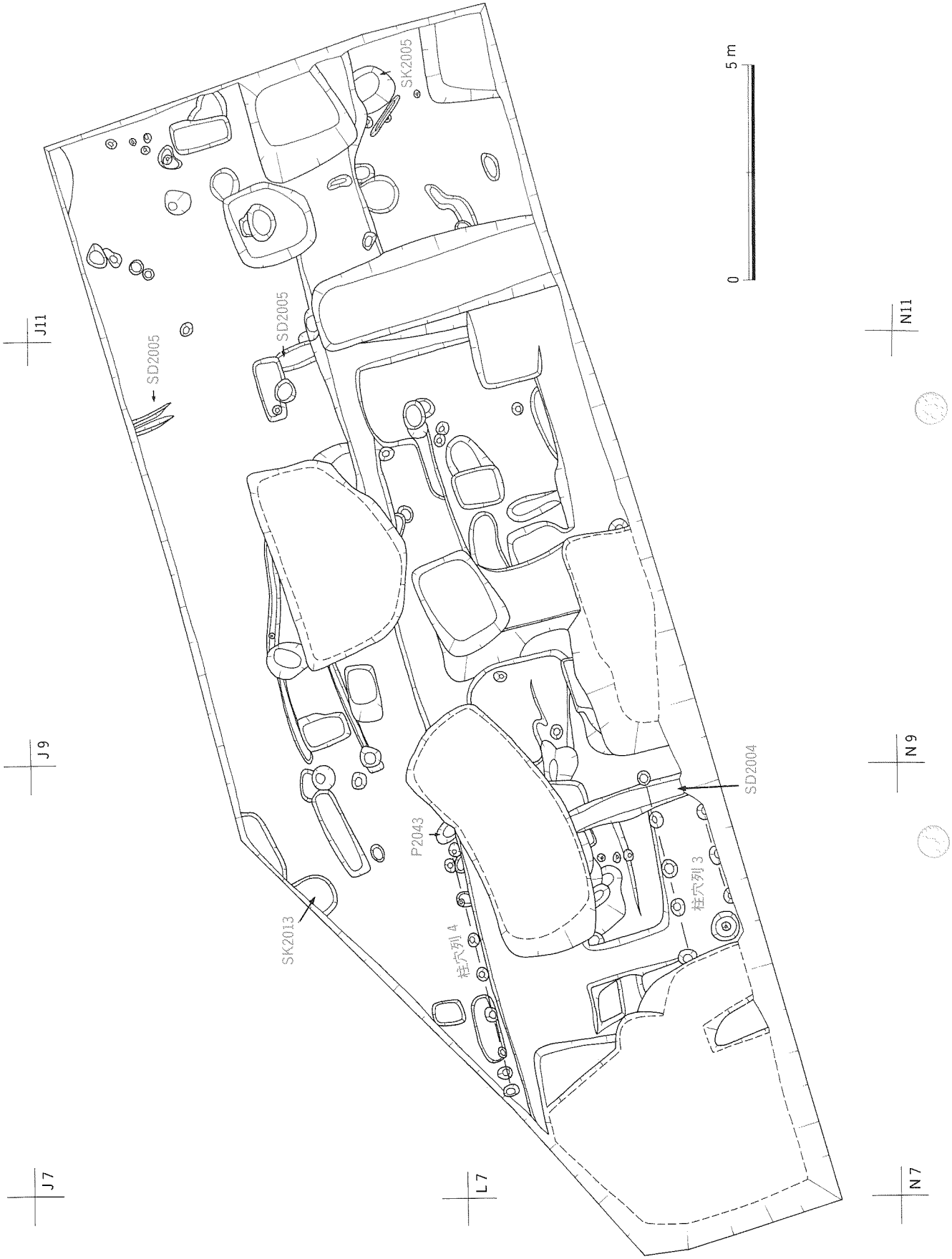


写真45　P 2043・2048 A 出土の匣鉢


SK2005
SD2005
SD2005
SD2004
P2043
SK2013
柱穴列 4
柱穴列 3
J11
J9
J7
L7
N11
N9
N7
0
5 m

第16図　B・C区遺構図

（4）　D区（第20図参照）

D区は、D－1、D－2区では、厚さ約60cmの表土を除去すると、厚さ約20cmの灰色土および灰褐色土の堆積があり、近世から近代の陶器が少量出土し、土坑や溝跡等が検出された。D－3区では、攪乱坑等があるものの遺構は認められない。D－4区は、約50cmの表土の下に10～15cmの灰色土および灰褐色土が堆積し、土坑などの遺構があり、近代以降の磁器などが出土している。

D－1区

SK3102

調査区北端（N14・N15・O14・O15Gr）で、直径2.5m程の円形状の遺構の南半分が検出された。深さは最大約5cmで、底部は平らである。埋土は、A区SK1018の埋土と類似する均質な淡黄褐色土、褐色土であるが、遺物は認められない。

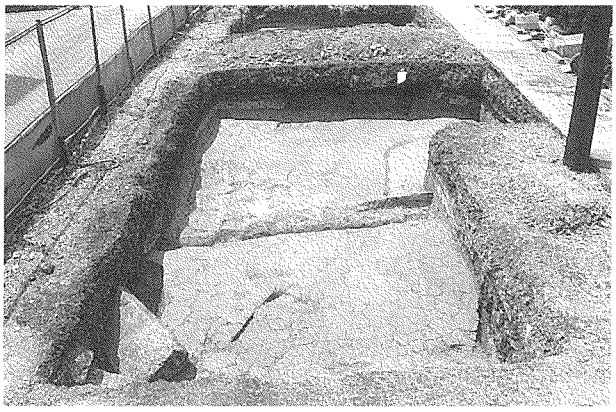


写真46　D－1区全景（北東から）

写真47　SK3102（南西から）

SD3101

O15Grで、幅60～70cm、深さ約35cmの溝が、N25°Wの方向に検出された。深さ約20cmのところで西側に段が付いて底にいたる。埋土は、灰褐色土に淡褐色土が混じり合うもので、底部では、3～5cm程の礫が投棄された状態で発見された。19世紀代と考えられる染付碗（第18図1・2　写真57）などと、須恵器や布目瓦（写真58）などの破片が出土している。第18図の3は香合の蓋（写真57）と思われる。

写真48　SD3101（西から）

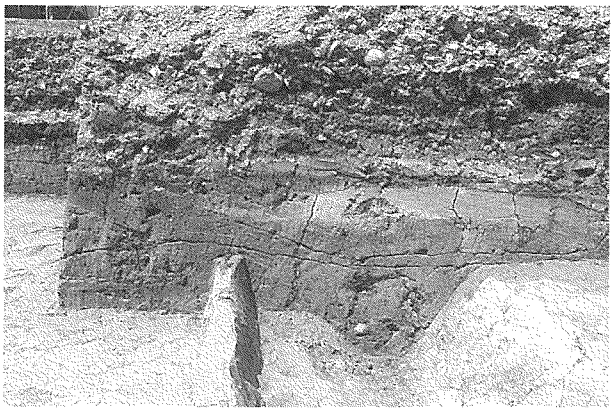
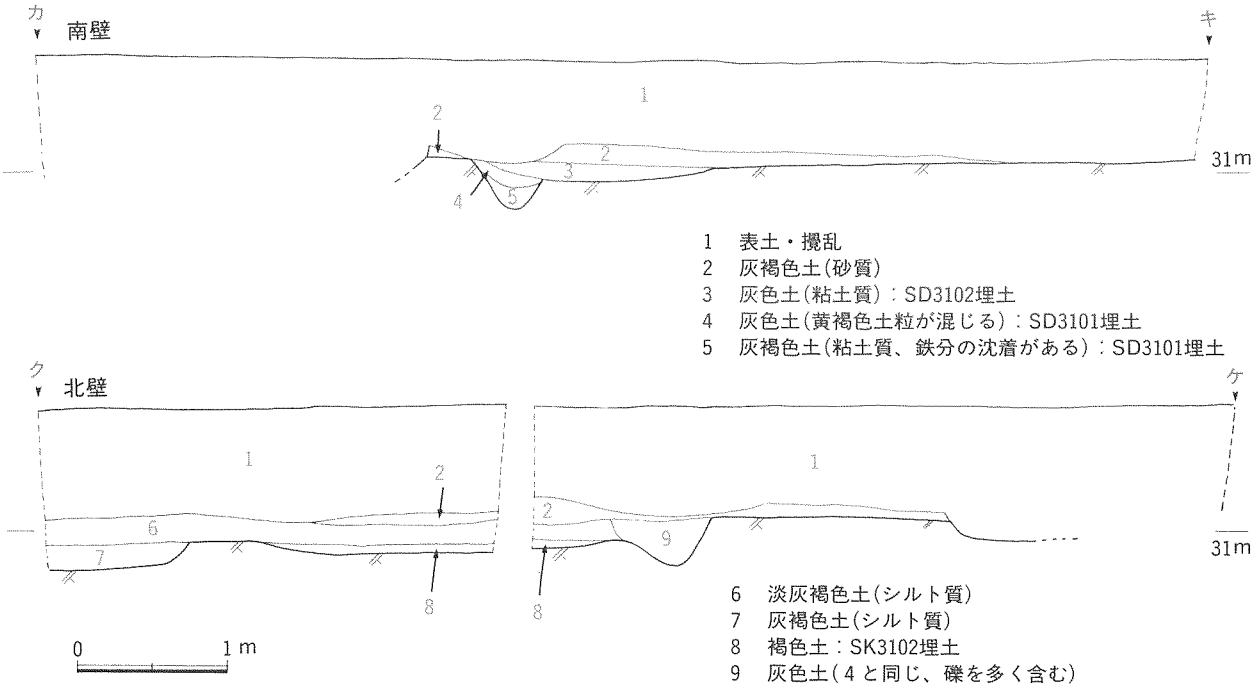


写真49　SD3101土層断面（南東から）



第17図　D-1区(南壁・北壁)土層断面図

SD3102

O14・O15Grで、幅約1.2m、深さは約10cmの溝が、N75°Wの方向に検出された。埋土は、灰色粘質土に青灰色シルト粒が混じるもので、水路のような役割を果たしたものと考えられる。埋土中からすり鉢片や窯道具(写真59)などが出土している。SD3101と南東側端が重複する関係にあり、埋土の相違から、SD3101より後につくられたと判断される。

その他

灰褐色土から須恵器片などが出土している。

D-2区

SD3203

O13・P13Grで、幅約30cm、深さ約10cmの溝が、N25°Wの方向に検出された。埋土は、灰褐色土に淡褐色土が混じり合うもので、底部で3～5cm程の礫が投棄される状態で発見された。埋土には、19世紀代と考えられる広東碗、染付碗など(写真60)と、瓦などが含まれている。D-1区のSD3101とほぼ同じ方向に走る。

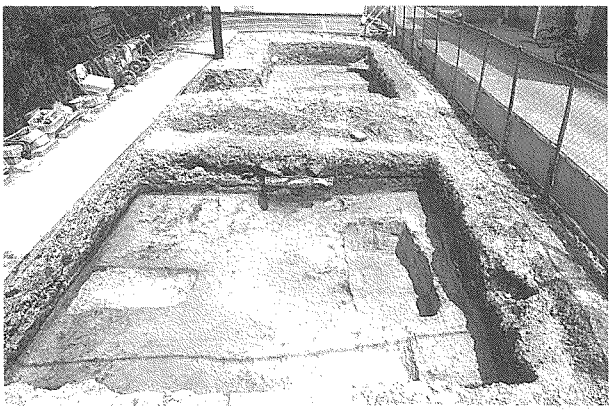


写真50　D-1・2区全景(南西から)

その他

数基の攪乱土坑や穴跡などが検出された。D-1区のSD3102は方向から推測すれば、D-2区での検出が予測され、SK3202(O14Gr)が対応する位

置にあるが、SK3202の埋土は暗灰色～暗灰褐色土であり、また、深さがSD3101より標高で約20cm深いため別の遺構と考えられる。SD3101の底面標高は約30.9m、D－2区の地山面は約30.8mであり、SD3102の痕跡を発見することはできなかった。

写真51　D－2区全景(北東から)

D－3区

攪乱土坑と小穴が2基ずつ検出されている。

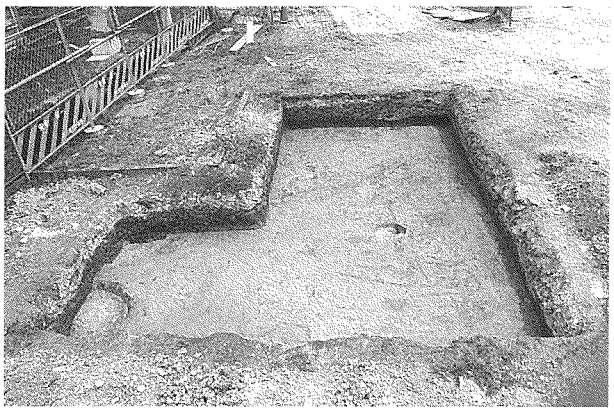


写真52　D－3区全景(南西から)

写真53　D－3区全景(北東から)

D－4区

SD3404

調査区東端(Q10Gr)で、幅約50cm、深さ約20cmの溝が、N25°Wの方向に検出された。埋土は、灰褐色土に淡褐色土が混じり合うもので、近代陶器が含まれている。

SX3401

調査区西半分(Q 6～8・R 6～8 Gr)で検出された。形状は、変則的な調査区のため、断定はできないが、一辺約6.5mの方形状遺構である。地山面上で検出し、発掘区北側外に続く。主軸はN20°W、深さは30～40cm、中央が深くなり、埋土の上層は赤褐色土、下層に約10cmの灰色粘質土層が堆積し、灰色粘質土層から須恵器片(写真61)、近世～近代陶磁器などが出土している。

その他

攪乱土坑や小穴が検出されている。

写真54　D－4区全景(南西から)

写真55　SX3401(北西から)

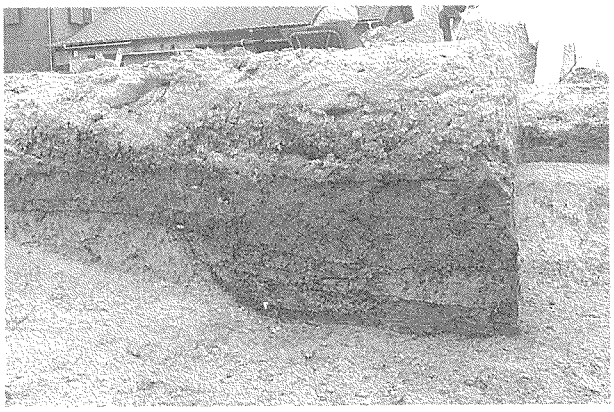
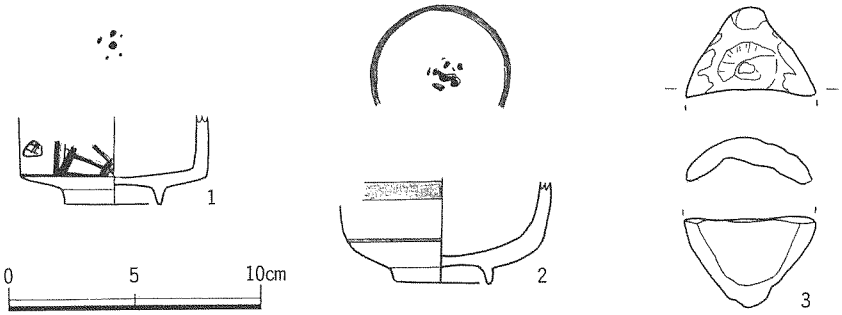


写真56　SX3401土層断面(北から)



第18図　SD3101出土の遺物

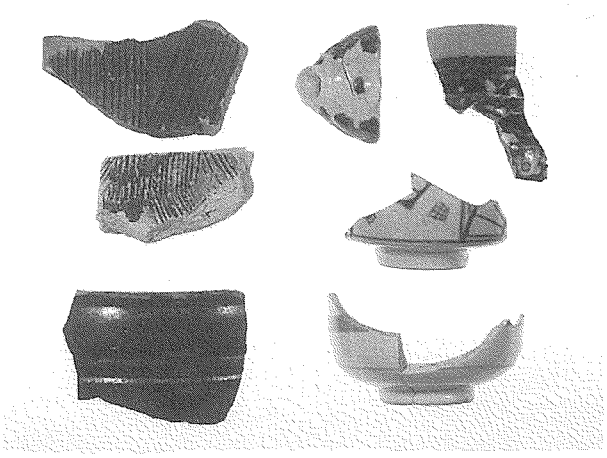


写真57　SD3101出土の遺物

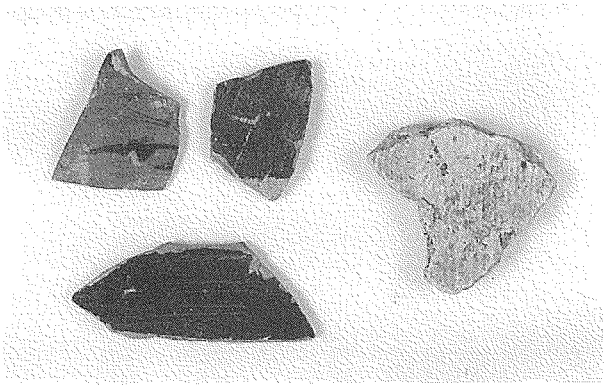


写真58　SD3101出土の遺物

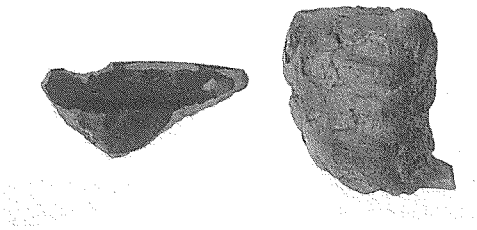


写真59　SD3102出土の遺物

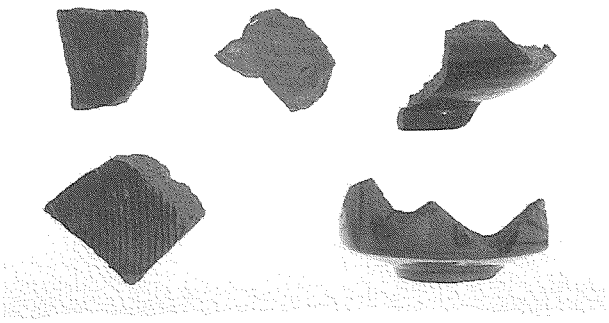


写真60　SD3203出土の遺物

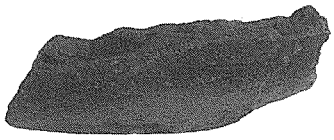
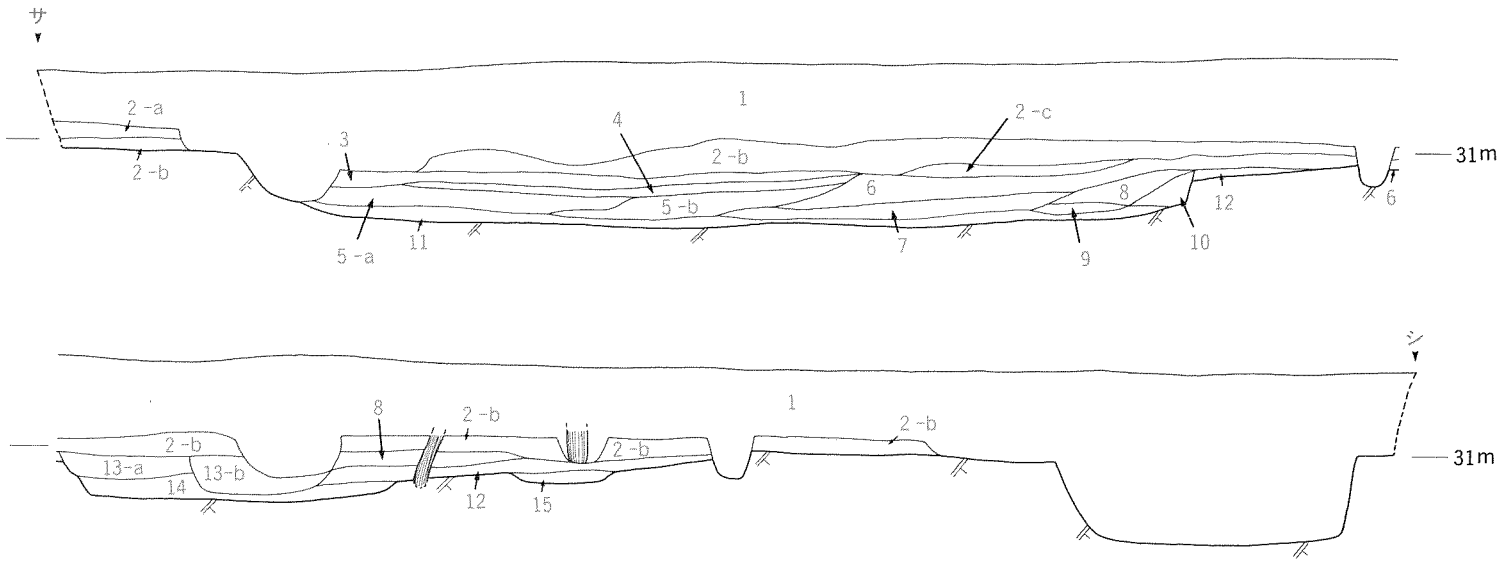


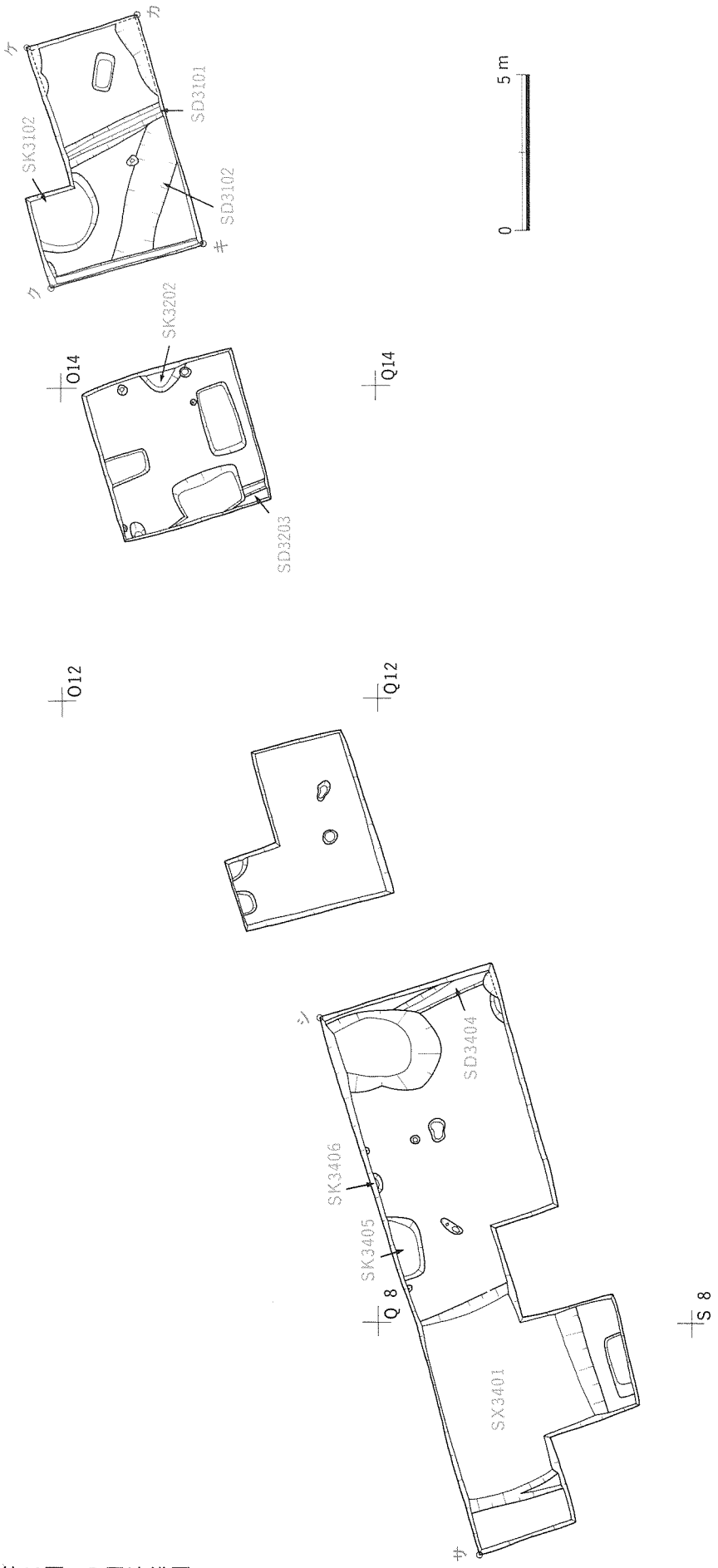
写真61　SX3401出土の遺物



第19図　D-4区(北壁)土層断面図

1　表土・攪乱
2-a　暗灰褐色土（炭化物を含む、黄褐色土粒が混じる）
2-b　暗灰褐色土（シルト質、炭化物を含む、黄褐色土粒が混じる）
2-c　暗灰褐色土（2-aに類似し、黄褐色土粒がより多く混じる）
3　灰褐色土（シルト質、炭化物を少量含む、鉄分の沈着がある）
4　褐色土（シルト質、鉄分の沈着がある）
5-a　淡灰褐色土（シルト質、礫を含む）
5-b　淡灰褐色土（5-aに類似し、礫をより多く含む）
6　橙褐色土（礫を含む）
7　黄褐色土（砂質、礫を含む）
8　黄灰褐色土（シルト質、礫を含む）
9　淡灰褐色土（砂質、礫を含む）
10　黄灰色土（シルト質）
11　橙褐色土（粘土質、礫を含む）：3～11はSX3401埋土
12　暗灰褐色土（粘土質、礫を含む）
13-a　橙褐色土（シルト質、礫を含む、鉄分の沈着がある）
13-b　橙褐色土（13-aに類似し、礫をより多く含む）
14　暗灰褐色土（粘土質、礫を含む）：SK3405埋土
15　灰褐色土（シルト質、鉄分の沈着がある）：SK3406埋土

0　1　2m


SK3102
SD3101
SD3102
SK3202
SD3203
O14
O12
Q14
Q12
SD3404
SK3406
SK3405
Q 8
SX3401
S 8
0
5 m

第20図　D区遺構図

（5）　E区（第24図参照）

E－1区

調査区の東側では、建物基礎撤去に伴う攪乱土坑が数基あり、コンクリート塊などが埋っていた。北端付近で、部分的に褐色土が残存していたが、遺物は出土していない。

SK4015

D20・E20Grで、炊き口が東に付くカマド1基が検出されている。主軸はN55°Wを向き、短辺約70cm、長辺約110cm、深さ最大約25cmの半月状の掘り込みがつくられる。埋土は、上層が焼土粒を含む灰褐色土、下層はわずかに焼土粒を含む炭化物層が瓢箪形状に広がり、遺物は発見されていない。南に大きく広がる灰層範囲（短辺約65cm、長辺約3m）があり、カマドから排出した灰が捨てられたものと理解される。上側の焼土は、西側がアーチ状に部分的に残存し、良く焼けていた。火熱を受けた範囲は、中央から南東側で、北西側には広がっていない。

写真62　E－1区全景（北西から）

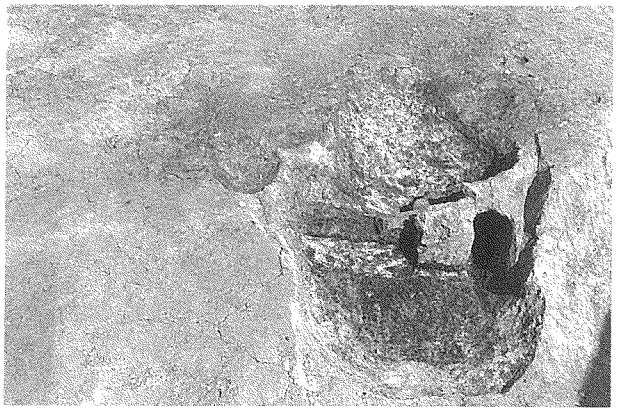


写真63　SK4015（北西から）

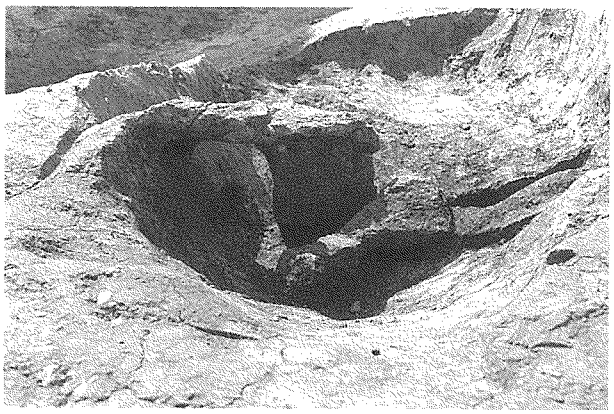


写真64　SK4015（南東から）

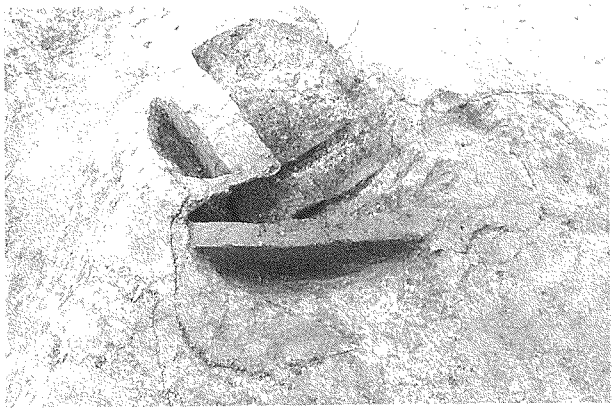


写真65　SK4015(南から)

写真66　SD4007(北東から)

SD4007・4009

調査区の北西側(D19・D20・E20・F20・G20・G21Gr)、SK4015と接する位置で、幅約70cm、深さ約25cm、U字形を呈する溝が、N25°Wの方向に検出され、北側でN115°Wあたりの方向に屈曲し、E-2区のSK5006・SK5007が、この溝より後に掘り込まれて、溝は跡切れる。南側は、E-2区のSD5004・5005に続き、浅い現代攪乱坑で跡切れる。検出長はE-1、E-2区合せて約17.5mである。溝の埋土は、灰褐色砂質土で下層は黄色シルトの塊を多く含み、近代陶器片が出土した。

写真67　SD4008(北東から)

SD4008

SD4007、SK4015と重複する位置で検出され、幅は20～40cm、深さは最大約8cm、東に向かって浅くなり跡切れる。検出長は約6m、N115°Wの方向に走る。埋土は灰色土で、遺物は出土していない。SD4007、SK4015と重なり、その埋土中に掘られている。

柱穴列5

調査区の南壁際(H22・23Gr)に、径約40cm、深さ約30cmの方形状の穴がN105°Wの方向に4基(P4001～4004)検出されている。P4001とP4002、P4003とP4004の間は、約1.1m、P4002とP4003の間は、約1.7mある。埋土は黄褐色シルトの塊を多く含む暗灰色土で、重なっている他の遺構より新しいものである。また、E-2区SD5003の西端にある穴は、P4004から約1.7m離れ、埋土や規模、形状が同じであり、柱穴列5の続きと考えられる。

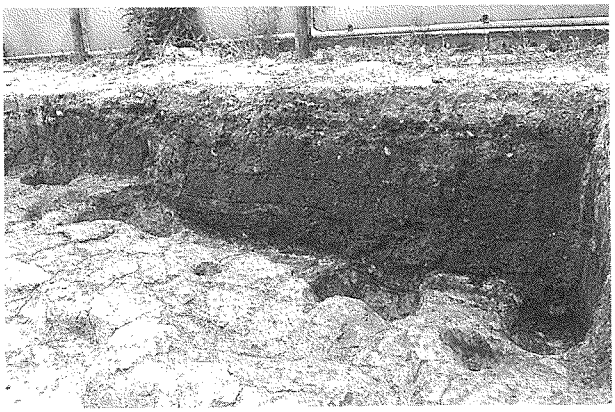
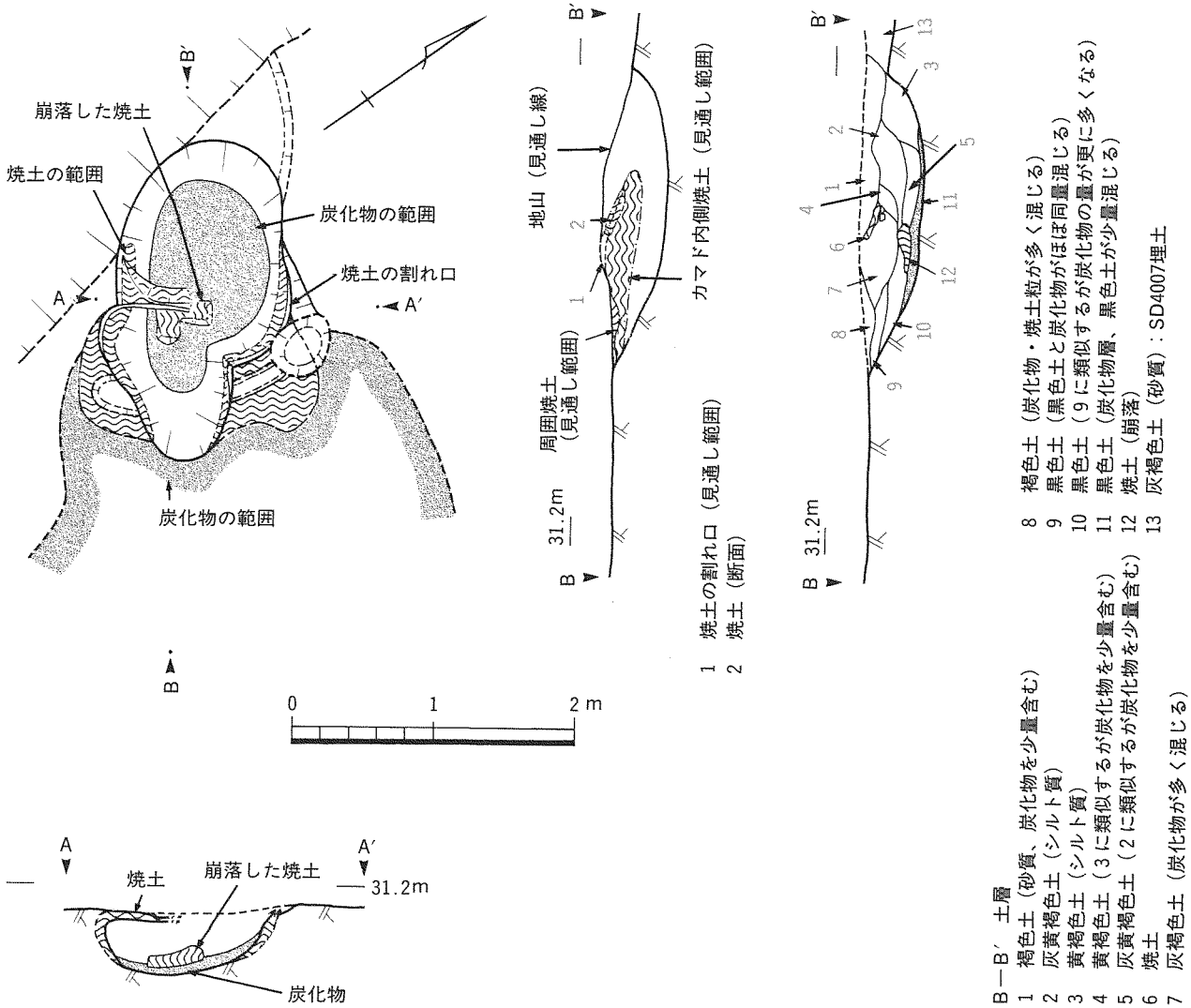


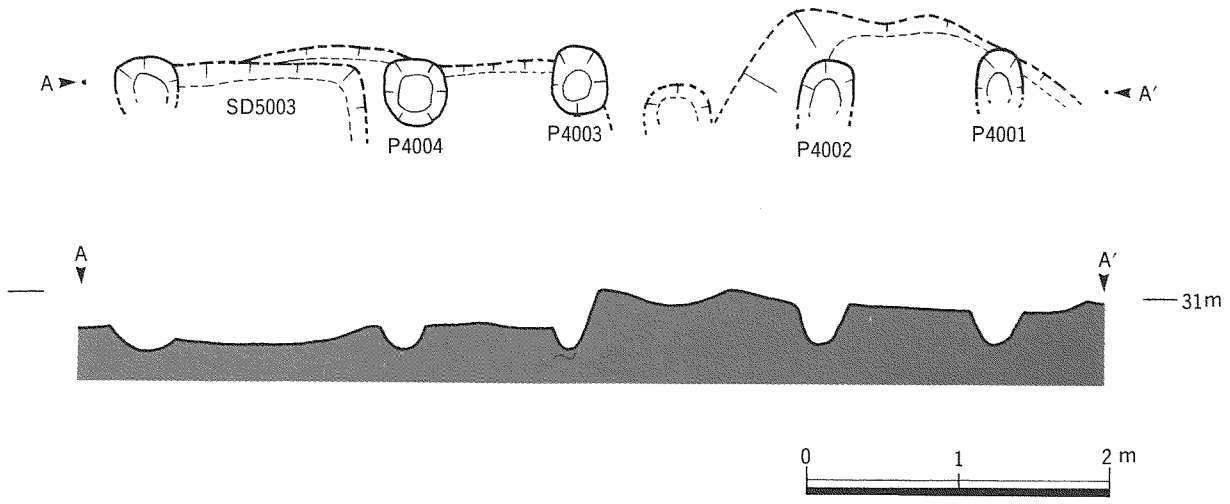
写真68　E-1区南壁土層断面

防空壕

SK4001はF22・G22Grで検出され、東側が調査区外にあるため長さは不明であるが、幅は長辺



第21図　SK4015



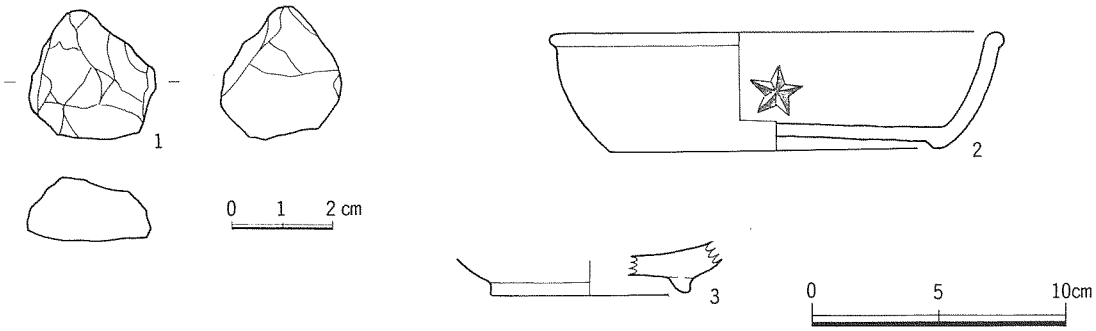
第22図　柱穴列５

1.7m以上、短辺約1.3m、深さは地山面から約90cm、ほぼN115°Wの方向を向く。北側には、幅約90cm、長さ約2.2mの西方向に張出し部分があり、両側の側面に沿って直径10～20cm程の小穴が複数ある。穴と穴の間に板状のものを置いたような溝があり、土留め用の横板か床状のものを支える役割であったと思われる。穴の間隔は50～70cm程であり、物を置くための施設であろうか。また、南西隅にも直径約20cmの柱状の穴がある。

SK4011(F20Gr)は、幅約1.2m、長さ約1.8m、N115°Wの方向に検出されている。底面には瓦が敷き詰めてあり、四隅と中央、長辺の中央に15～40cmの小穴がある。深さは地山面から最大で約20cmしかなく、防空壕とは別のものの可能性もある。SK4011は SD4007を壊してつくられている。

その他

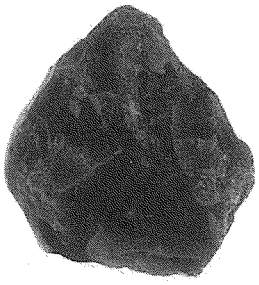
E-1区の遺物は、SD4001(H22・23Gr)からチャート製の火打石(第23図1　写真69)が出土し、表土から山茶碗底部(第23図3　写真72)が出土している他は、すべて近～現代のものである。P4071(D20Gr)からは、内側に星マークのついた碗(第23図2)が出土し、P4008からは磁器碗や蓋(写真70)、方形の匣鉢(写真71)などが出土している。



第23図　E-1区出土の遺物

写真69

SD4001出土の火打石



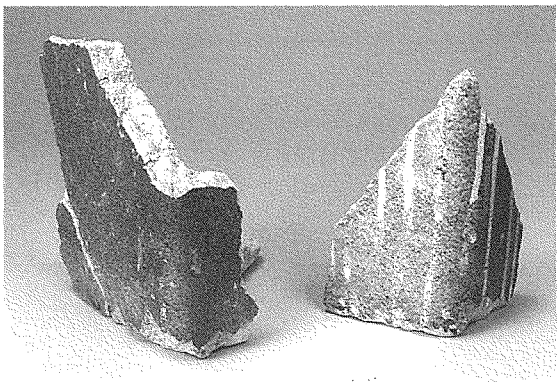
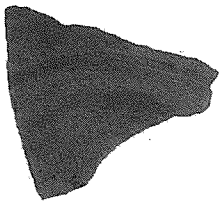
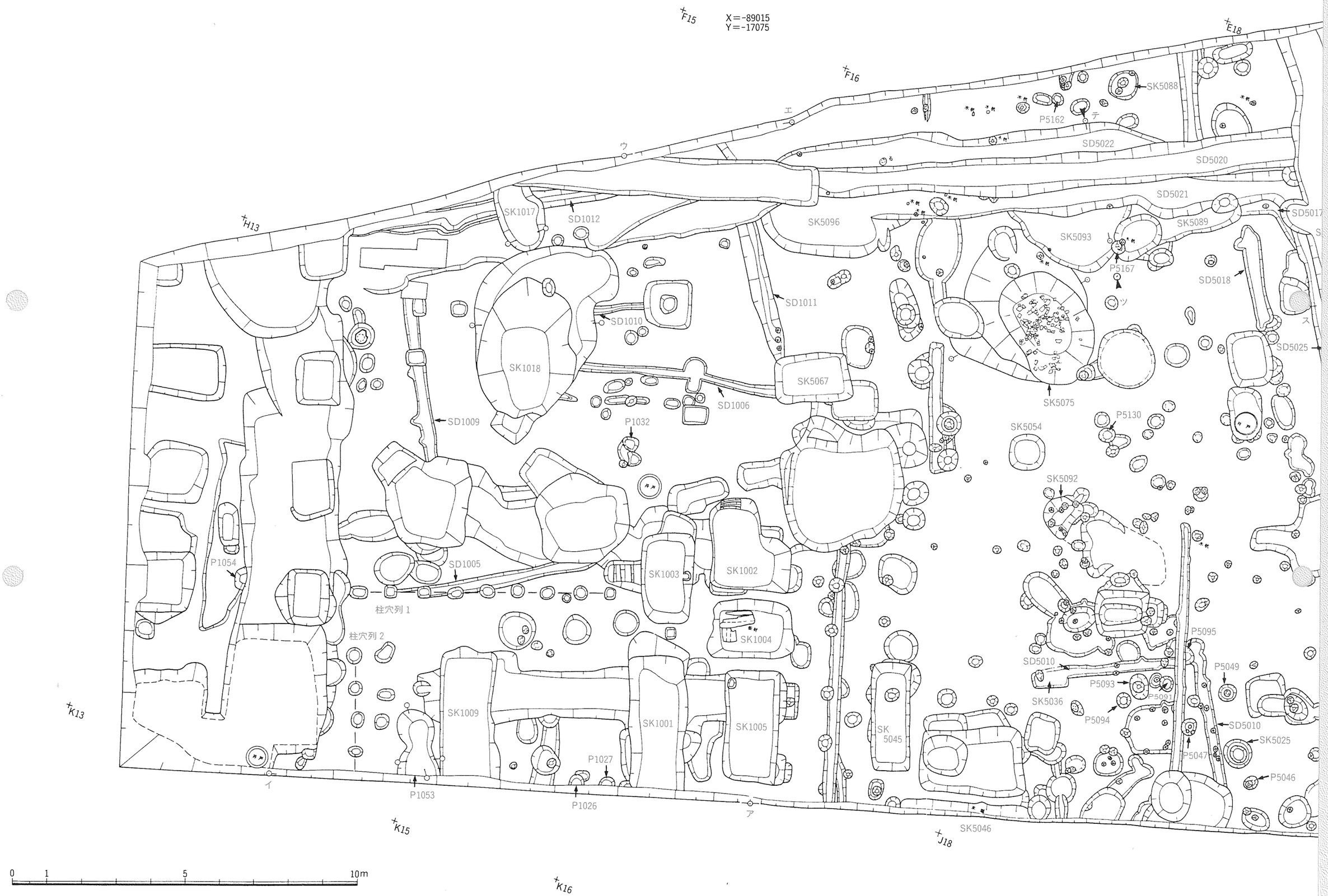


写真71　P4008出土の匣鉢

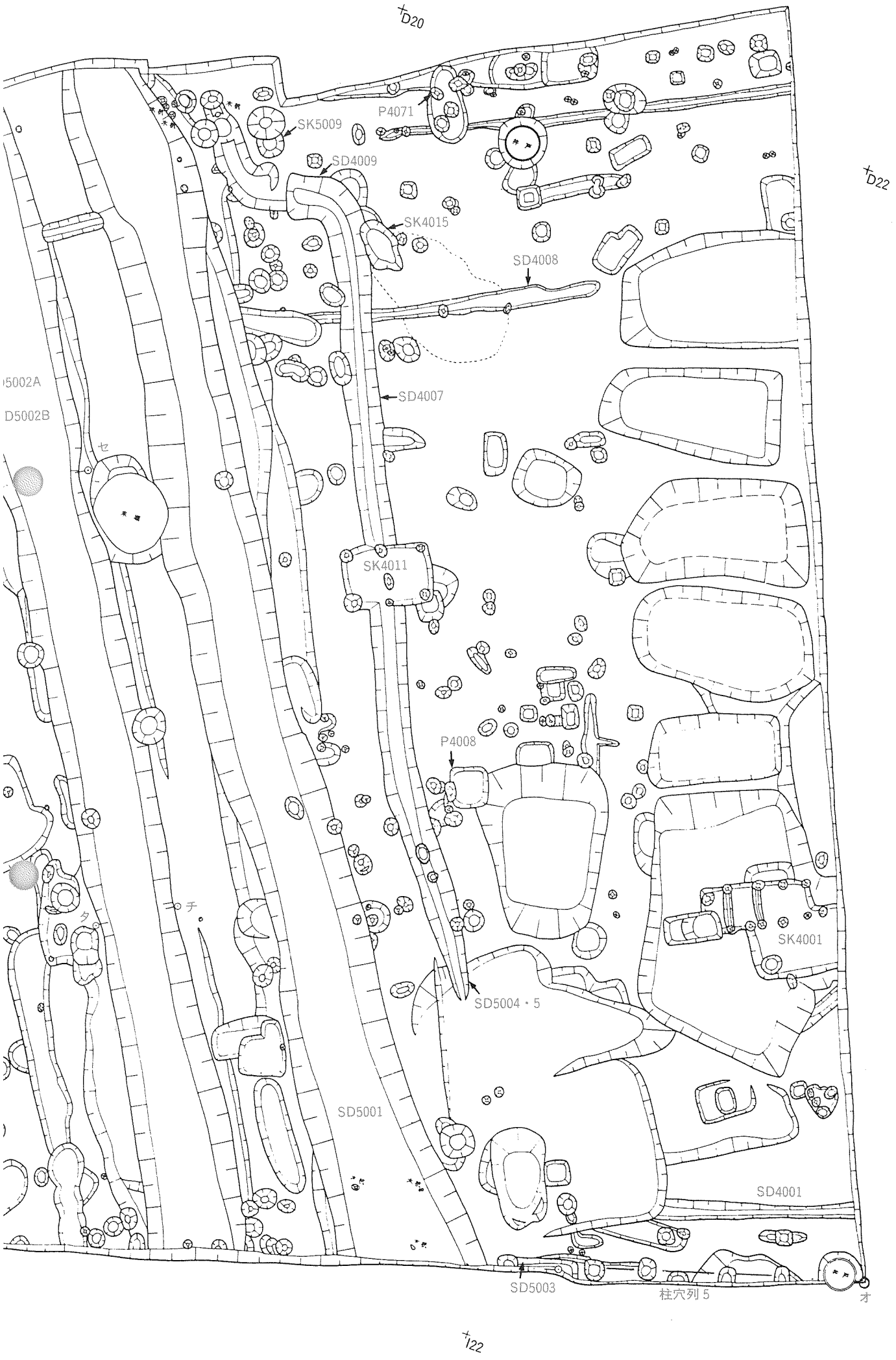
写真70　P4008出土の遺物

写真72
表土出土の山茶碗

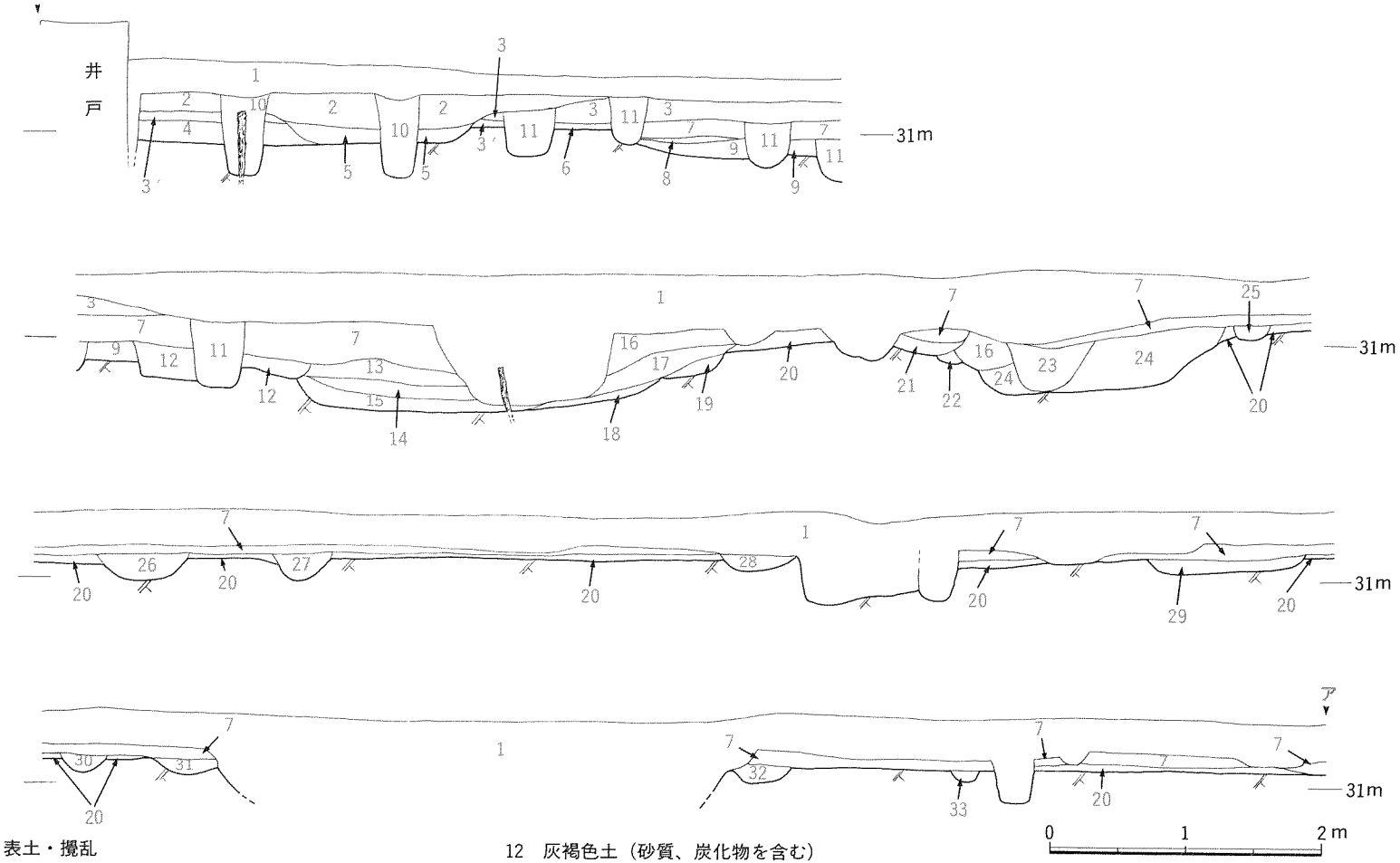



F15
X=-89015
Y=-17075
F16
E18
H13
K13
K15
K16
J18
SK5088
P5162
SD5022
SD5020
SD5021
SK5089
SD5017
SK5093
P5167
SD5018
SD5025
SK5075
P5130
SK5054
SK5092
SK1017
SD1012
SK5096
SD1011
SD1010
SK1018
SK5067
SD1006
SD1009
P1032
P1054
SD1005
SK1003
SK1002
SK1004
柱穴列 1
柱穴列 2
SK1009
SK1001
SK1005
SK 5045
P1027
P1053
P1026
SK5046
P5095
SD5010
P5049
P5093
P5091
SK5036
P5094
SD5010
SK5025
P5047
P5046
ア
イ
ウ
エ
オ
カ
キ
ク
ケ
コ
サ
シ
ス
セ
ソ
タ
チ
テ
0
1
5
10m

第24図　A・E区遺構図


D20
D22
P4071
SK5009
SD4009
SK4015
SD4008
SD4007
5002A
D5002B
セ
SK4011
P4008
チ
タ
SK4001
SD5004・5
SD5001
SD4001
SD5003
柱穴列 5
オ
122

第25図　E-1・2区(南壁)土層断面図



1　表土・攪乱
2　灰色土（砂質、礫を含む）
3　灰褐色土（砂質、礫を含む、黄褐色土粒を含む）
3′　灰褐色土（3に類似し、粘質が強い）
4　茶褐色土（シルト質）
5　褐色土（シルト質）
6　淡灰褐色土（シルト質）
7　灰褐色土（シルト質、炭化物を含む）
8　黄白色土（粘土質）
9　暗灰色土（シルト質）
10　灰色土（粘土質）：P4001・4002埋土
11　灰色土（黄褐色土粒が混じる）：P4003・4004・4015埋土
12　灰褐色土（砂質、炭化物を含む）
13　暗灰色土（シルト質、礫を含む）
14　灰色土（シルト質、鉄分の沈着がある）
15　青灰色土（シルト質）：13～15はSD5001埋土
16　黄褐色土（シルト質、礫を含む）
17　淡灰色土（礫を多く含む）
18　灰色土（シルト質）
19　淡灰色土（シルト質）：17～19はSD5001西溝埋土
20　淡灰褐色土（シルト質）
21　淡灰色土（砂質、礫を多く含む）
22　灰色土（シルト質）
23　暗灰褐色土：SD5002B埋土
24　淡灰褐色土：SD5002A埋土
25　淡灰褐色土（黄褐色土粒が混じる）：P5038埋土
26　淡灰褐色土：SK5018埋土
27　灰褐色土（砂質）：P5042埋土
28　淡灰褐色土：SD5010埋土
29　黄灰褐色土（シルト質、黄褐色土粒が混じる）：SK5031埋土
30　淡灰褐色土：SD5013埋土
31　灰褐色土（黄褐色土粒が混じる）：P5088埋土
32　暗灰褐色土（シルト質）：P5101埋土
33　黄灰褐色土（シルト質、黄褐色土粒が混じる）：SD5018埋土

E－2区

表土を除去すると、厚さ約5cmの褐色土が中央から南側にかけて残存し、褐色土を埋土とする遺構から、須恵器が出土している。明らかに現代攪乱と判断される痕は比較的少なく、調査区東側と北側では、近世～近代の溝が集中し、中央部で、8世紀頃の須恵器が出土する土坑や、穴などの遺構が検出された。

SK5075

F17・G17Grで、長辺約3.4m、短辺約2.3m、深さ約60cmの楕円形を呈する土坑が、N45°Wの方向に検出された。埋土は、上層が、厚さ5～10cmの黒褐色土で、中層が淡灰黄褐色土、下層が淡灰褐色土である。遺物は、上層から数点の須恵器が、中層以下から須恵器の杯や甕などが5～10cm大の20数個の礫とともに出土し、礫とともに廃棄された状態を示していた。須恵器は、杯蓋、杯身、高杯、甕、横瓶などで、文字が刻まれた須恵器甕の口縁部片がある。第27図1の蓋(写真81)は、偏平な体部にヘラ削りが認められ、口縁端部がくの字状に折返され、2の蓋(写真80)は偏平な宝殊が付き、口縁端部は内側に折返し、かえりが見られない。3～5は高台の付く杯(写真83～85)で高台は八の字状に外に開き、接地面は平坦である。4と5は底部中央が高台より外側に突出している。6の杯(写真82)は平底で、体部は直線的に立上がり、深い形状である。7の底部(写真86)には糸切痕が残る。8は高杯杯部(写真89)、小型で体部はやや丸みがあり

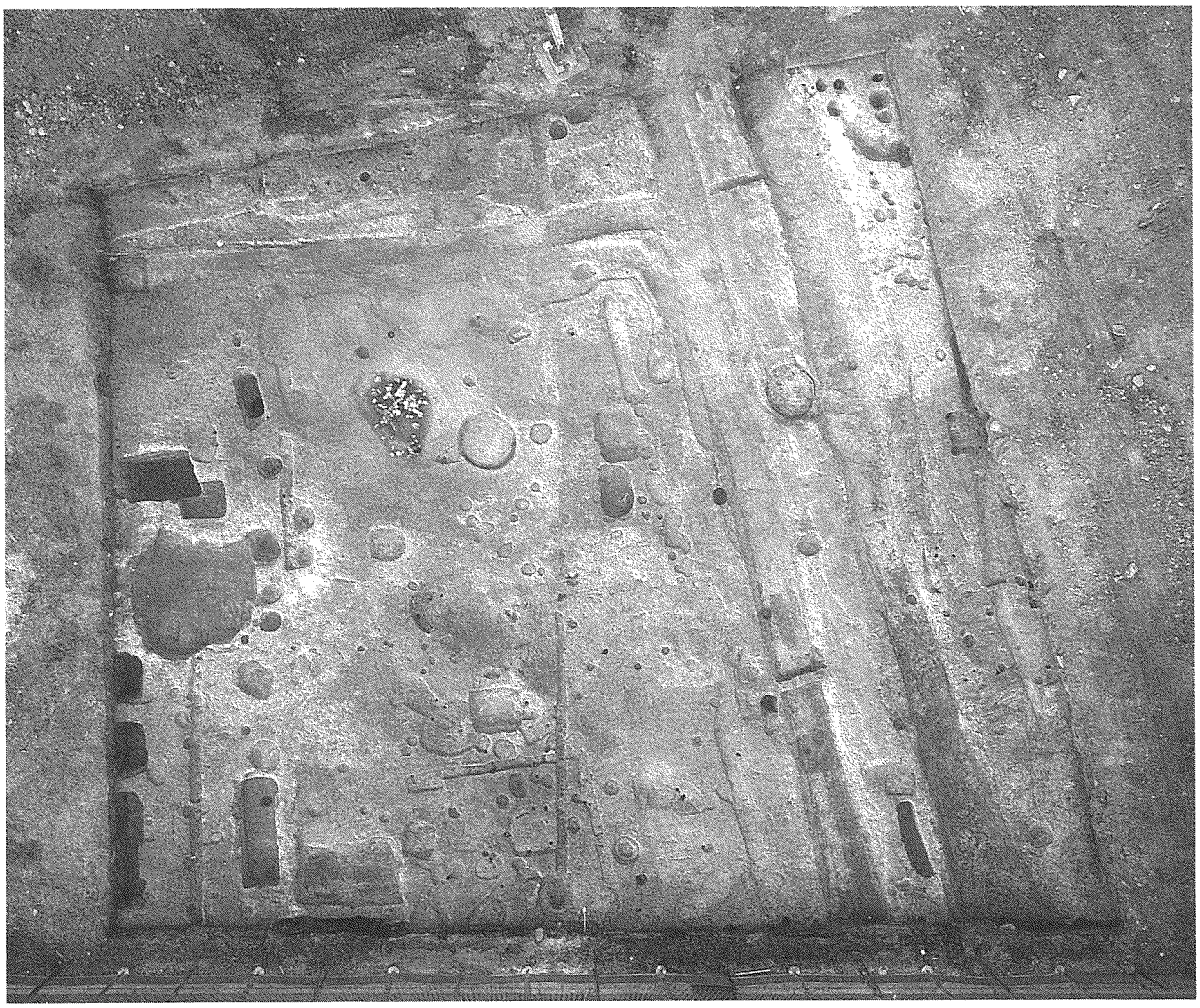


写真73　E－2区全景

口縁部は直立する。９の脚部(写真90)には透かしはない。12は鉢(写真92)で、外面にタタキがあり、口縁端部は面をつくる。10は長頸瓶の頸部(写真87)、11は瓶の底部(写真87)であろうか。第28図１の甕口縁(写真93)外側には、口縁に沿って『黒見田□□』と刻まれている。６は滑石製の刀型の石製模造品(写真88)で孔が穿たれている。同様のものがもう１点出土している。SK5075の北西側には、自然の凹みとも考えられる淡灰褐色及び褐色土の広がりがあるため、幅は約４ｍ、深さはSK5075と接する位置で約15cm、SK5075に向かって低くなるが、この広がりは不整形であるため、淡灰褐色及び褐色土は包含層で、低い部分に残存した可能性もある。

SK5075の北側にあるSD5021やSK5088、SK5093から出土した須恵器の中には、SK5075の遺物と接合ができるものがある。このことから、推測すると、SK5075は近代に削平され、その遺物が散乱した可能性がある。SK5075の検出面は、褐色土あるいは黄褐色土(地山)であり、埋土は、上層の黒褐色土の更に上にもあり、それが削平された可能性が高い。

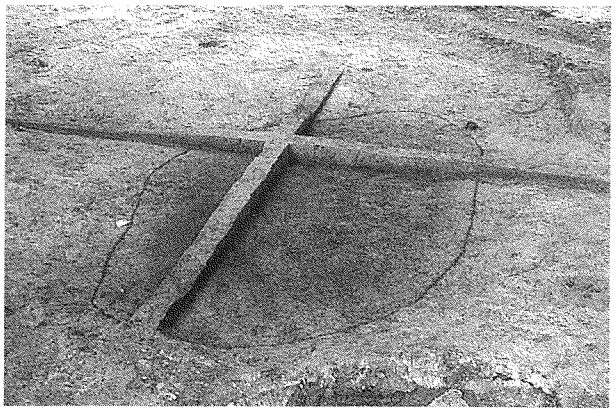


写真74　SK5075(南東から)

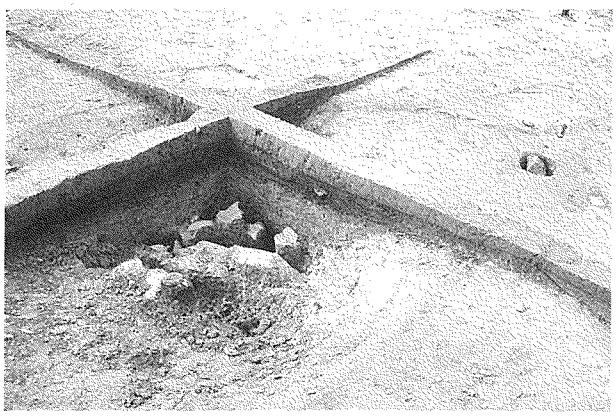


写真75　SK5075(東から)

写真76　SK5075(南東から)

写真77　SK5075(南東から)

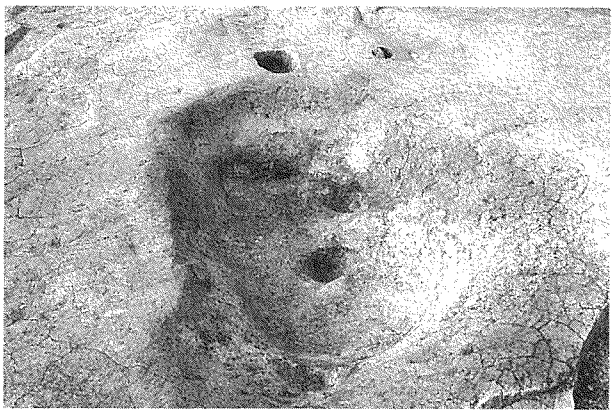
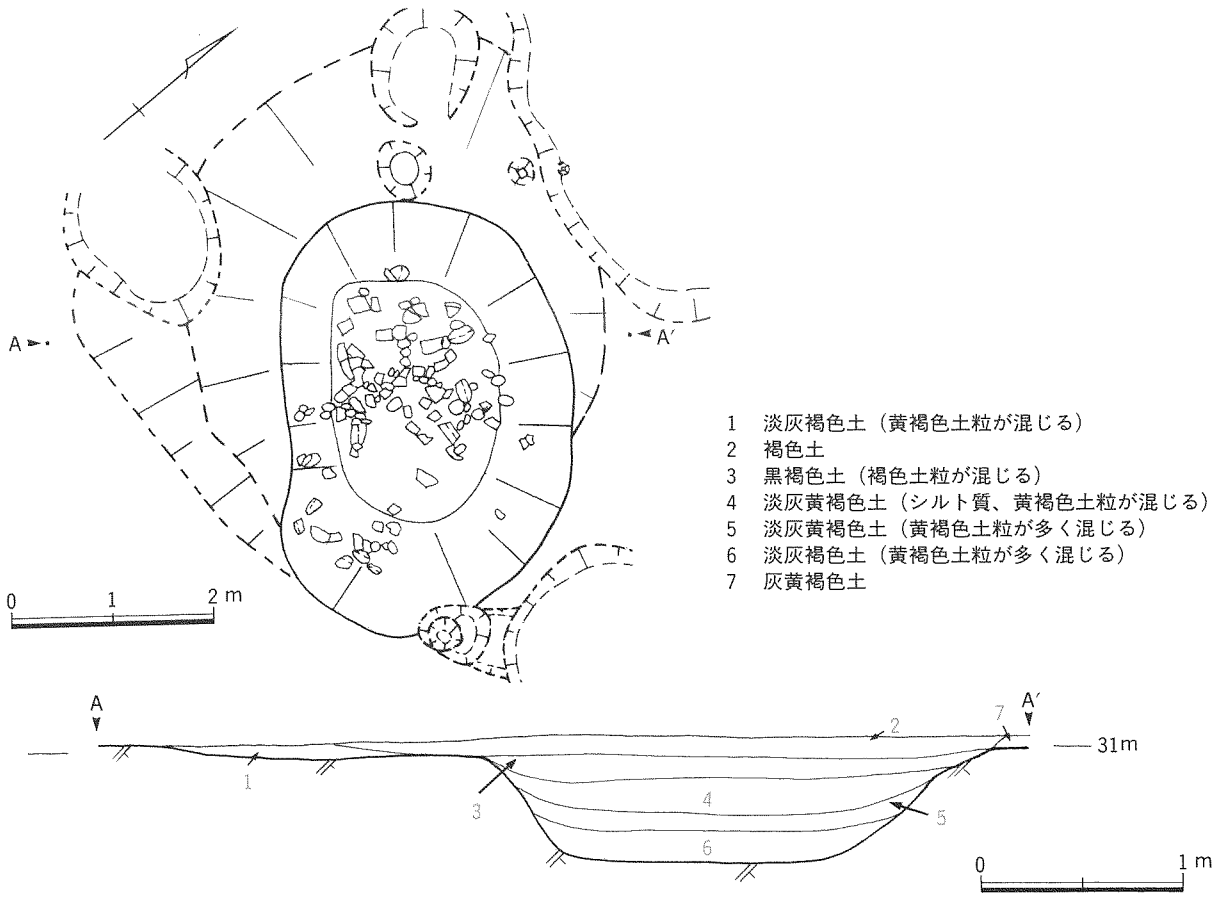
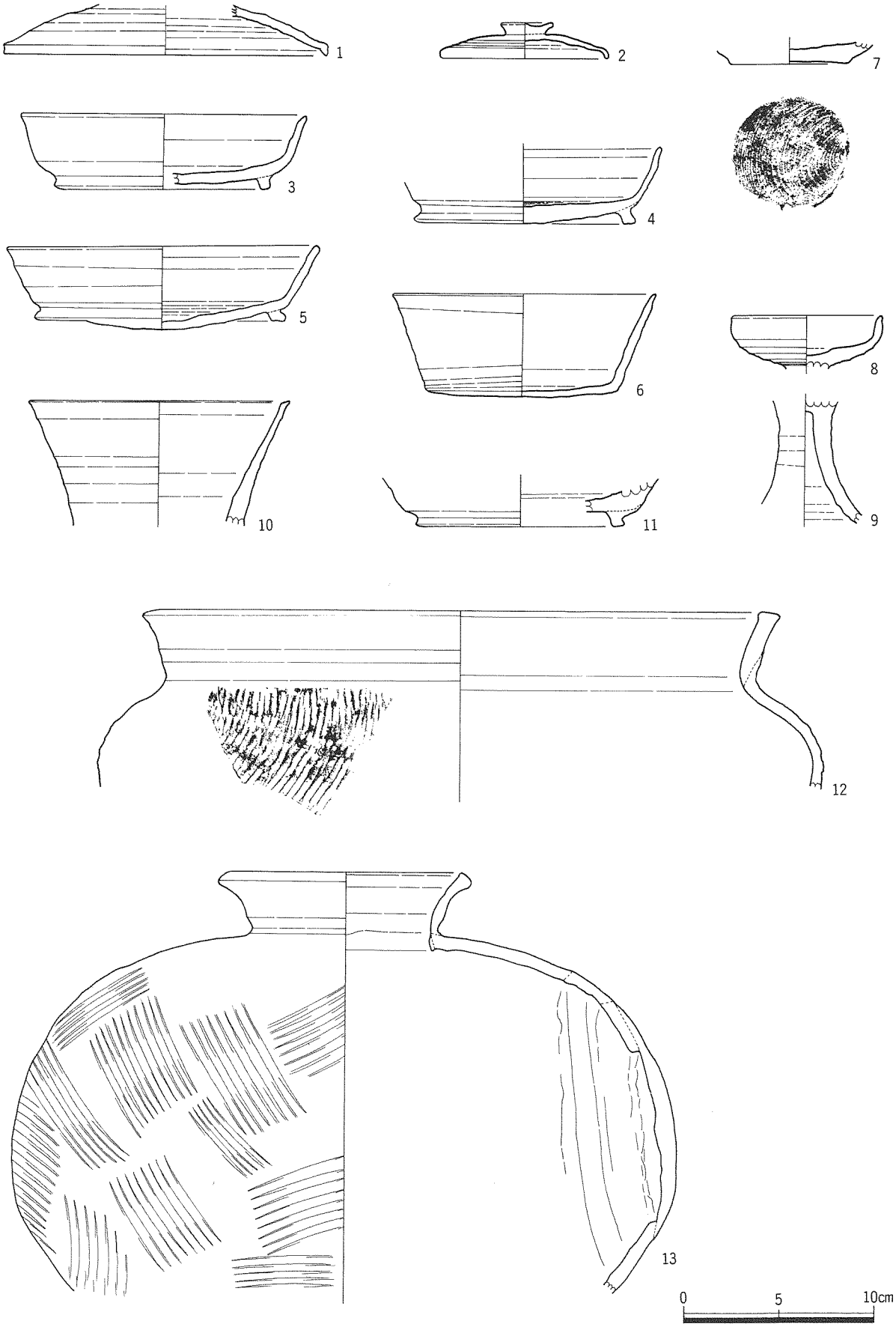


写真78　SK5075(南東から)

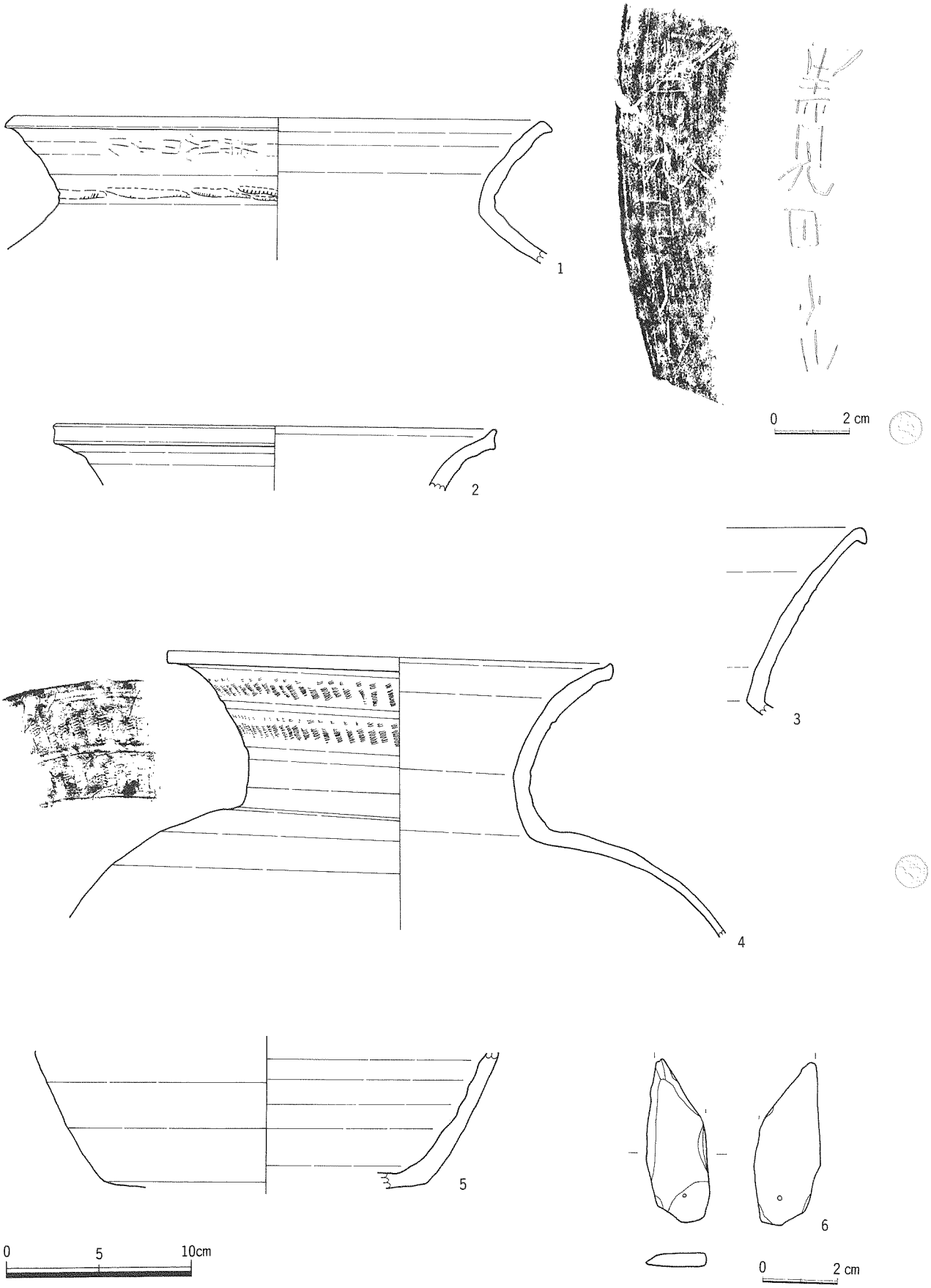


第26図　SK5075

写真79　SK5075（南から）



第27図　SK5075出土の遺物（1）



第28図　SK5075出土の遺物（２）

写真80　須恵器蓋

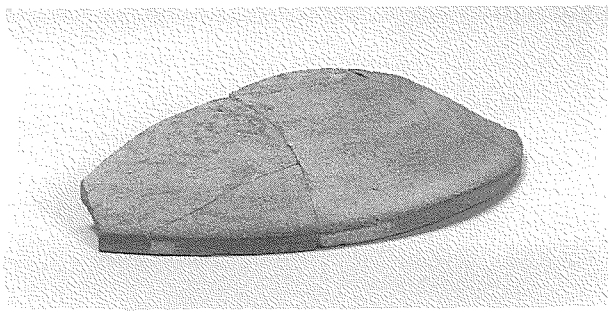


写真81　須恵器蓋

写真82　須恵器杯

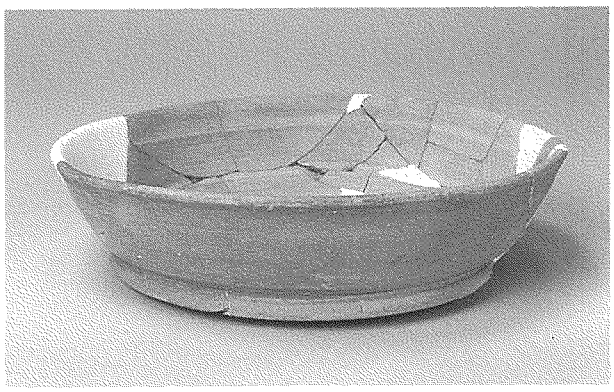


写真83　須恵器杯

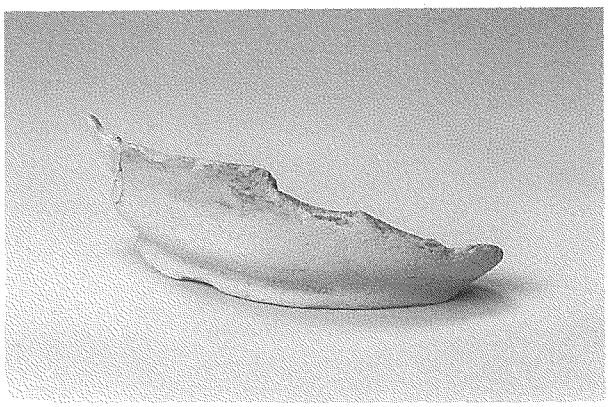


写真84　須恵器杯

写真85　須恵器杯

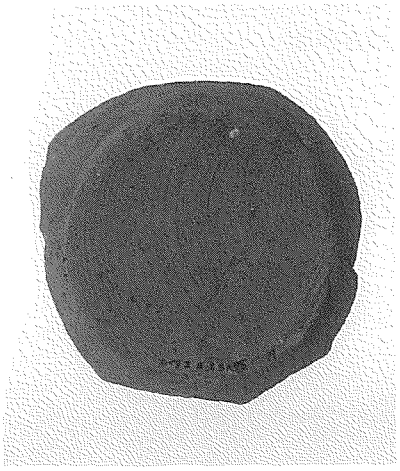


写真86　須恵器杯

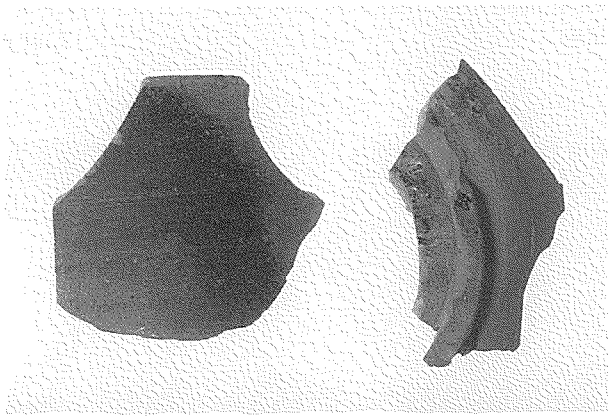


写真87　須恵器長頸瓶

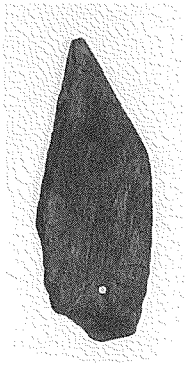


写真88　石製模造品

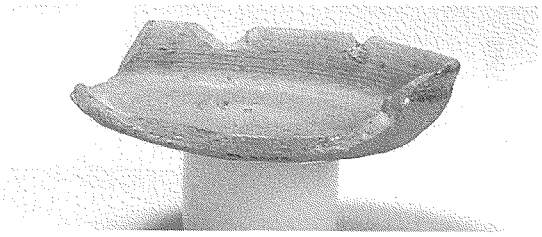


写真89　須恵器高杯

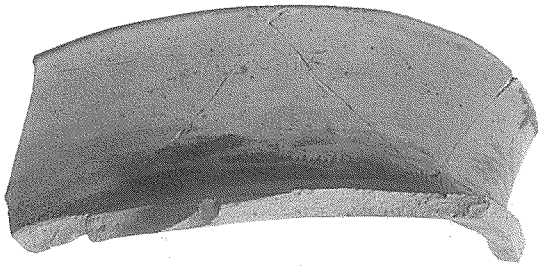


写真93　須恵器甕

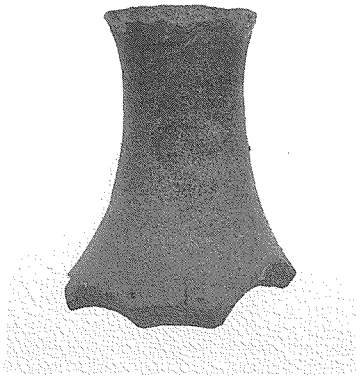


写真90　須恵器高杯

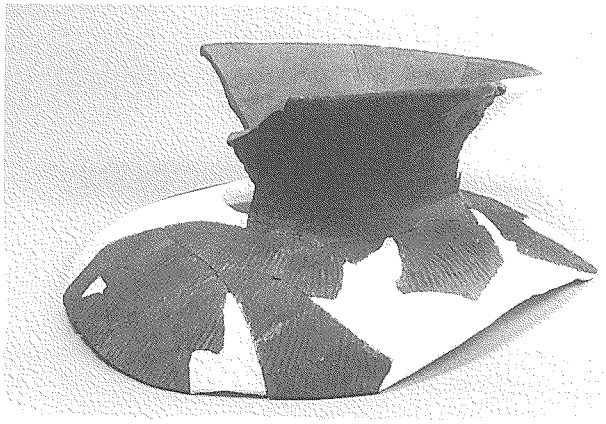


写真94　須恵器甕

写真91　須恵器横瓶

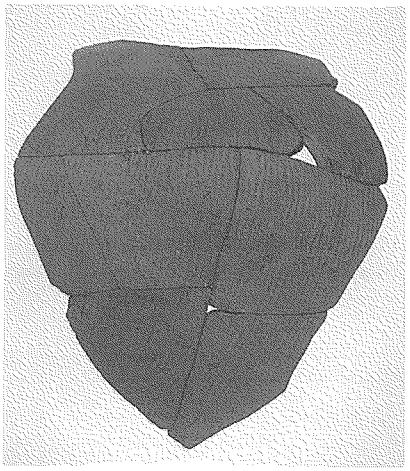


写真95　須恵器甕

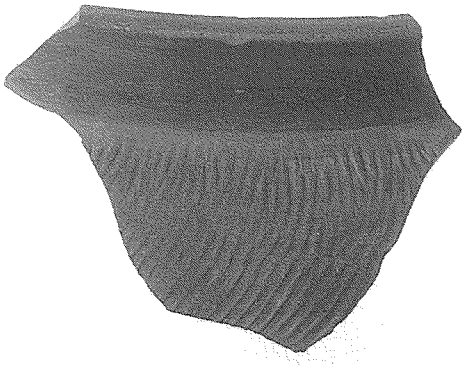


写真92　須恵器鉢

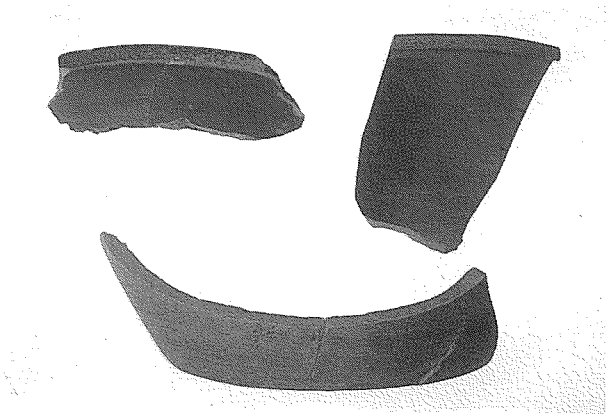


写真96　須恵器甕

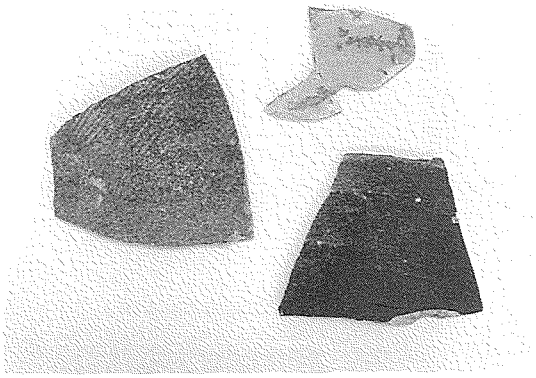


写真97　SK5089出土の須恵器

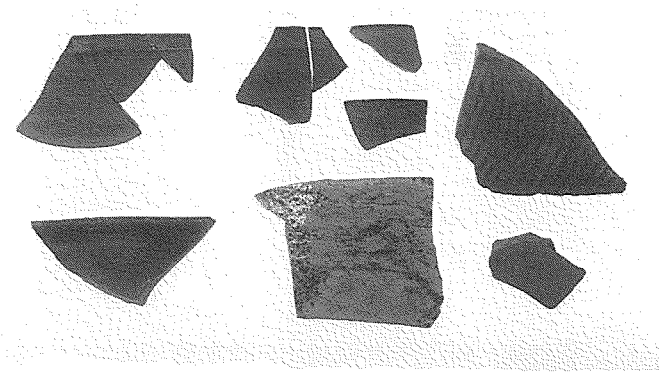


写真98　SK5093出土の須恵器

写真99　SK5096出土の須恵器

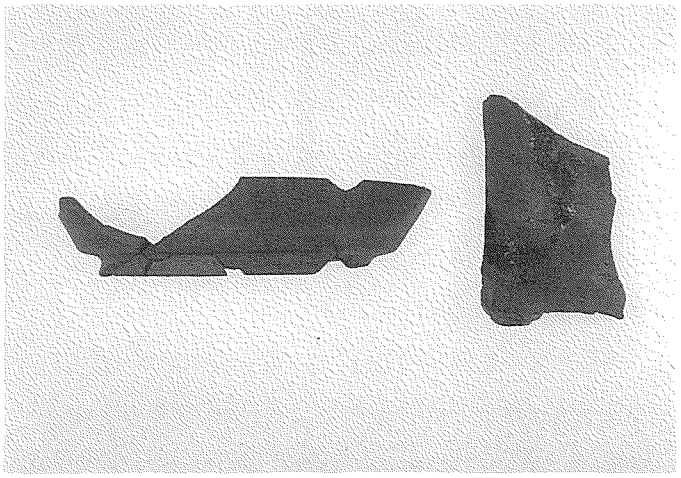


写真100　SD5021出土の須恵器

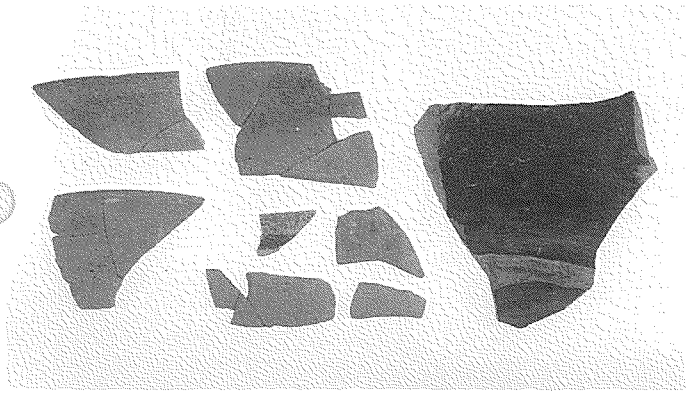


写真101　SD5022出土の須恵器

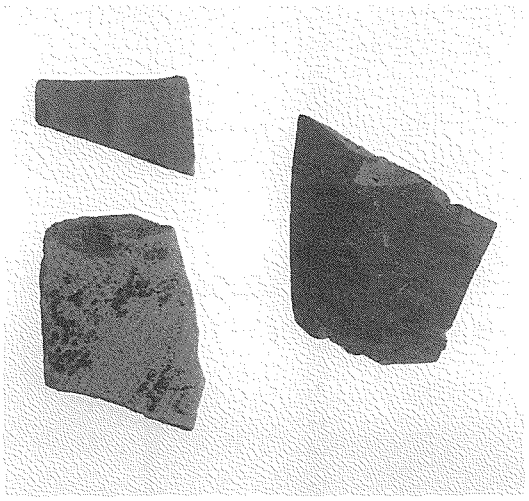


写真102　SD5001・5002出土の須恵器

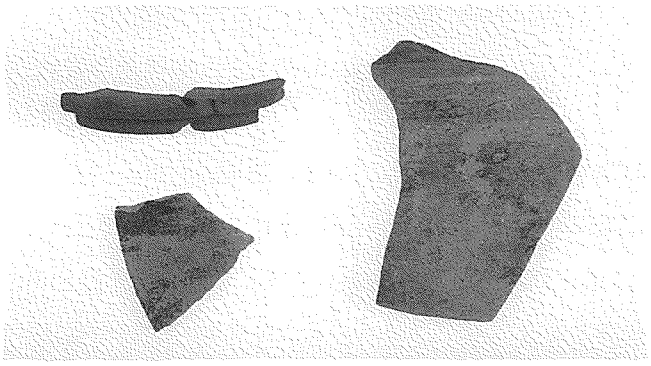
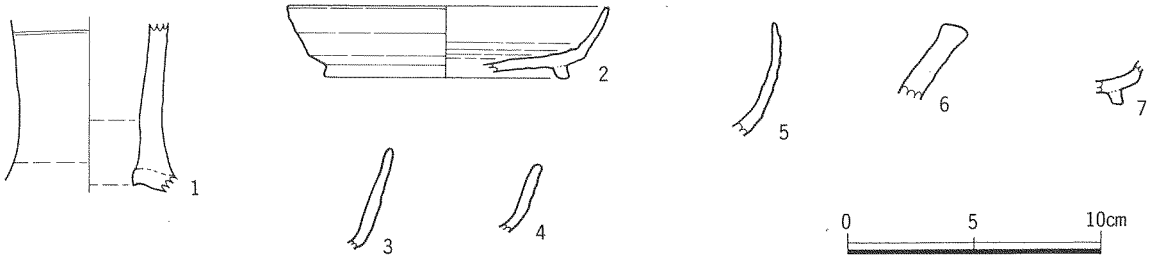


写真103　P 5162・5167出土の須恵器



第29図　SD5075周辺出土の須恵器：SD5021(1・2)・SD5022(3・4)・SK5093(5・6)・P5162(7)

SK5089

F18Gr で、幅約60cm、長さ約2.5m、深さは最大で約15cm、N120°Wの方向に発見されている。SD5020・5021に切られ全容は不明である。埋土は、淡灰褐色土で須恵器片(写真97)や小瓶(第30図1　写真105)、碗など陶器が出土している。

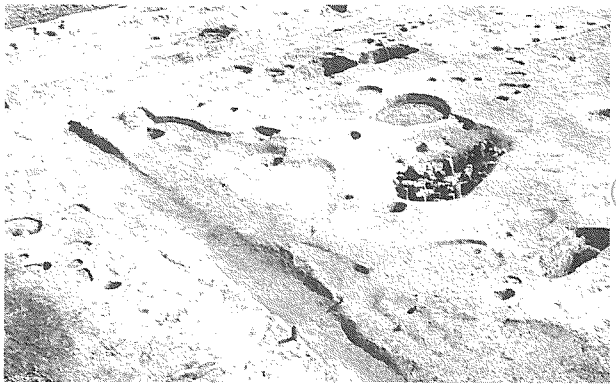


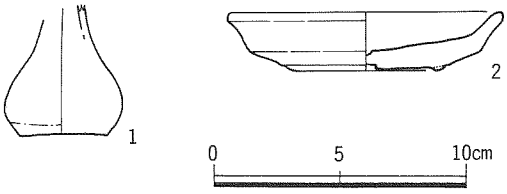
写真104　SK5075・5089・5093(西から)

SK5093

SK5075の北側(F17Gr)で、長辺約3.3m、短辺約2.2m、深さが約10cmの土坑が、N75°Wの方向に検出された。SD5020・5021によって切られているため、全容は不明だが、方形を呈すると思われる。埋土は、SK5089と同じ淡灰褐色土で須恵器杯・甕口縁片(第29図5・6　写真98)、近世陶器などが出土し、SK5075出土の甕片と、この土坑出土の甕口縁片が接合できた。

SK5096

F16・G16Gr で、長辺約3.7m、短辺約1.7m、深さは最大で約20cm、N105°Wの方向に発見されている。SD5021などに切られているため全容は不明である。埋土は灰褐色土で須恵器片(写真99)、山茶碗底部が出土している。



第30図　SK5089(1)・P5095(2)出土の遺物

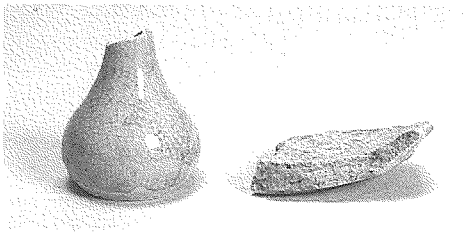


写真105　SK5089・P5095出土の遺物

SK5092

G18・H18Gr で、炊き口が東側に付くカマドがN70°Wの方向に発見されている。長辺約1.2m、短辺約1m、深さ最大約20cmの半月状の掘り込みがつくられ、東側で一端高くなり、更に東に焼土塊や炭化物が、長辺約2.9m、短辺約1.6mの楕円形状に広がり、深さは最大約10cm、東に向かって浅くなる。掘り込み内は、焼土塊と炭化物で埋っていた。A区やE-2区で検出されたようなアーチ状の焼土や火熱を受けた面は、確認できないが、形状から同じようなカマド状の遺構と考えられる。遺物は発見されていない。

写真106　SK5092(南東から)

写真107　SK5092(南から)

SD5001

D18～H21Gr で、幅約1.9m、深さ約50cm、逆台形を呈する溝が、N30°Wの方向に検出されている。埋土は、上層は礫を含む暗灰色土、下層は青味のある灰色シルト質土で、底から約10cmには5mm以下の炭化物が多く混じっていた。南側壁面土層をみると、現代攪乱があるものの、SD5001の西側に淡灰色土、灰色シルト質土を埋土とし、西側に段の付いたU字形の溝があり、SD5001はその埋土中に掘られている。先行する西側の溝は約2.5mの長さまで確認できる。SD5001の南端底部には、直径約10cmの板状の杭跡が数箇所残っている。遺物は、先行する溝や現代攪乱の出土遺物と区別ができていないが、徳利、ゆき平、ガラス瓶など近世～現代の遺物と須恵器片(写真102)が出土している。第33図の1は花瓶(写真111)、底部は三角形を呈し、胴部は丸く、輪状の把手が両側に張付られている。2は徳利(写真111)で、『□島屋』ともみえる。

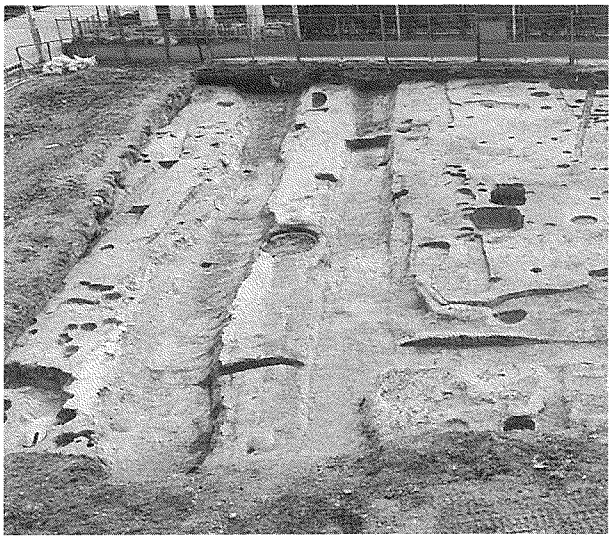


写真108　SD5001・5002(北西から)

SD5002A・SD5002B

D18～H20Gr で、SD5002Aは、幅約1.8m、深さ約40cm、N30°Wの方向に検出されている。SD5001より西へ約1mの間隔で並行する。埋土は、上層は淡灰褐色土、下層は灰色シルト質土で5mm大の黄褐色シルトブロックを含み、断面は底部にやや丸みのある逆台形を呈する。SD5002Aの埋土中に掘られた溝(SD5002B)がある。SD5002Bは、幅0.6～1m、深さは土層断面によれば、Aよりやや深く、方向は南端ではAの埋土中の西側、北側では東際を走り、わずかに北を向く(N25°W)と思われる。断面はゆるやかなU字形を呈する。埋土は灰褐色土、灰色シルト質土で、発掘区の北側でN115°Wの方向に屈曲して、SD5020に続くと思われる。溝の下端付近には、木杭や竹が打込まれた跡があり、溝の土留めの役割をしたと考えられる。Aはそのまま北へ続く。遺物は、A、Bで分けて取り上げることができていないが、近世～近代の碗、土瓶など陶器(写真112)と須恵器片(写真102)が出土しており、両溝には、時間的な差はあまりないと考えられる。第33図の3は広東碗底部、高台は短い。4は掛分碗である。

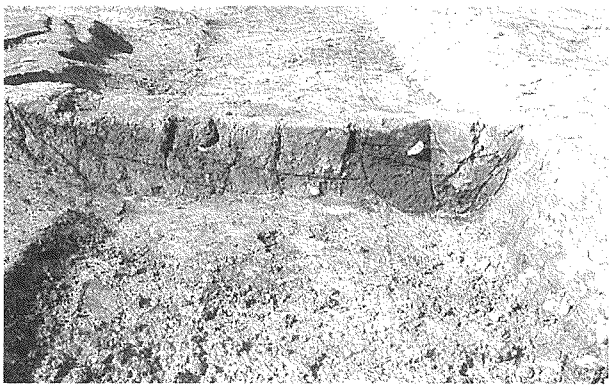
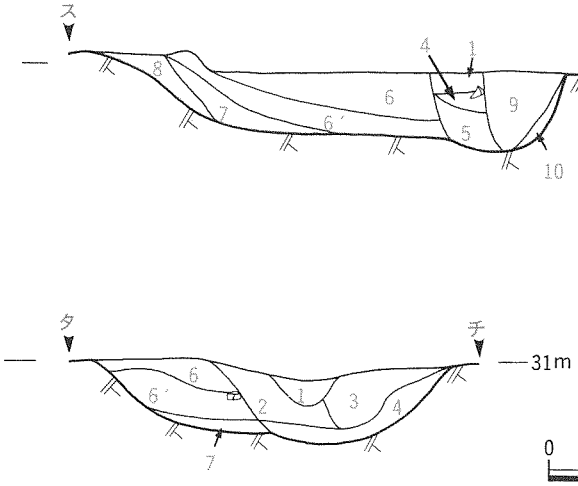


写真109　SD5002土層断面(南東から)

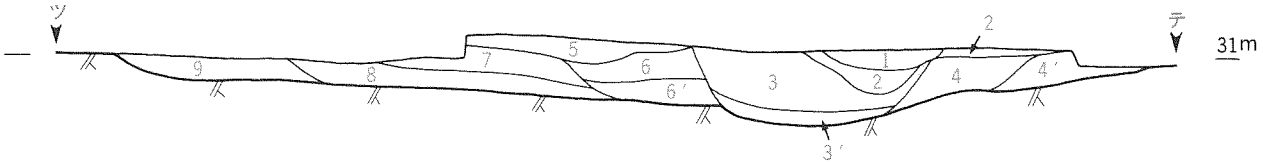
写真110　SD5020土層断面(北東から)



1　暗灰色土（シルト質）
2　淡灰褐色土（シルト質、鉄分の沈着がある）：SD5002Ｂ埋土
3　淡灰色土（礫を多く含む）：SD5002Ｂ埋土
4　暗灰色土（シルト質、鉄分の沈着がある）：SD5002Ｂ埋土
5　暗灰色土（砂質）：SD5002Ｂ埋土
6　淡灰褐色土（シルト質、黄褐色土粒が混じる）：SD5002Ａ埋土
6′　淡灰褐色土（６と類似するが、黄褐色土粒が6より多い）：SD5002Ａ埋土
7　淡灰色土（シルト質、黄褐色土粒が多く混じる）：SD5002Ａ埋土
8　淡褐色土（シルト質、鉄分の沈着がある）：SD5025埋土
9　灰褐色土（粘土質、礫を含む）
10　暗灰色土（灰黄色粘土塊が多く混じる）：SD5002Ｂ埋土

0　1 m

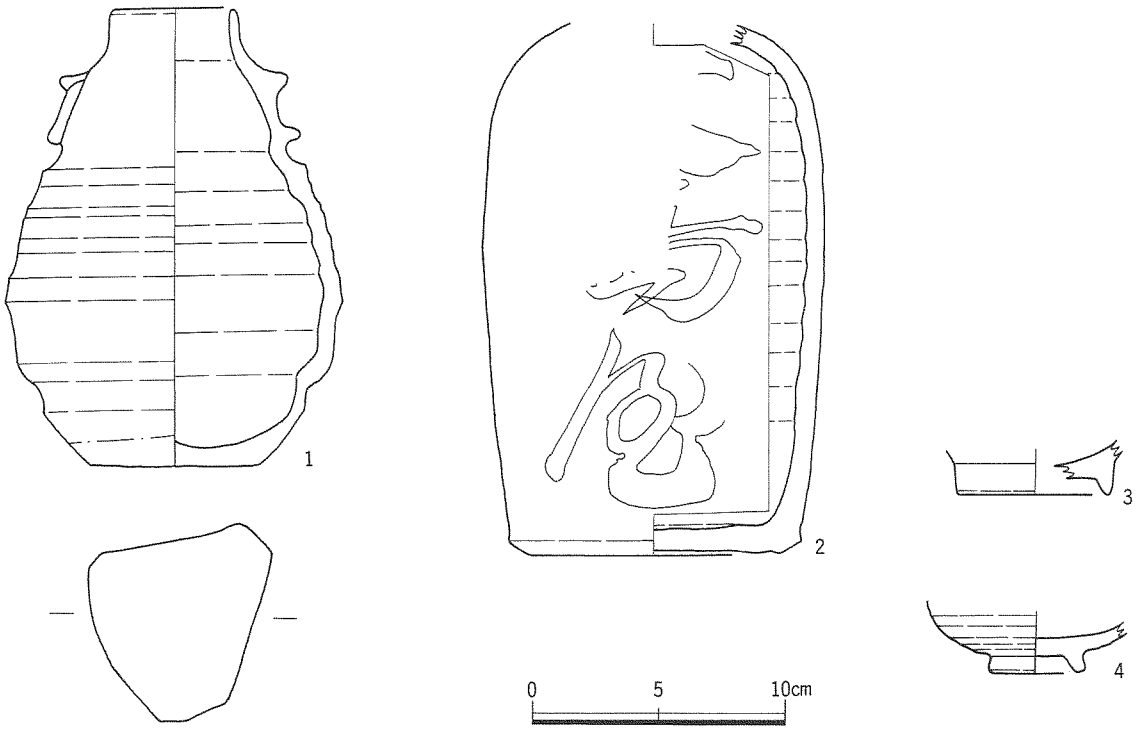
第31図　SD5002A・B土層断面図



0　1 m

1　暗灰色土（砂質、礫を含む）
2　淡灰色土（シルト質、黄白色土粒が混じる）
3　淡灰色土（シルト質、炭化物を含む）：SD5020埋土
3′　淡灰色土（３と類似し、鉄分の沈着がある）：SD5020埋土
4　淡灰褐色土（粘土質、鉄分の沈着がある）：SD5022埋土
4′　淡灰褐色土（4と類似し、黄褐色土粒が混じる）：SD5022埋土
5　淡褐色土（炭化物を含む、黄褐色土粒が混じる）
6　淡灰褐色土（シルト質、鉄分の沈着がある）：SD5021埋土
6′　淡灰褐色土（６と類似するが、鉄分の沈着は少ない）：SD5021埋土
7　茶褐色土：SK5093埋土
8　淡褐色土（黄褐色土粒が混じる）：SK5093埋土
9　灰褐色土（シルト質、黄褐色土粒が混じる）：SK5089埋土

第32図　SD5020～5022土層断面図



第33図　SD5001(1・2)・5002(3・4)出土の遺物

写真111　SD5001出土の遺物

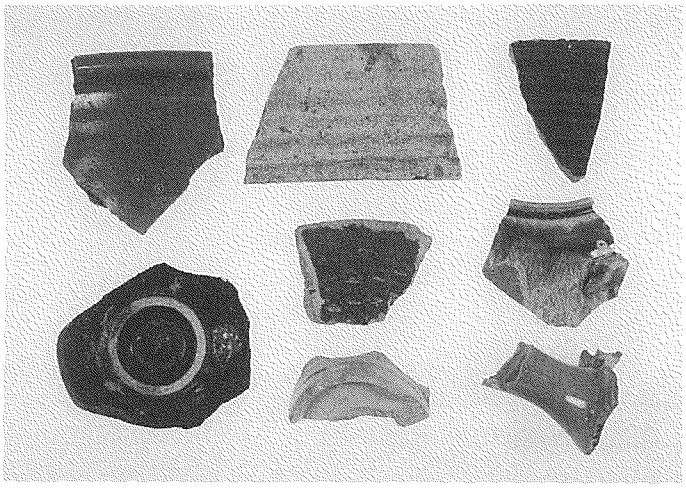
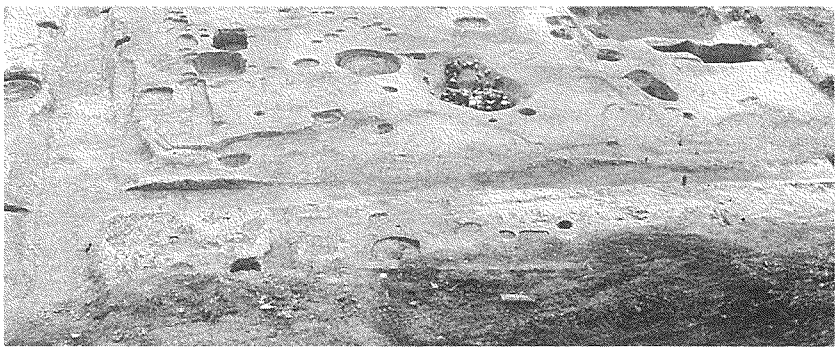


写真112　SD5002出土の遺物

写真113　SD5020(北西から)



SD5020

F16～E18Gr で、幅約１m、深さ約30cm、N115°Wの方向に検出された溝である。断面はゆるやかなU字形を呈する。SD5002Bから直角に曲り、A区 SD1012に続く可能性が高い。検出長は約14m、A区 SD1012と合わせると、検出長は約28mとなる。埋土はシルト質の淡灰色土で、下層は鉄分の沈着が見られる。南側は SD5021、北側は SD5022と重なっているが、SD5020がそれぞれの埋土を切ってつくられている。遺物は、土師器、須恵器、近世陶器の小片が出土している。

SD5021

SD5020の南側の肩部、F15～F18Gr で、N115°Wの方向に検出されている。東側では、幅約90cm、深さ約25cm、検出長約３mで、西側は SD5020と重なり、更に、SK5096と重なり止る。全検出長は約12.5mである。SD5020より以前の浅い溝状遺構であったと考えられる。埋土は、淡灰褐色土、下位は粘質が強くなる。須恵器片が出土し、SK5075出土の遺物と接合できるものがある。第29図の２は杯身(写真100)、八の字形に開く高台をもつ。１は長頸瓶の頸部(写真100)、沈線が１条ある。

SD5022

SD5020の北側の肩部、F15～F17Gr で、N115°Wの方向に検出されている。南肩は SD5020で壊されている。検出幅は約90cm、深さは15～25cm、検出長は約11.5mである。埋土は黄褐色シルト粒を含む淡灰褐色土である。SD5021と埋土や形状が似ていることから、ひとつの遺構とも考えられる。遺物は須恵器杯片(第29図３・４　写真101)、近世～近代陶器が出土している。

SD5010

H18・I19Gr で、L字形の溝が検出されている。幅約35cm、深さ最大で約７cm、N30°WからN120°Wの方向に屈曲する。検出長は、東側の溝が約3.6m、北側は約3.8mで SK5036に切られて終わる。溝底で、直径10～15cmの小穴が複数検出された。埋土は、淡褐色土で、遺物は発見されていない。この付近では、埋土が褐色土の穴が数基検出されているが、その配置に規則性は見いだせない。褐色土を埋土とする穴としては、SK5025、P5047、P5049、P5091、P5093、P5094などがある。

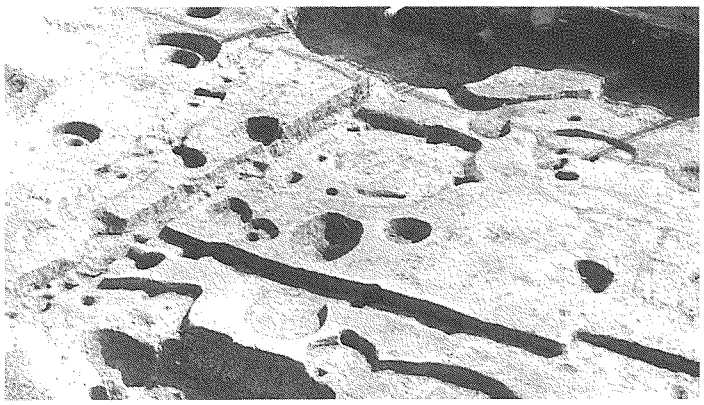


写真114　SD5010(北西から)

SK5025は、直径約90cm、10cmほどの深さで段が付き、中央が更に深くなる。中央の穴の直径は約50cm、深さは約５cmである。Ｐ5047は、直径約55cm、深さは約15cmで中央が更に約10cm深くなる。Ｐ5049は、直径約55cm、10cmほどの深さで段が付き、更に中央が深くなる。中央の径は約20cm、深さは約５cmである。Ｐ5093は、径55×75cm、深さ約15cmで中央に直径約35cm、深さ約６cmの穴がある。

SD5017

Ｅ18・Ｆ18Gr で、SD5021の南に重なって検出されている。検出幅は最大で約50cm、深さは約15cm、N30°WからN115°Wの方向に屈曲し、検出長は東側が約1.3m、北側が約１mである。埋土はSD5021と同様の淡灰褐色土で、須恵器片、近世陶器片が出土している。

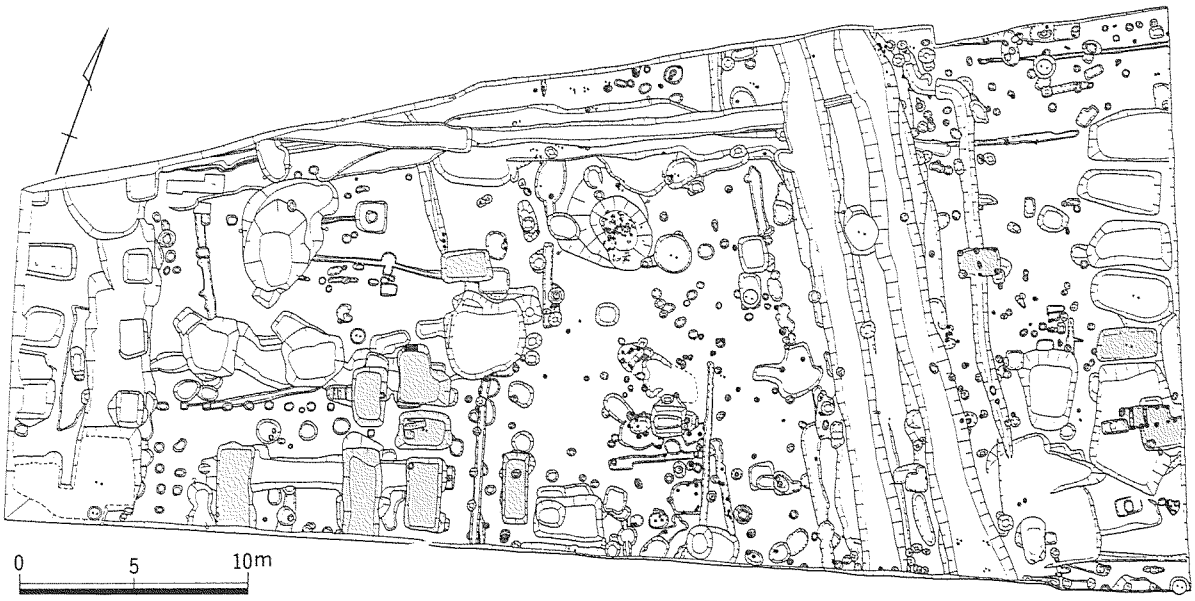
SD5018

Ｆ18Gr で、N30°Wの方向に検出されている。幅は約55cm、深さは最大で約10cm、検出長は約３mである。埋土は淡灰褐色土、須恵器片が出土している。この溝から南東側へは遺構が連続している。いずれの遺構もほぼ灰褐色土を埋土とし、東西方向の径は50～65cm、深さは５～10cmであり、土坑、溝、穴と区別をしたが、底面が不整形な１条の溝の可能性が高い。

防空壕

調査区の西側で２基(SK5045、SK5067)が検出されている。SK5045(Ｉ17Gr)は、長辺約3.1m、短辺約1.1m、深さは約80cm、主軸はN25°Wを向いている。北より中央に直径約40cm、深さ(底面より)約25cmの柱状の穴がある。陶製の人形や磁器碗などが出土している。SK5067(Ｇ16Gr)は、長辺約2.2m、短辺約1.4m、深さは約1.2m、主軸はN115°Wを向いている。

今回の調査では、Ａ・Ｅ-１・Ｅ-２区で10基の防空壕が発見されている。市街地の調査では防空壕が検出されることが多いが、Ａ区では20～30cmしか離れていない位置に連続してつくられている[註(1)]。規模や形状をみてみると、短辺は1.1～1.5m、長辺は２m代、３m代、それ以上となり、深さは、SK4011を除き、



第34図　防空壕

標高で30m前後と30.30m前後に分けられる。現地表は31.3mほどであり、防空壕をつくった時期と変わらないと考えると、深さは1.3～1.5m(SK1001・1002・1003・4001・5067)と1m(SK1004・1005・5045)となる。防空壕の中には、物を入れるためのものもあると思われる。SK4011はかなり浅いものだが、杭穴があることから物を入れておくものと思われる。防空壕の並びには一定の規則性があり、調査区南側の道路には並行或いは直交せず、東側の古くからある道路と並行或いは直交している。

空襲の記録によれば、矢田川を隔てた大幸町にあった三菱重工業名古屋発動機製作所の攻撃の余波を受け、小幡も度々被害にあっている[註(2)]。戦時中、この地がどのような様子であったかは不明であるが、これだけの防空壕を必要とする状況にあったと思われる。

その他

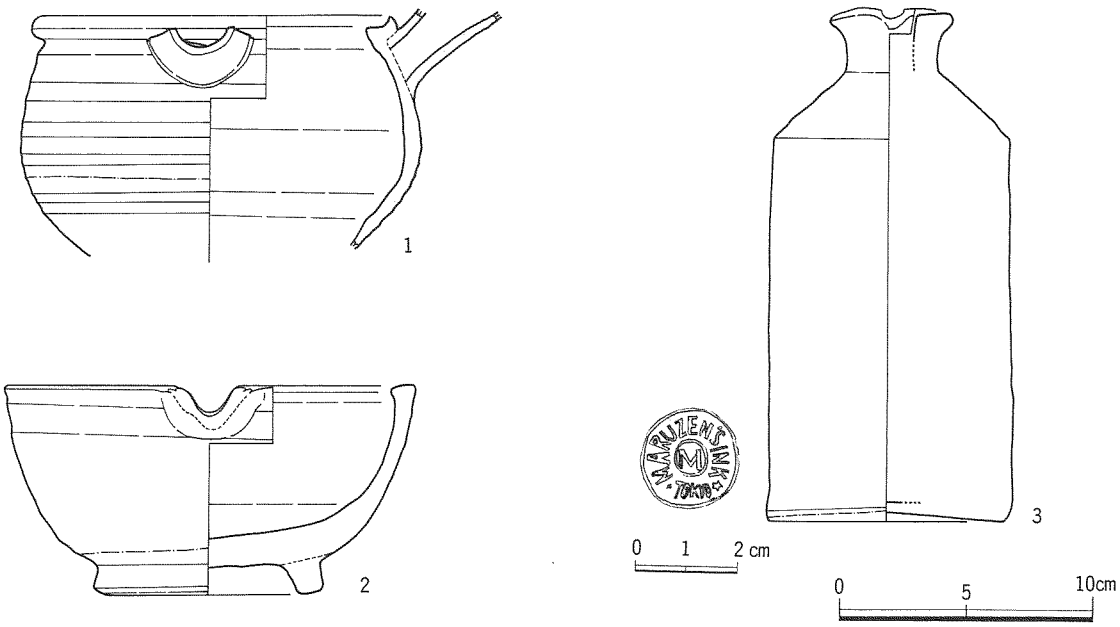
SK5004(F20Gr)は、SD5004(E-1区SD4007)の上にあった浅い土坑で、遺構の形状は残っていないが、第35図3の壺(写真116)が出土している。外面下に『MARUZEN 'SINK』の印が付いている。SK5009(D19Gr)からは、タイルや近世～現代陶磁器が多数出土している。第35図1・2はSK5009出土の片口鉢(写真117)である。SK5075の周囲にあるSK5054(G17Gr、埋土は暗灰褐色土)、P5130(G18Gr、埋土は地山の塊を含む灰褐色土)、P5162(E17Gr、暗灰褐色砂土)、P5167(F17Gr、埋土は淡褐色砂土)から須恵器片(第29図7はP5162、写真103はP5162とP5167)が出土している。

SD5010の曲がり角に位置するP5095(H18・19Gr)は、直径約55cm、深さ約10cm、褐色土を埋土とし、埋土中から第30図2の小皿(写真105)が出土している。また、調査区南西端で一部を検出したSK5046(I17・18Gr)は現代攪乱であるが、トロッコの車輪などがまとめて埋められている。地元の人の話によれば、このあたりに瀬戸線からの引込線があったという。廃止時に埋められたものと思われる。

写真115　SK5046(北から)

註(1)　情報局編輯　1943『寫眞週報　第283号　時局防空必携寫眞解説』によれば、待避所(防空壕)は一ケ所に大勢集ると万一の時の被害が大きいので、一ケ所5人ほどにして、分散してつくることが望ましいとあるために数が多いとも思われる。しかし、隣接し過ぎるものもや遺物のないものなどは、崩壊したためすぐ近くに掘られた可能性がある。

註(2)　守山郷土史研究会　1992「名古屋区史シリーズ⑫　守山区の歴史」愛知県郷土資料刊行会



第35図　5009(1・2)・SK5004(3)出土の遺物

写真116　SK5004出土のインク壺

写真117　SK5009出土の遺物

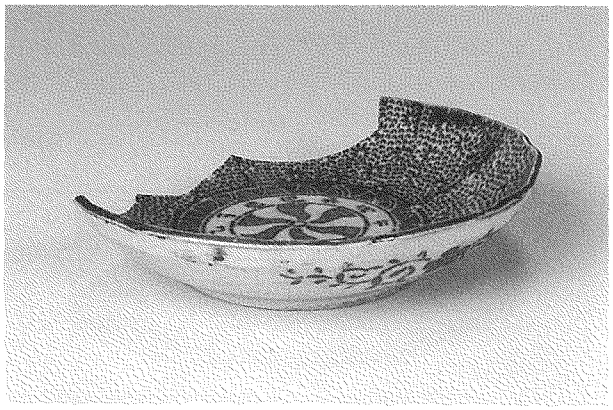


写真118　表土出土の皿

遺構一覧表

区　分	Gr 名	遺　構　名	径・幅	深　さ	標　高	方　位	備　　考
A	I 16	SK1001	160×360～	112	29.9	20	防空壕
A	H16	SK1002	150×250	112	29.99	20	防空壕 北西側階段
A	I 15・16	SK1003	150×260	135	29.76	20	防空壕 南西側階段
A	I 16	SK1004	160×250	78	30.33	110	防空壕 底部板敷
A	I 16	SK1005	150×320	82	30.3	20	防空壕
A	G15	SK1009	150×360～	121	30.73	20	
A	G14	SK1017	130×200	25	30.74	35	楕円形
A	G14	SK1018	280×400	44	30.67	20	楕円形
A	I 14・15	SD1005	40	5	31.03	120	
A	H15・G16	SD1006	25	5	31.03	105	台形
A	H14	SD1009	40	5	31.08	30	台形
A	G15	SD1010	20	3	31.07	115	
A	G15・16	SD1011	50	15	31.92	35	U字形
A	G13・14	SD1012	50	15	30.88	120	U字形
A	I 15	P1003	35×35	28	30.82	110	柱穴列1　方形
A	I 15	P1004	40	30	30.83		柱穴列1　円形
A	I 15	P1006	35×40	28	30.85		柱穴列1　楕円形
A	I 15	P1007	40×40	30	30.83		柱穴列1　円形
A	I 15	P1008	30×35	26	30.85		柱穴列1　楕円形
A	I 14	P1022	35×45	25	30.86		柱穴列1　楕円形
A	I 14	P1023	35×40	28	30.83		柱穴列1　方形
A	I 14	P1024	35×40	29	30.82		柱穴列1　方形
A	I 14	P1025	40×50	36	30.76		柱穴列1　長方形
A	J 14	P1016	40×45	32	30.83	20	柱穴列2　楕円形
A	J 14	P1019	40	32	30.81		柱穴列2　円形
A	J 14	P1021	45	34	30.8		柱穴列2　円形
A	J 14	P1028	30×40	32	30.82		柱穴列2　楕円形
A	J 14	P1015	40	38	30.75		円形
A	J 14	P1018	35×50	29	30.84		楕円形
A	J 14	P1020	40×65	30	30.81		不整形
A	J 15	P1026	40	28	30.85		
A	J 16	P1027	40	28	30.85		
A	H15	P1032	35	5	31.02		円形
A	J 14・15	P1053	90～	25	30.89	15	カマド
A	I・J13	P1054	70×30～	24	30.76		
BC	K12	SK2005	100×90～	27	30.8		
BC	K 8	SK2013	100	10	30.98		
BC	L 8	SD2004	55	30	30.48	20	台形
BC	J・K10	SD2005	40	5	31.02	20	
BC	L 8	P2016	35×40	29	30.5	105	柱穴列3　楕円形
BC	L 8	P2017	31×40	23	30.56		柱穴列3　楕円形
BC	M 8	P2018	40	32	30.48		柱穴列3　円形
BC	L・M 8	P2019A	33×40	31	30.49		柱穴列3　楕円形
BC	L 8	P2019B	30	34	30.46		柱穴列3　円形
BC	M 8	P2020	35～	27	30.5		柱穴列3
BC	M 8	P2021	40～	21	30.56		柱穴列3
BC	M 8	P2022	35～	22	30.55		柱穴列3
BC	K 8	P2043	45×45～	34	30.7		
BC	K 8	P2044	25×35	33	30.72	105	柱穴列4　楕円形
BC	K・L 8	P2045	33×30～	34	30.7		柱穴列4　方形
BC	L 8	P2046	24×32	30	30.74		柱穴列4　楕円形
BC	L 8	P2047	28×32	29	30.71		柱穴列4　楕円形
BC	L 7	P2048A	30×35	44	30.5		柱穴列4　方形

区　分	Gr 名	遺　構　名	径・幅	深　さ	標　高	方　位	備　　考
BC	L 7	P2048B	16×28	26	30.7		柱穴列 4　楕円形
BC	L 7	P2050	28×36	30	30.68		柱穴列 4　方形
D-1	N・O15	SK3102	260	5	30.82		円形
D-1	O15	SD3101	70	35	30.77	25	U字形
D-1	O14・15	SD3102	120	10	30.91	75	
D-2	O・P13	SD3203	30	10	30.74	25	U字形
D-4	Q10	SD3404	50	20	30.74	25	U字形
D-4	Q・R6～8	S X3401	650	40	30.45	20	方形
E-1	D・E20	SK4015	70×110	25	30.89	55	カマド
E-1	F・G22	SK4001	130×170～	90	30.34	115	防空壕 北西張出し
E-1	F20	SK4011	120×180	20	30.91	115	防空壕 柱穴
E-1	H22・23	SD4001	40	15	30.85	80	台形
E-1	D～G19～21	SD4007・9 SD5004・5	70	25	30.85	25～115	U字形
E-1	D・E20	SD4008	40	8	31.06	115	U字形
E-1	H23	P4001	30×35～	30	30.7	105	柱穴列 5　長方形
E-1	H22	P4002	33×33～	30	30.7		柱穴列 5　長方形
E-1	H22	P4003	37×45	40	30.68		柱穴列 5　長方形
E-1	H22	P4004	40	40	30.67		柱穴列 5　方形
E-1	H21・22	P4008	110×200	15	30.65		方形
E-1	D20	P4071	20×30	10	30.98		方形
E-2	F20	SK5004					消滅
E-2	D19	SK5009	50	15	30.94		方形
E-2	H19	SK5025	50～90	14	30.99		2重
E-2	I 17	SK5045	110×310	80	30.29	25	防空壕
E-2	G17	SK5054	105×105	16	30.95		方形
E-2	I 16	SK5063					A区SK1005
E-2	G16	SK5067	140×220	120	29.85	115	防空壕
E-2	F・G17	SK5075	230×340	60	30.49	45	楕円形
E-2	E17	SK5088	85	10	30.88		方形
E-2	F18	SK5089	60×250	15	30.87	120	不整形
E-2	G・H18	SK5092	100×120	20	30.89	70	カマド 不整形
E-2	F17	SK5093	220×330	10	30.89	75	方形？
E-2	F・G16	SK5096	170×370	20	30.85	105	楕円形
E-2	D18～H21	SD5001	190	50	30.53	30	逆台形
E-2	D18～H20	SD5002A	180	40	30.67	30	逆台形
E-2	D18～H20	SD5002B	80	40	30.65	25	U字形
E-2	H18・I 19	SD5010	35	7	31.02	30～120	台形
E-2	E・F18	SD5017	50	15	30.8	30～115	
E-2	E・F18	SD5018	55	10	30.95	30	U字形
E-2	F16～E18	SD5020	100	30	30.71	115	U字形
E-2	F15～F18	SD5021	90	25	30.78	115	
E-2	F15～F17	SD5022	90	20	30.85	115	
E-2	I 19	P5046	37×45	30	30.83		楕円形　2重
E-2	H19	P5047	55	25	30.85		円形　2重
E-2	H19	P5049	55	15	30.99		円形　2重
E-2	H18	P5091	40	10	31.02		円形
E-2	H18	P5093	55×75	21	30.89		楕円形　2重
E-2	H18	P5094	42	15	30.99		円形
E-2	H18	P5095	55	10	31.02		
E-2	G18	P5130	40	8	31.03		楕円形
E-2	E17	P5162	32×38	5	30.96		楕円形
E-2	F17	P5167	40				円形

遺物一覧表

調査区	遺構名	器　種　名	図版番号	写真番号	口径	底径	器高	備　　考
A	SK1001	徳利	13-1	22				
A	SK1001	徳利	13-2	22				
A	SK1001	タイル		23				破片、裏に少女の顔が書かれている
A	SK1002	燈明皿	13-3	25	7.9	2.3	3	磁器
A	SK1002	玩具・狐	13-7	24				磁器
A	SK1002	玩具・馬	13-5	24			4	磁器
A	SK1002	玩具・犬	13-6	24			4.1	磁器
A	SK1002	湯のみ	13-4	26	5.8	2.9	6.1	磁器、外面底部に『高辻聯区婦人會』
A	SK1003	碗		27	15.2		6.5	戦時中、磁器、厚手、『瀬474』
A	SK1005	陶製手溜弾		29	8.1		4.5	戦時中、上半分、厚さ8.5ミリ
A	SK1005	匣鉢蓋	13-8	28	18		3	
A	SK1009	陶製手溜弾		29	8.1		4	戦時中、下半分、厚さ8.5ミリ
A	SK1009	碗	13-12	30	10.2		7	戦時中、磁器、内側に星マーク、『名陶』
A	SK1009	碗		31	12		5.1	戦時中、磁器、見込みに『福』、『岐596？』
A	SK1009	碗	13-11	31	11.5		6	戦時中、磁器、外面底部に『岐？180』
A	SK1017	布目瓦						
A	SK1017	磁器片						
A	SK1018	布目瓦		12				
A	SK1018	須恵器杯蓋		13				
A	SK1018	須恵器杯瓶		13				
A	SK1018	須恵器甕		13				
A	P1008	焼台		16				
A	P1008	焼台		16				
A	P1032	須恵器杯		21				糸切り底部
A	P1052	須恵器杯						
A	P1052	土師器片						
A	P1054	徳利		33				幡の字あり
A	P1054	匣鉢	13-9	32		15		
A	攪乱坑	匣鉢	13-10	34		14		輪トチンの跡、底部突出
A	表土	陶製キセル		35				戦時中、長さ9cm、『岐463』
A	表土	一銭		37				大正11年
A	表土	須恵器蓋		36				
A	表土	山茶碗	13-13	36				12世紀後半
B	SK2005	陶製卸し金		44	8.2	9.5	12	『瀬251』
B	SD2004	碗	15-1	43		4.7		褐釉
B	SD2004	火入れ	15-2	43		9.6		灰釉
C	P2043	匣鉢		45				円形
C	P2048A	匣鉢		45				円形
C	P2048A	匣鉢		45				方形
D-1	SD3101	碗	18-2	57		3.7		近世～近代、染付丸碗
D-1	SD3101	碗	18-1	57		3.7		近世～近代、染付腰折碗
D-1	SD3101	蓋	18-3	57				近世～近代、染付
D-1	SD3101	碗		57				近世～近代、灰釉、鉄釉の掛分け
D-1	SD3101	すり鉢		57				底部
D-1	SD3101	すり鉢		57				
D-1	SD3101	瓦		58				布目瓦
D-1	SD3101	常滑甕						
D-1	SD3101	須恵器甕		58				
D-1	SD3101	須恵器甕		58				
D-1	SD3101	須恵器瓶？		58				
D-1	SD3102	すり鉢		59				口縁部、受け口状
D-1	SD3102	窯道具		59				ツク？、手づくね
D-2	SD3203	すり鉢		60				
D-2	SD3203	碗		60				近世～近代、鉄釉、灰釉の掛分け
D-2	SD3203	碗		60				近世～近代、染付腰折碗
D-2	SD3203	陶器		60				
D-4	SX3401	須恵器		61				
E-1	SD4001	火打石	23-1	69				近世～近代、チャート製、幅2.5cm
E-1	P4008	碗		70	10.2		4.9	磁器、見込みと外側に『福』
E-1	P4008	匣鉢		71				方形の箱形
E-1	P4008	蓋		70	3.3		2.5	磁器

調査区	遺構名	器　種　名	図版番号	写真番号	口径	底径	器高	備　　考
E-1	P4071	碗	23-2		17.8		4.5	戦時中、磁器、外側に星マーク
E-1	表土	山茶碗	23-3	72		7.8		12世紀後半
E-2	SK5004	インク壺	35-3	116	4	9.1	20.2	鉄釉、横に『MARUZEN'SINK TOKYO』
E-2	SK5009	片口鉢	35-2	117	16.1	7.1	8.3	近世～近代、灰釉、高台に煤付着
E-2	SK5009	片口鉢	35-1	117	14.8			近世～近代、黄褐色、灰釉、底部方に煤付着
E-2	SK5009	香炉			4.7	4.6	4.6	磁器、緑色、三足は内部からの押出し
E-2	SK5063	陶製手溜弾						戦時中、下部の半分
E-2	SK5075	須恵器蓋	27-2	80	8.6		1.9	灰白色
E-2	SK5075	須恵器蓋	27-1	81	16.8			暗褐色、ヘラ削り
E-2	SK5075	須恵器杯	27-4	85	16	10.3	4	暗灰色、ヘラ削り
E-2	SK5075	須恵器杯	27-5	83	16.3	11.8	4.4	暗肌色、ヘラ削り
E-2	SK5075	須恵器杯	27-3	84	14	11.6	4	淡肌色、底部外面に板状圧痕
E-2	SK5075	須恵器杯	27-6	82	13.8	11	5.9	暗灰色、底部外側ヘラ削り
E-2	SK5075	須恵器杯	27-7	86		6.2		淡灰白色、碗か、糸切り痕
E-2	SK5075	須恵器高杯	27-8	89	7.7			杯部、灰白色、ヘラ削り
E-2	SK5075	須恵器高杯	27-9	90				脚部、灰白色
E-2	SK5075	須恵器横瓶	27-13	91	12.2		22	淡青灰色、叩き目
E-2	SK5075	須恵器鉢	27-12	92	31.5			青灰色、叩き目
E-2	SK5075	須恵器甕	28-2	96	23.8			口縁部、暗灰色
E-2	SK5075	須恵器甕	28-4	94	23.8			口縁部～上胴部、暗灰色
E-2	SK5075	須恵器甕	28-1	93	28.4			青灰色、外面に『黒見田○○』
E-2	SK5075	須恵器甕	28-3	96				口縁部、暗灰色
E-2	SK5075	須恵器甕	28-5	96				底部、淡灰色
E-2	SK5075	須恵器甕		95				胴部、桃褐色、焼成不良
E-2	SK5075	須恵器長頸瓶	27-10	87				青灰色
E-2	SK5075	須恵器長頸瓶	27-11	87				灰白色
E-2	SK5075	石製模造品	28-6	88				滑石製、小穴が1孔、幅1.6cm、厚4mm
E-2	SK5075	石製模造品						滑石製、小穴が1孔、幅1.5cm、厚2.5mm
E-2	SK5089	須恵器杯		97				
E-2	SK5089	須恵器甕		97				
E-2	SK5089	須恵器瓶？		97				
E-2	SK5089	小瓶	30-1	105		3.3		近世～近代
E-2	SK5093	須恵器杯	29-5	98				青灰色、椀か
E-2	SK5093	須恵器甕	29-6	98				暗青灰色、口縁部
E-2	SK5096	須恵器		99				
E-2	SK5096	山茶碗						底部
E-2	SD5001	花瓶	33-1	111	5	6.5	18	底部は三角形
E-2	SD5001	徳利	33-2	111		10		
E-2	SD5001	須恵器甕		102				
E-2	SD5002	須恵器甕		102				
E-2	SD5002	須恵器杯		102				
E-2	SD5002	広東碗	33-3	112		5.9		近世～近代
E-2	SD5002	火鉢		112				
E-2	SD5002	土瓶		112				近世～近代
E-2	SD5002	碗	33-4	112		3.6		近世～近代、鉄釉と灰釉の掛分け
E-2	SD5002	卸し皿		112				近世～近代、錆釉
E-2	SD5002	香炉？		112				
E-2	SD5002	匣鉢		112				蓋
E-2	SD5020	須恵器片						
E-2	SD5021	須恵器杯	29-2	100	12.8	7.8	2.9	青灰色
E-2	SD5021	須恵器長頸瓶	29-1	100				頸部
E-2	SD5022	須恵器杯	29-3	101				灰白色
E-2	SD5022	須恵器杯	29-4	101				灰白色
E-2	SD5022	須恵器瓶		101				底部
E-2	P5088	須恵器片						
E-2	P5093	須恵器片						
E-2	P5095	小皿	30-2	105	10.7	5.5	2.3	長石釉、高台削り出し
E-2	P5162	須恵器杯	29-7	103				青灰色
E-2	P5167	須恵器瓶		103				
E	表採	皿		118	14.5	7.6	3.5	磁器

Ⅳ　ま　と　め

本遺跡では、おそらく近代以降に包含層が削平され、ほとんどの遺構が近代以降の造作によるものであった。そのため、古代あるいは中世遺物の出土は、近世や近代の陶器が混じる状態の溝や土坑などからと、深く掘られた土坑２基からいう結果にとどまった。

古代遺物の包含層を想定させる土は、褐色土(もしくは淡褐色土)と黒褐色土であり、褐色土は、部分的ではあるが厚み５㎝程の面としての広がりがＥ－２区中央付近などで確認された。遺構の埋土が褐色土となるものとして、H18・Ｉ19Gr で小穴が検出されるが、これらからの出土遺物はなく、SK5075の北東に位置するＰ5167と、SK1018の東に位置するＰ1032から須恵器片が出土しているのみある。また、黒褐色土を埋土とする遺構は、SK5075の以外には、検出されていない。

検出された主な遺構は、その主軸(長辺)の方位から、次のようなグループに細別をすることができ、その配置状況に規則性を伺い知ることができる。なお、遺跡付近の道路等の方位は、名古屋鉄道瀬戸線が約Ｎ105°W、瀬戸街道が約Ｎ110°W、Ｅ区東側道路が約Ｎ25°Wである。

①主軸方位Ｎ15°W・Ｎ105°Wの遺構

柱穴列３・４・５(Ｎ105°W)

Ｐ1053(Ｎ15°W)：カマド

SK5096(Ｎ105°W)

SD1006(Ｎ105°W)

②主軸方位Ｎ20°W・Ｎ110°Wの遺構

柱穴列１(Ｎ110°W)、柱穴列２(Ｎ20°W)

SK1018(Ｎ20°W)：須恵器と布目瓦

SK1001・1002・1003・1005・1009(Ｎ20°W)、SK1004(Ｎ110°W)：防空壕

SD2004(Ｎ20°W)：19世紀代陶器

SD2005(Ｎ20°W)

SX3401(Ｎ20°W)：近代陶器

③主軸方位Ｎ25°W・Ｎ115°Wの遺構

SK4001・4011(Ｎ115°W)：防空壕

SK5045(Ｎ25°W)・SK5067(Ｎ115°W)：防空壕

SD1010(Ｎ115°W)

SD3101(Ｎ25°W)：須恵器、布目瓦、19世紀代陶器

SD3203(Ｎ25°W)：19世紀代陶器

SD3404(Ｎ25°W)：近代陶器

SD4007(Ｎ25°W)、SD4009(Ｎ115°W)：近代陶器

SD4008(Ｎ115°W)

SD5002B(Ｎ25°W)、SD5020(Ｎ115°W)：須恵器、近世～近代陶器

SD5021・5022(Ｎ115°W)：須恵器、近世～近代陶器

④主軸方位N30°W・N120°Wの遺構

SK5089(N120°W)：須恵器、19世紀代陶器

SD1005(N120°W)、SD1009(N30°W)

SD1012(N120°W)：須恵器、近世～近代陶器

SD5001(N30°W)：須恵器、近世～現代陶器

SD5002A(N30°W)：須恵器、近世～近代陶器

SD5010(N30°W～N120°W)

SD5017(N30°W～N115°W)：須恵器、19世紀代陶器

SD5018(N30°W)：須恵器

⑤主軸方位N35°Wの遺構

SK1017(N35°W)：布目瓦、近代陶器

SD1011(N35°W)：近代陶器

⑥主軸方位N45°Wの遺構

SK5075(N45°W)：須恵器

⑦主軸方位N55°Wの遺構

SK4015(N55°W)：カマド

⑧主軸方位N70°Wの遺構

SK5092(N70°W)：カマド

⑨主軸方位N75°Wの遺構

SD3102(N75°W)

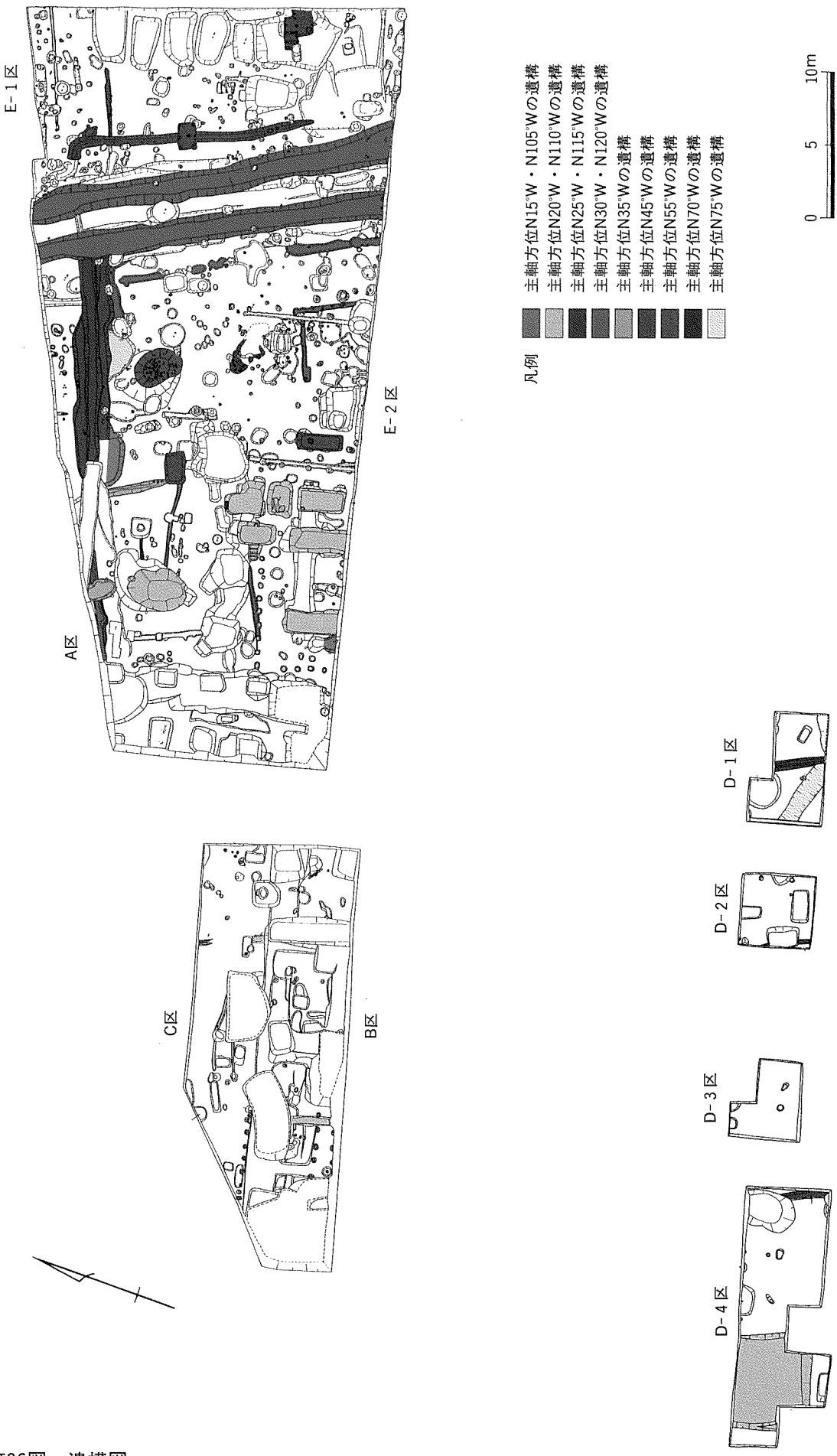
SK5093(N75°W)：須恵器、近世陶器

以上のように、ほとんどの遺構が道路や線路と平行あるいは直交の関係にある、①から④に区分される。これらは、SK1018を除いて、出土遺物からも明らかに近代以降の遺構と考えられる。

①から④に区分される遺構の中には、防空壕を始めとする戦時中の遺構が多くあると考えられ、その際の配置には、道路や線路が意識されたものと思われる。防空壕や柱穴列は、戦時中あるいは以前の小幡駅北東側での構造物の存在を示しており、出土遺物も大正時代以降の近代陶器や現代陶器が主であり、「瀬戸電気鉄道」の開通後、線路の北側が開発されたことを伺い知ることができる。

溝状遺構は、大正12年の地図(第4図)にあるE区東側の道路と配置が関係する、主軸方位③のものと、④に区分されものがある。ほとんどの溝は、須恵器や19世紀代陶器などが混入出土する溝もあるが、明治時代以降に造られたと考えられる。江戸時代は、犬山城主成瀬隼人正の所領地であり、著しい開墾は無いと思われる。そのため、明治以降に畑としての開墾を進めるにあたって水路が必要とされ、古代遺物を包含する土層が次第に削平されたようである。SD5001の南側やSD5020の両側で木杭が発見され、これらは水路の土留めをした痕跡であろう。また、SD3102のように大きく方位が異なる溝状遺構もあるが、これは、明治33年の地図(第3図)にある道(線路辺りから南東方向に曲る)、あるいは地割に関連する可能性があると思われる。幅の狭い溝状遺構は、畑の地割に関連するものであろう。

楕円形状の土坑は、その方位に異なりが大きくあり、配置の関連を推測することを難しくしている。特


E-1区
A区
E-2区
C区
B区
凡例
主軸方位N15°W・N105°Wの遺構
主軸方位N20°W・N110°Wの遺構
主軸方位N25°W・N115°Wの遺構
主軸方位N30°W・N120°Wの遺構
主軸方位N35°Wの遺構
主軸方位N45°Wの遺構
主軸方位N55°Wの遺構
主軸方位N70°Wの遺構
主軸方位N75°Wの遺構
0
5
10m
D-1区
D-2区
D-3区
D-4区

第36図　遺構図

に、カマドは、出土遺物もなく、その目的を推測する手がかりがない。古代遺物が出土した土坑に、SK1017・SK1018・SK5075・SK5089・SK5093などがある。SK5089とSK5093では、おそらく近代以降のSD5021・5022の造作時に、須恵器や近代陶器片が混入したものと思われる。特に、SK5088やSK5093には、SK5075出土の須恵器甕との接合可能な破片が含まれ、SK5075の埋土上層が近代以降に削平されたことを示すと判断できる。古代の遺物のみが出土した、SK1018とSK5075の方位関連が、古代の遺構配置を検討する上で意味があると想定したが、規則性を示していない結果となっている。これらの土坑の主軸方位に、配置が関連する小穴の並び等があれば、発掘調査の主目的である小幡廃寺に関連する遺構を推測できることになるが、古代遺物を出土する遺構があまりにも少ない結果であった。従って、古代の遺跡の様相は不明なままであり、古代の遺構密度が希薄であった可能性もあるが、一方で、近世以降の開墾あるいは開発による包含層や遺構の削平が甚だしい状況で進んだことを伺い知ることができる。

しかし、SK5075出土の須恵器は、文字が刻まれる甕を含め、貴重な資料となった。

SK5075出土の須恵器は、20数個の握り拳大の礫とともに出土し、一括廃棄された状態を示していた。遺物は、褐色土中から細片が少量出土し、黒褐色土層を掘り下げる段階から次第に出土量が増え、淡灰黄褐色土層でほぼ全体の器種が発見された。出土した須恵器の特徴をみてみると、蓋は、大小あり、器高が低く、端部を折返したものでかえりがみられず、つまみは偏平なものである。杯は有台杯と無台杯があり、有台杯は、高台は底部の端に付けられ、外側に八の字状に開き、底部中央が突出している。無台杯は、器高は高く平底である。また、体部の形状は不明だが、糸切り痕が残る杯がある[註(1)]。台付長頸瓶と思われる器種がある。これらの特徴から、猿投窯編年のC－2窯式に該当すると考えられる。しかも、高蔵寺2・3号窯では、口縁部にヘラ書きのある甕が報告されている[註(2)]。SK5075出土の文字の書かれている甕と文字は違うが、位置が同じであり、興味深い結果である。

SK5075出土の甕の「黒見田□□」と判読される文字は、市内で同じ文字の3点目の出土資料となった。他の2点は、天白区戸笠1号窯(NN105号窯)出土の須恵器鉢[註(3)]と、中区正木町遺跡出土の須恵器長頸瓶[註(4)]がある。鉢は、外底面に「黒見田」と刻書され、窯の時期については、最終段階をC－2号窯式期と報告されている[註(5)]。長頸瓶も、外底面に「黒見田」と刻書され、8世紀頃と報告されている。また、奈良県石神遺跡からも、おそらく同音の読み方で「黒見太」と刻書される須恵器盤底部が出土している[註(6)]。これらは、窯の出土品があることから、戸笠1号窯あるいはその周辺の古窯で生産されたものと考えられている[註(7)]。「黒見田」または「黒見太」の文字が意味する内容が、地名か人名なのか解読はされていない。

今回、さらに甕の資料が発見され、既に指摘されるように[註(8)]、古代律令制国家の整備が進むと同時にその税制が確立し始め、中央官衙や地方国衙へ器種が異なる製品の納入あるいはこれらに貢献品を入れての納入がされた背景を追認できるものと考えられる。律令体制下の尾張国において、名古屋市域はほぼ山田郡と愛智郡に属し、当地方での窯跡で、刻書や記号がある須恵器を生産する地域として、猿投窯鳴海支群(NN288号、戸笠1号窯など)と尾北窯(高蔵寺2・3号窯)があり、その製品が中央官衙や地方国衙へ供給されたとされる。SK5075出土甕の「黒見田□□」は、「黒見田(小)(川)」の字体を表記しているようにも見うけられるが、「黒見田」の内容が地名か人名なのかを解読する手がかりも表記している可能性もあるものの、筆者には判読できない。今回出土の資料と、市内発見の他の2点の字体を見比べると、これら資料いずれも筆跡が異なるように思われ、同一工人によって描かれたとは考えにくいことは明らかである。

写真119　NN105窯出土の須恵器

写真120　正木町遺跡出土の須恵器

中区正木町遺跡と小幡遺跡に共通する時代背景を理解する周辺遺跡として、尾張元興寺跡と小幡廃寺や小幡花ノ木廃寺の存在がある。尾張元興寺が7世紀中頃から後半にかけて造営され、8世紀前半頃に小幡廃寺、小幡花ノ木廃寺が造営されたと考えられている。

正木町遺跡から尾張元興寺跡に至る遺跡範囲は、弥生時代後期から近世までの遺跡密度が濃い地域で、古代以降にあって、後の鎌倉街道沿いにもなり、交通の要所である。古代律令制国家の体制が整備される時期において、尾張元興寺(地方行政機関としての役割)の造営に関与した勢力として、尾張連の存在が浮び上がってくる[註(9)]。

一方、小幡遺跡についても、春部郡(現在の春日井市方面)等に至る交通の要所にあり、周辺に小幡廃寺や小幡花ノ木廃寺が造営され、正木町遺跡と類似する点がある。SK5075出土の須恵器の時期は8世紀前葉にあたり、小幡廃寺の創建とほぼ同時期と思われることから、寺の造営に関与した勢力が、小幡遺跡の周辺に存在したと考えることができよう。その勢力を推測するにあっては、小幡花ノ木廃寺が尾張国分寺と同型式の軒瓦が使用されたと指摘されること[註(10)]や、また、小幡花ノ木廃寺から出土した文字が刻まれる瓦などに、手がかりを見出すことが可能かもしれない。小幡という地名は、秦氏の存在を連想させるという考え方[註(11)]があり、「黒見田(小？)(川？)」の文字内容が地名か人名かを解読する糸口かもしれない。

このように、小幡遺跡は、後世の破壊が著しい状態であったものの、たいへん貴重な資料を出土した。しかし、遺跡の様相を解明する遺構がほとんどない状態になっていたことは、残念な結果であった。

註(1)　NN288号窯(尾野善裕 1993 『NN288号窯・NN289号窯発掘調査報告書』名古屋市教育委員会)では、糸切り痕が残る杯等が報告されている。NN288号窯はC-2窯式に位置付けられているが、I-41窯式に属するとの見解が、斎藤孝正 1995 「I　東海西部」『須恵器集成図録　第三巻　東日本編I』 雄山閣 等にある。

註(2)　城ケ谷和弘 1996 「律令体制の形成と須恵器の生産―7世紀における瓦陶兼業窯の展開―」『日本考古学　第3号』日本考古学協会

註(3)　小島一夫　1977『NN105、NN321号窯発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

註(4)　竹内宇哲　1986『正木町遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

註(5)　柴垣(柴垣勇夫　1997『新修名古屋市史　第1巻』「第8章第4節」名古屋市　P784)によれば、NN105号窯は、I-17号窯式期からI-41号窯式期にあたるという。

註(6)　西口壽生　1994「石神遺跡出土の箆書き土器」『奈良国立文化財研究所年報1993』奈良国立文化財研究所

註(7)　柴垣勇夫　1997『新修名古屋市史　第1巻』「第8章第4節」名古屋市　P783・784

註(8)　柴垣勇夫　1997『新修名古屋市史　第1巻』「第8章第4節」名古屋市　P784・785

註(9)　梶山　勝　1997『新修名古屋市史　第1巻』「第6章第4節」名古屋市　P593・594

註(10)　梶山　勝　1997『新修名古屋市史　第1巻』「第6章第4節」名古屋市　P610・611

註(11)　福岡猛志　1997『新修名古屋市史　第1巻』「第6章第5節」名古屋市　P612・613

参考文献

斉藤孝正　1995「I　東海西部」『須恵器集成図録　第三巻　東日本編I』　雄山閣

尾野善裕　1997「V尾張・三河・遠江・美濃」『古代の土器5-1　7世紀の土器』　古代の土器研究会

尾野善裕　1997「5　東海」『古代の土器研究』古代の土器研究会第5回シンポジウム―発表資料集―

服部哲也　1994『尾張元興寺発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

名古屋市文化財調査報告　既刊目録

I	H-101号古窯跡発掘調査報告	1973
II	古沢町遺跡発掘調査報告―弥生時代編―	1974
III	御影町古窯跡群発掘調査報告	1974
IV	有松町並み調査報告	1975
V	NKI-34号古窯跡発掘調査報告	1975
VI	徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告書	1976
VII	光真寺古窯跡発掘調査報告書	1979
VIII	小幡古墳発掘調査報告書	1980
IX	NN-278号古窯跡発掘調査報告書	1981
X	民俗文化財調査報告書（名古屋市内の山車と神楽）	1981
XI	NN-314号古窯跡発掘調査報告書	1981
XII	NN-282号古窯跡発掘調査報告書	1982
XIII	NN-268号古窯跡発掘調査報告書	1983
XIV	笹ケ根古墳群発掘調査報告書	1984
XV	民俗文化財調査報告書（名古屋の石造物）	1985
XVI	天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書	1985
XVII	尾張元興寺遺跡発掘調査報告書	1985
XVIII	天白・元屋敷遺跡第二次発掘調査報告書	1986
XIX	吉根地区埋蔵文化財発掘調査報告書	1986
XX	高蔵遺跡発掘調査報告書	1987
21	白鳥古墳第II次発掘調査報告書	1989
22	志段味地区民俗調査報告書	1989
23	茶臼山古墳発掘調査報告書	1990
24	埋蔵文化財発掘調査報告書	1993
25	鳴海地区須恵器窯発掘調査報告書	1994
26	名古屋市山車調査報告書１（筒井町湯取車）	1994
27	NN330号窯発掘調査報告書	1994
28	尾張元興寺跡発掘調査報告書	1994
29	名古屋市山車調査報告書２（若宮まつり　福禄寿車）	1995
30	名古屋市山車調査報告書３（牛立天王まつり　牛頭天王車）	1996
31	埋蔵文化財調査報告書24（伊勢山中学校遺跡　第５次発掘調査）	1996
32	埋蔵文化財調査報告書25（高蔵遺跡　第８次・第９次他）	1996
33	名古屋市山車調査報告書４（有松まつり　布袋車・唐子車・神功皇車）	1997
34	埋蔵文化財調査報告書26（高蔵遺跡　第12次～第15次）	1997
35	埋蔵文化財調査報告書27（天白元屋敷遺跡　第３次）	1997
36	埋蔵文化財調査報告書28（小幡遺跡　第１・２次）	1998

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	小幡遺跡（第１・２次）
巻次	28
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	36
編著者名	山田鉱一・野口泰子
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457-0026　愛知県名古屋市南区見晴町47　Tel 052-823-3200
発行機関	名古屋市教育委員会
所在地	〒460-8508　愛知県名古屋市中区三の丸三丁目１番１号　Tel 052-972-3268
発行年月日	西暦　1998年３月20日

所収遺跡名（ふりがな）	所在名（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
小幡遺跡（おばたいせき）	名古屋市（なごやし） 守山区小幡南（もりやまく おばたみなみ） 一丁目（いっちょうめ）	23100	1-173	35° 11′ 50″	136° 58′ 44″	1996.2.13～3.29 1996.4.8～6.25 1997.1.6～2.21	約500 約580 約550	駅前再開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小幡遺跡	散布地	８世紀	土坑	須恵器 瓦	ヘラ描き文字のある甕片

名古屋市文化財調査報告36

埋蔵文化財調査報告書28

小幡遺跡（第１・２次）

1998年３月20日発行

編　集　名古屋市見晴台考古資料館

発　行　名古屋市教育委員会

TEL 052-972-3268 FAX 052-972-4178

印　刷　西濃印刷㈱

有料　200部